

平成11年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

たて屋敷遺跡
古見道遺跡
中沢遺跡
岩野原A遺跡
馬寄遺跡周辺地
山伏塚遺跡
舞臺遺跡
横土居遺跡
稲荷浦遺跡
西吉津川遺跡
天神林地内

2000

新潟県加茂市教育委員会

平成11年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

たて屋敷遺跡
古見道遺跡
中沢遺跡
岩野原A遺跡
馬寄遺跡周辺地
山伏塚遺跡
舞臺遺跡
横土居遺跡
稻荷浦遺跡
西吉津川遺跡
天神林地内

2000

新潟県加茂市教育委員会

序

現在、加茂市内には約160余りの遺跡が知られていますが、昭和60年以前は極めて少ない数しか知られていませんでした。遺跡が多く確認されはじめたきっかけは、いずれもいろいろな開発事業に関係してですが、昭和60～61年に主に七谷地区を、平成7年にそれ以外の地区を中心にして行われた詳細分布調査にあります。この調査は遺跡分布図の基礎を作ったと言え、今日まで埋蔵文化財行政の要となっています。

これらの遺跡内や周辺で様々な開発が計画され、遺跡が壊れてしまうなど影響が認められる場合は、本書で報告するような、部分的な試掘・確認調査を実施し、その工事における遺跡への影響や遺跡の中身を明らかにしていきます。そして、遺跡に影響のない工法に変更したり、変更が不可能な場合には本発掘調査を実施することもあります。本発掘調査は遺跡の記録保存の方策でありますから、調査を行っても遺跡は二度と本来の姿にはもどりません。発掘調査も大きく見れば、遺跡を破壊している行為とも考えられます。私たちは、自然環境の保全と共生が叫ばれるように、遺跡も後世の人々によりよい形で守り、繋げていく使命を課せられている思いがいたします。

加茂市教育委員会では、平成7年度から加茂市内遺跡確認調査を実施しておりますが、本年度はその5年次目にあたり、七谷～須田地区までの広範囲で9遺跡・1遺跡周辺地・1地内が対象となりました。本事業を開始して、最高の調査件数となりました。各遺跡の細かな内容までは明らかにできませんが、出土した土器は各地域の歴史を裏付ける貴重な資料となることでしょう。本書はこうした事業により得られたささやかな報告ですが、各地域の歴史を知る手掛かりとなり、遺跡保護のため活用されることがあれば、この上なく幸いなことであります。

最後に、本事業に格別なるご配慮をいただいた新潟県教育庁文化行政課をはじめ、調査に従事された調査員、作業員各位、ならびに調査にご理解、ご協力いただいた事業者、地権者及び工事関係者に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成12年5月

加茂市教育委員会

教育長 土 佐 弘

例 言

1. 本報告書は、平成11年度に新潟県加茂市内の各種開発に伴い実施した9遺跡・1遺跡周辺地・1地内における試掘・確認調査の記録である。本事業は「加茂市内遺跡発掘調査」として平成7年度から継続している。
2. 調査は、たて屋敷遺跡・古見道遺跡が県営中山間地域農村活性化総合整備事業、中沢遺跡・岩野原A遺跡・馬寄遺跡周辺地が民間開発、同じ中沢遺跡・山伏塚遺跡・舞臺遺跡が道路建設事業、横土居遺跡・稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡・天神林地内が吉津川地区県営ほ場整備事業に係わり、事前協議資料を得るために実施したものである。
3. 試掘・確認調査の経費は、国庫及び県費の補助金交付を受けた。
4. 調査は加茂市教育委員会が主体となり、実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教 育 長	土 佐 弘
総 括		社会教育課長	田 澤 弘 一
管 理		社会教育課課長補佐	相 田 喜一郎
庶 務		社会教育課主事	遠 山 一 貴
調査担当		社会教育課主事	伊 藤 秀 和
副調査員		日々雇用職員	山 田 昇
調査補助員		日々雇用職員	鈴木 進・瀧澤 裕・難波 涉
現場作業員	小畑茂雄・小柳金蔵・加茂良男・牛腸弘志・小室喜代次・近藤良弘・佐藤喜一・珊瑚順一・茂野丈夫・高橋清三郎・高橋 武・高橋 弘・田下清治・鶴巻英一・鶴巻 信・中野清二・番場敏治・福井清吾・目黒與志康（加茂市シルバー人材センター会員）		
整理作業員	前崎朋子・増井君子・横山敦子・吉田 晃・涌井恵子・渡辺宏美（日々雇用職員）		

5. 本調査により出土した遺物や図面・写真などは加茂市教育委員会が一括して保管している。
6. 本報告書の編集・執筆はすべて伊藤が行ったが、遺物写真撮影及び編集の一部については山田昇、鈴木進の補助を受けた。また、VIについては(株)パリン・サーヴェイに資料の分析と執筆を委託した。
7. 本書で示す方位は第9、11、16、18、30図を除いて真北である。磁北は真北から西偏約7°10'である。
8. 写真図版で用いた空中写真は、図版1が(財)日本地図センター発行で建設省国土地理院が昭和40年11月に撮影した縮尺約1/20,000、図版4が(財)日本地図センター発行で米軍が昭和22年11月に撮影した縮尺約1/16,000のものである。
9. 第3表遺物観察表の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』をもとに記述した。
10. 発掘調査から本書の作成にあたり、下記の諸氏・機関から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。(敬称省略・五十音順、機関などは順不同)

安藤正美・大橋信彦・小熊博史・尾崎高宏・小田由美子・春日真実・金子拓男・金子正典・坂上有紀・笹澤正史・澤田敦・関 正平・高橋雅弘・高花宏行・田畑 弘・田村浩司・立木宏明・寺崎裕助・鳴海忠夫・水澤幸一・渡邊朋和・加茂市シルバー人材センター・加茂市農林課・加茂市建設課・加茂市都市計画課・三条農地事務所・三条土木事務所・三条土地改良区・(株)小柳建設・(株)山忠・(株)渡辺建材・(株)日本コムシス・(株)丸五技研・新潟県教育庁文化行政課・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

目 次

I	序 説	1
1	平成11年度事業の概要	1
2	遺跡の位置と環境	2
II	県営中山間地域農村活性化総合整備事業関連	3
1	調査に至る経緯	3
2	たて屋敷遺跡第2次調査	3
	（1）遺跡と発掘調査の概要	3
	（2）層 序	4
	（3）遺構と遺物	5
	（4）調査のまとめ	5
3	古見道遺跡	6
	（1）遺跡と発掘調査の概要	6
	（2）層 序	6
	（3）遺構と遺物	6
	（4）調査のまとめ	6
III	民間開発関連	7
1	調査に至る経緯	7
2	中沢遺跡	7
	（1）遺跡と発掘調査の概要	7
	（2）層 序	8
	（3）遺構と遺物	11
	（4）調査のまとめ	16
3	岩野原A遺跡	16
	（1）遺跡と発掘調査の概要	16
	（2）層 序	18
	（3）遺構と遺物	18
	（4）調査のまとめ	18
4	馬寄遺跡周辺地	18
	（1）遺跡と発掘調査の概要	18
	（2）層 序	18
	（3）遺構と遺物	19
	（4）調査のまとめ	19
IV	道路工事関連	20
1	調査に至る経緯	20
2	山伏塚遺跡	20
	（1）遺跡と発掘調査の概要	20
	（2）層 序	21
	（3）遺構と遺物	21
	（4）調査のまとめ	21

3	中沢遺跡	22
	(1) 遺跡と発掘調査の概要	22
	(2) 層 序	22
	(3) 遺構と遺物	23
	(4) 調査のまとめ	27
4	舞臺遺跡	27
	(1) 遺跡と発掘調査の概要	27
	(2) 層 序	28
	(3) 遺構と遺物	28
	(4) 調査のまとめ	28
V	吉津川地区県営ほ場整備事業関連	29
1	調査に至る経緯	29
2	横土居遺跡・稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡・天神林地内	31
	(1) 遺跡と発掘調査の概要	31
	(2) 層 序	31
	(3) 遺構と遺物	31
	(4) 調査のまとめ	32
VI	自然科学分析	33
1	はじめに	33
2	試 料	33
3	分析 方法	33
	(1) 胎土分析	33
	(2) 付着物分析	33
	1) 分析試料の調製	33
	2) 赤外線吸収スペクトルの測定	34
4	結 果	34
	(1) 胎土分析	34
	(2) 付着物分析	34
5	考 察	34
	(1) 胎土について	34
	(2) 付着物について	36
VII	ま と め	37
1	平成11年度調査成果について	37
2	中沢遺跡と平安時代の土器について	37
	引用・参考文献	39
	遺物観察表	40
	報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図	調査対象遺跡位置図 (S = 1 / 100,000)	2
第2図	たて屋敷遺跡・古見道遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)	3
第3図	たて屋敷遺跡推定範囲と確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 2,000)	4
第4図	たて屋敷遺跡土層柱状図	5
第5図	たて屋敷遺跡表採・出土遺物	5
第6図	古見道遺跡推定範囲と確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 2,000)	6
第7図	古見道遺跡土層柱状図	6
第8図	中沢遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 20,000)	8
第9図	中沢遺跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 1,000)	9
第10図	中沢遺跡土層柱状図	9
第11図	中沢遺跡確認調査トレンチ遺構配置図 (S = 1 / 80)	10
第12図	中沢遺跡遺構出土遺物	12
第13図	中沢遺跡遺構外出土遺物	13
第14図	中沢遺跡遺構外出土遺物	14
第15図	岩野原A遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 10,000)	16
第16図	岩野原A遺跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 600)	17
第17図	岩野原A遺跡土層柱状図	17
第18図	岩野原A遺跡1トレンチ遺構平面図 (S = 1 / 80)	17
第19図	岩野原A遺跡出土遺物	17
第20図	調査対象地点と周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 20,000)	18
第21図	馬寄遺跡周辺地確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 600)	19
第22図	馬寄遺跡周辺地土層柱状図	19
第23図	馬寄遺跡周辺地出土遺物	19
第24図	山伏塚遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)	21
第25図	山伏塚遺跡推定範囲と確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 2,000)	21
第26図	山伏塚遺跡土層柱状図	21
第27図	中沢遺跡と調査対象地点 (S = 1 / 20,000)	22
第28図	中沢遺跡道路建設工事部分確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 1,000)	23
第29図	中沢遺跡道路建設工事部分土層柱状図	24
第30図	中沢遺跡道路建設工事部分確認調査トレンチ遺構配置図 (S = 1 / 80)	24
第31図	中沢遺跡道路建設工事部分出土遺物	25
第32図	中沢遺跡道路建設工事部分出土遺物	26
第33図	舞臺遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 20,000)	27
第34図	舞臺遺跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 1,000)	28
第35図	舞臺遺跡土層柱状図	28
第36図	舞臺遺跡出土遺物	28
第37図	天神林地内遺跡位置図 (S = 1 / 20,000)	29
第38図	横土居遺跡・稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡・天神林地内確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 4,000)	30
第39図	天神林地内土層柱状図	32
第40図	天神林地内出土遺物	32
第41図	土器付着物のIRスペクトル	35
第42図	中沢遺跡土師器無台椀口径・底径分布図	38
第43図	中沢遺跡土師器無台椀法量分布図	38

写真図版目次

図版 1	たて屋敷遺跡 たて屋敷遺跡・古見道遺跡周辺の空中写真、15トレンチ周辺近景 南から、18～26トレンチ周辺近景 北から、調査風景、調査風景
図版 2	たて屋敷遺跡 1トレンチ土層断面 南から、5トレンチ土層断面 北から、8トレンチ土層断面 北から、12トレンチ土層断面 西から、15トレンチ土層断面 南から、26トレンチ土層断面 南から 工事立ち会い状況、出土遺物
図版 3	古見道遺跡 遺跡遠景 東から、遺跡遠景 南西から、調査風景、調査風景、2トレンチ土層断面 南から、6トレンチ土層断面 西から、8トレンチ土層断面 東から、10トレンチ土層断面 西から
図版 4	中沢遺跡 中沢遺跡周辺の空中写真、調査地遠景 南西から、調査地近景 南から、調査風景、調査風景
図版 5	中沢遺跡 1トレンチ土層断面 東から、2トレンチ土層断面 東から、3トレンチ遺構確認状況 南西から、3トレンチ土層断面 南西から、4トレンチ遺構完掘状況 東から、4トレンチ土層断面 北西から、5トレンチ土層断面 南東から、6トレンチ土層断面 北東から
図版 6	中沢遺跡 7トレンチ遺構完掘状況 東から、8トレンチ土層断面遺構完掘状況 北東から、8トレンチ中層面遺構確認状況 北東から、8トレンチ下層面遺構完掘状況 北から、8トレンチ土層断面 南東から、9トレンチ遺構完掘状況 北東から、9トレンチ土層断面 北東から、10トレンチ遺構完掘状況と土層断面 北東から
図版 7	中沢遺跡 出土遺物
図版 8	中沢遺跡 出土遺物
図版 9	中沢遺跡 出土遺物
図版10	岩野原A遺跡 調査地近景 北から、調査風景、調査風景、1トレンチ遺構確認状況 南東から、1トレンチ遺構完掘状況 北から、5トレンチ土層断面 南から、工事立ち会い状況、出土遺物
図版11	馬寄遺跡周辺地 調査地近景 北から、調査風景、1トレンチ土層断面 南西から、1トレンチ完掘状況 西から、2トレンチ完掘状況 西から、3トレンチ土層断面 南西から、3トレンチ完掘状況 西から、出土遺物
図版12	山伏塚遺跡 調査地近景 北から、調査風景、調査風景、1トレンチ土層断面 北から、2トレンチ土層断面 東から、3トレンチ土層断面 南から、4トレンチ土層断面 東から、4トレンチ深掘状況 北から
図版13	中沢遺跡 調査地近景 北から、調査風景、1トレンチ土層断面 東から、2トレンチ土層断面 東から、2トレンチ遺構確認状況 東から、3トレンチ遺構確認状況と土層断面 北から、4トレンチ深掘状況 東から、5トレンチ遺構確認状況と土層断面 南から
図版14	中沢遺跡 出土遺物
図版15	中沢遺跡 出土遺物
図版16	舞臺遺跡 調査地近景 南東から、調査風景、調査風景、1トレンチ土層断面 南東から、2トレンチ土層断面 南東から、3トレンチ土層断面 南から、3トレンチ完掘状況 北西から、出土遺物
図版17	横土居遺跡・稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡・天神林地内 21・22トレンチ周辺近景 南西から、27・34トレンチ周辺近景 東から、調査風景、調査風景、2トレンチ土層断面 南から、6トレンチ土層断面 北から、7トレンチ土層断面 南から、9トレンチ土層断面 北から
図版18	横土居遺跡・稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡・天神林地内 11トレンチ土層断面 北から、16トレンチ土層断面 南から、20トレンチ土層断面 南から、23トレンチ土層断面 南から、26トレンチ土層断面 西から、30トレンチ土層断面 西から、32トレンチ土層断面 東から、出土遺物
図版19	自然科学分析 胎土薄片

表 目 次

第 1 表	平成11年度発掘調査工程表	1
第 2 表	胎土薄片観察結果	34
第 3 表	遺物観察表	40

I 序 説

1 平成11年度事業の概要（第1表）

本年度は、年度当初から把握していなかった事業に関係した確認調査が5件も発生し、対応に苦慮することになった。当初から計画していた事業では平成7年度から確認調査が開始された大谷地区の県営中山間地域農村活性化総合整備事業があり、本年度が最終年度で2遺跡を対象として調査を実施した。他は県道整備と都市計画道路建設に係わり3遺跡、民間開発に係わり2遺跡と1遺跡周辺地、吉津川地区県営ほ場整備事業に係わり3遺跡と1地内、合計8事業に対し、9遺跡と1遺跡周辺地、1地内を対象に年度当初から遺跡の規模・内容を確認するための市内遺跡確認調査事業を実施した。本年度は当該事業の5年次目に当たるが、様々な開発が同時に進行しているため過去最多の確認調査件数となった。

大谷地区の県営中山間地域農村活性化総合整備事業については、平成7年度から試掘・確認調査を事業計画に合わせ継続的に進めてきたが、本年度は昨年度に引き続いてのたて屋敷遺跡と古見道遺跡を対象に実施した。調査結果からは本調査の必要性は認められなかったが、たて屋敷遺跡地内については一部立ち会い調査を行った。

道路建設関係では県道整備に係わり須田地区にある山伏塚遺跡、都市計画道路建設に係わり中沢遺跡、舞臺遺跡を対象に実施した。都市計画道路建設については早期に事業計画が明らかであったが、開発部局との連絡調整が不徹底のため、調査直前期によく協議を行うこととなった。また、中沢遺跡については法線内の用地買収済区域を対象に1回目の調査を実施したが、遺跡の範囲が不明確でもあり、さらに用地買収を待って、2回目の調査を実施し、遺跡の範囲確認に努めた。

民間開発については年度当初から把握したものではなく、適宜協議を整え実施した。中沢遺跡については、平成9年度にも調査原因となった工場増設工事が別地点で再開されるに及び、新たに確認調査を実施し、その結果から一部分発掘調査を行った。岩野原A遺跡は携帯電話通信鉄塔工事に、馬寄遺跡周辺地は社屋建設工事にそれぞれ係わり確認調査を実施したもので事業面積も狭く、1日で終了した。

吉津川地区県営ほ場整備事業においては、昨年度創設非農用地のみを対象に確認調査を実施したが、本年度は予定地内北部から進めるという農地側からの要望に合わせ、横土居遺跡、稲荷浦遺跡、西吉津川遺跡の3遺跡と三条市地内～加茂天神林地内にまたがる遺跡推定地に対し、結果によっては本調査が必要になることが明らかな排水路部分のみを対象とし実施した。いずれも稲刈りを待たねばならないこと、馬越遺跡発掘調査と並行してい

遺跡名・調査次	遺跡の主な時代	平成11年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成12年	2月	3月
		3月										1月		
確認調査														
たて屋敷遺跡第2次	中世		—											
古見道遺跡	縄文		—											
山伏塚遺跡	不明		—											
中沢遺跡	弥生～近世			—			—		—					
岩野原A遺跡	縄文				—									
舞臺遺跡	中世						—							
馬寄遺跡周辺地	古墳										—			
天神林地内											—	—		
稲荷浦遺跡	古代										—	—		
横土居遺跡	古代											—	—	
西吉津川遺跡	古代											—	—	
本発掘調査														
中沢遺跡	弥生～近世				—									
馬越遺跡	奈良・平安													

第1表 平成11年度発掘調査工程表

ることから12月中旬に調査を開始したが、降雪があり、翌年1月にかけて断続的に実施せざるを得なかった。

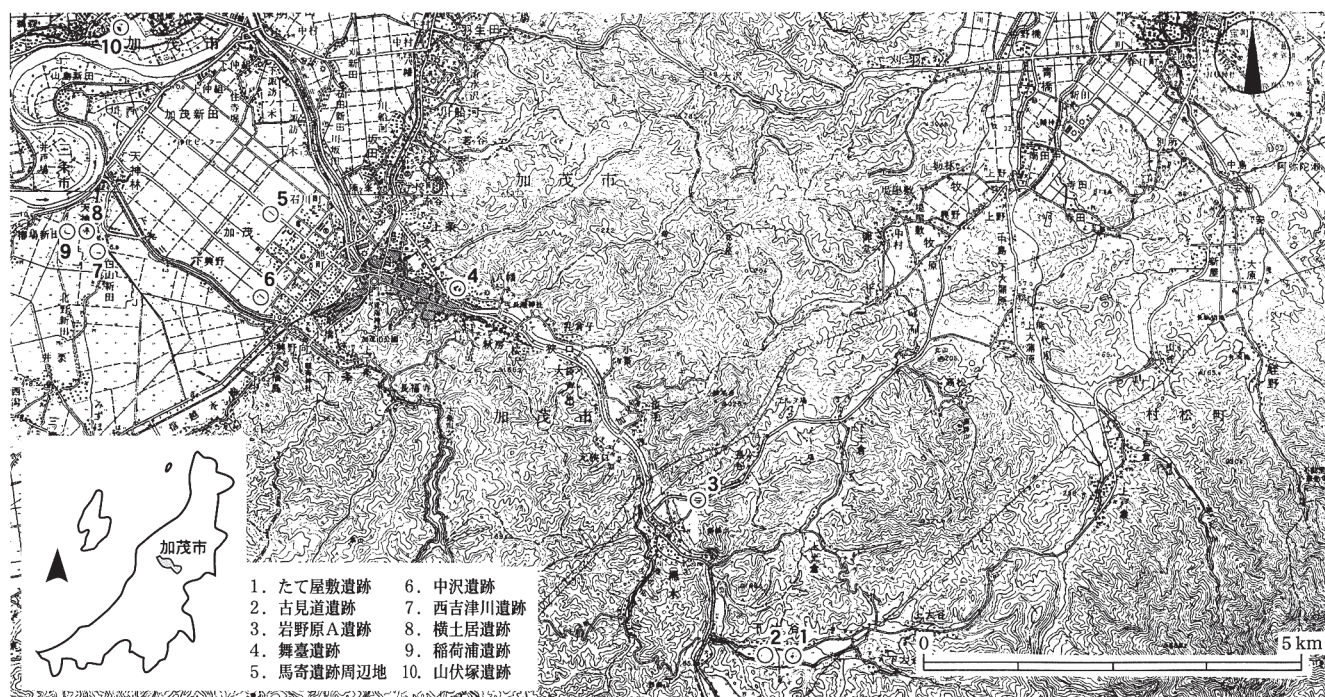
2 遺跡の位置と環境 (第1図)

新潟県のほぼ中央部に位置する加茂市は、東西方向に細長い形状の行政区域で、東部に粟ヶ岳、権ノ神岳など1,000m級の山地がそびえ、粟ヶ岳を源とする加茂川が支流を集めて谷底平野を抜け信濃川に注いでいる。加茂川及びその支流は上流部の主として七谷地区で狭小ながら段丘を形成し、縄文時代の人々の活発な生活痕跡が確認されている。岩野原A遺跡周辺はその中でひととき平坦面が広がる加茂川右岸に展開する台地で、旧石器時代から縄文晩期までの遺物が採集され、恰好の生活適地であったことが窺える。古見道遺跡、たて屋敷遺跡は七谷の中で一番可耕地に恵まれた大谷地区に存在し、小規模ながら縄文時代の遺跡が比較的多く知られている。なかでも、たて屋敷遺跡は中世山城跡が顕著に見られる当地にあって稀少な館跡の可能性を秘めた遺跡である。

七谷を抜けた加茂川中流域右岸を中心とするところに上条地区がある。加茂川に面し谷や沢が入り込んだ東山丘陵の一角に立地した上条城跡周辺には中世期の遺跡が多数確認されている。舞臺遺跡もそのひとつで、平成8年に発掘調査が行われ、河川跡を中心に中世前期の豊富な遺物が出土している。古くからの町場はこの辺りから丘陵沿いにかけて形成されたが、現在の市街地は加茂川が谷底平野を抜けて発達させた扇状地形に立地する。

この扇状地～さらに低地のいわゆる平野部において濃密に遺跡が存在することが明らかになったのは平成7年度に行われた詳細分布調査と近年の開発に伴う確認調査などの成果からである。下条川右岸にある中沢遺跡については、平成9年度に確認調査が行われ、平安時代を主体とし、さらに深い層位から弥生時代後期の遺物が出土する平野の活動・開発を考える上で重要な遺跡であると認識されていた〔伊藤1998〕。馬寄遺跡も平野部に存在する古墳時代前期を主体とする遺跡である〔伊藤1997 a〕。横土居遺跡、稲荷浦遺跡、西吉津川遺跡は下条川と信濃川の合流地点に近い、現在の天神林地区集落の後背地に立地する古代～中世の遺跡である。

山伏塚遺跡は市域北西部で信濃川を越えた須田地区に所在する。須田地区は白根市と接し、信濃川と中之口川に囲まれた地点にある。須田地区での遺跡はあまり多く知られておらず、中世以前の遺跡の様相は不明である。



第1図 調査対象遺跡位置図 (S = 1 / 100,000)

II 県営中山間地域農村活性化総合整備事業関連

1 調査に至る経緯

市教委は本事業に関係した埋蔵文化財の取り扱いについて、平成6年度から三条農地事務所及び加茂市農林課と協議等を開始し、平成7年度に既周知遺跡の再確認と未周知遺跡の存在を考慮した分布調査を実施した。その結果をもとに協議を継続し、平成7年度には上大谷地内160㎡、草生津遺跡第1次65㎡、平成8年度は蚊口太遺跡第1次270㎡、寺屋敷跡160㎡、平成10年度はたて屋敷遺跡第1次176㎡、蚊口太遺跡第2次461㎡、草生津遺跡第2次88㎡、伝涌泉寺跡遺跡28㎡の合計5遺跡、1地点を対象に1,408㎡の試掘・確認調査を実施してきたところである〔伊藤1996・1997a・1999〕。

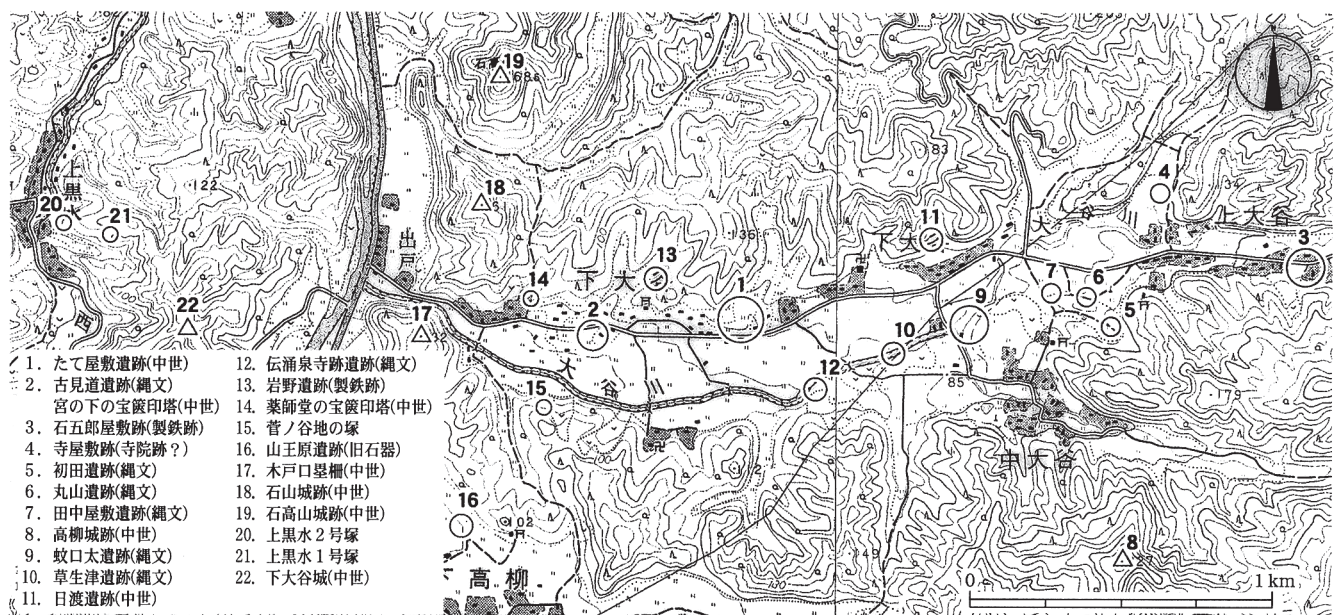
本年度の確認調査は当該事業に係わる最終年度で前年度に引き続きたて屋敷遺跡、古見道遺跡を対象に実施した。市教委は平成11年4月5日付けで両遺跡の文化財保護法第98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を県教育庁文化行政課長宛に行い、確認調査を開始した。

2 たて屋敷遺跡第2次調査

(1) 遺跡と発掘調査の概要(第2・3図)

たて屋敷遺跡は加茂市大字下大谷字岩野ほかの地籍で、山麓から舌状に伸びる台地と大谷川右岸の平地に所在する。現況はほとんどが水田であるが、台地部分を中心に畑地が存在する。遺跡はあたりに残る「館屋敷」、「町屋敷」などの地名や畑地において中世陶器が採集(第5図1)されたことなどから遺跡として把握され、地籍図の検討からは町屋の名残と考えられる細長い短冊状の地割りが確認できるという指摘もなされていた〔高橋1997〕。しかしながら、平成10年度に実施した確認調査では全く遺跡の痕跡が確認できない状況であり、考古学的な成果は得られていない状況であった〔伊藤1999〕。

調査は年度当初から開始すべく準備を進め、雪消え間もない4月5日から実施した。現況水田部においては、任意の約2m×5mの試掘坑を0.3㎡のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施し

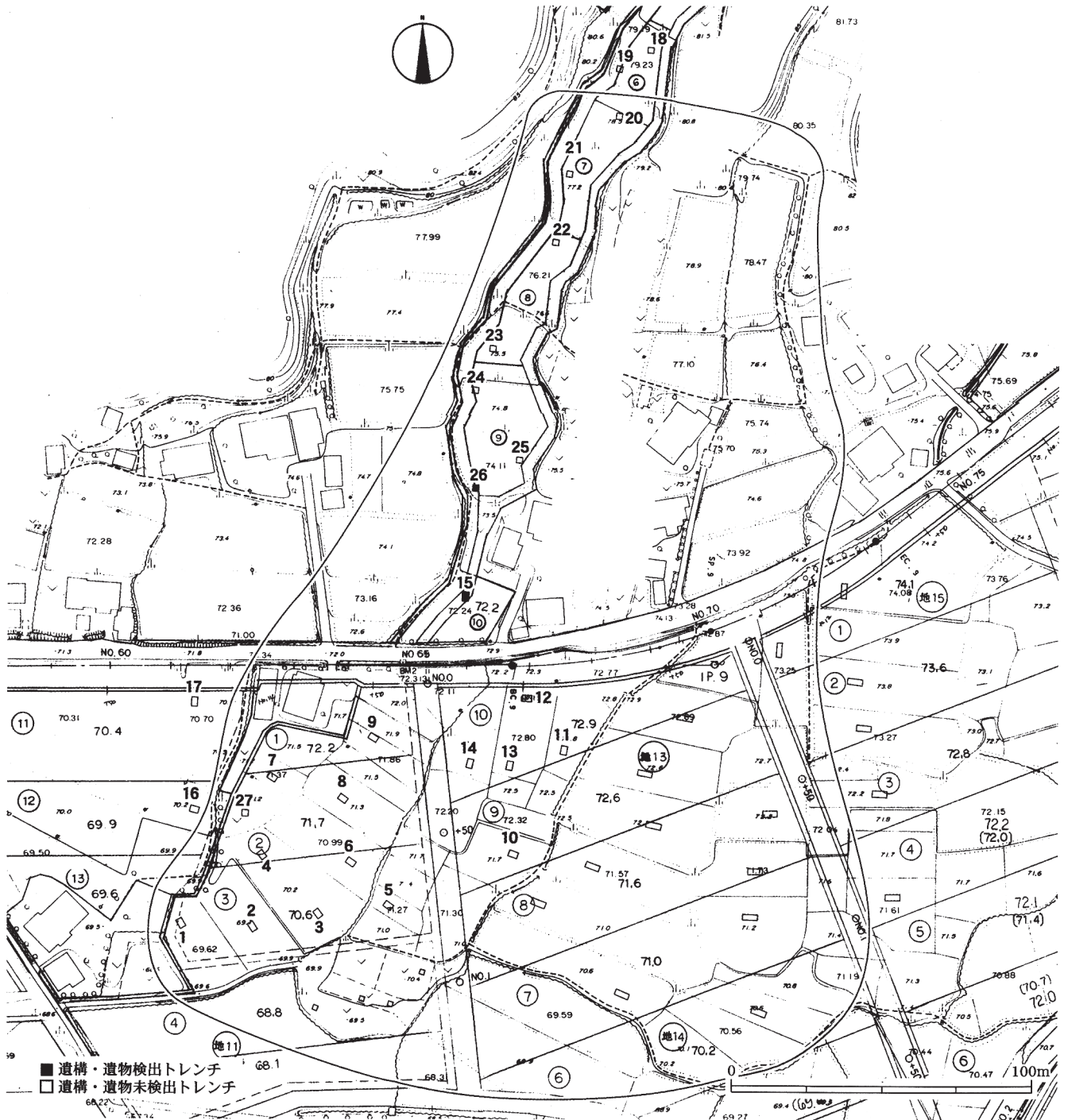


第2図 たて屋敷遺跡・古見道遺跡と周辺の遺跡位置図(S=1/25,000)

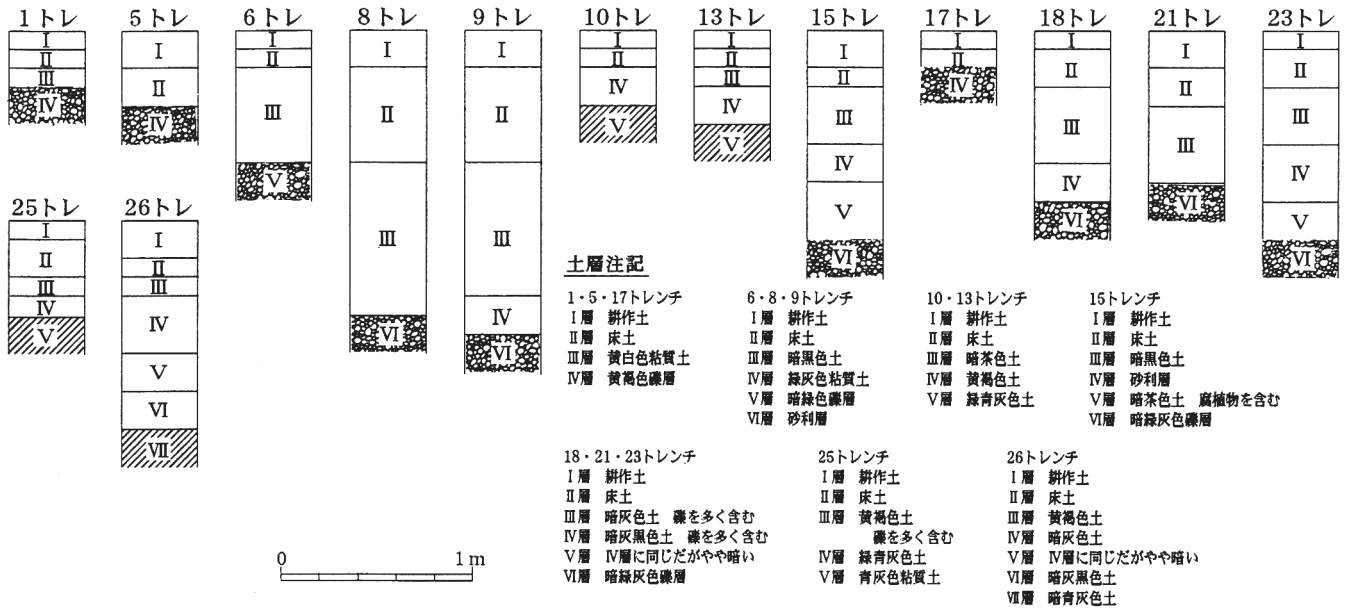
たが、重機の搬入が困難であった18～26トレンチの水田部分及び畑地については約2m×2mの試掘坑を人力で掘削し、調査を行った。合計27トレンチ、約100㎡の調査を行った。調査終了後、本調査の必要がない場合はすぐに工事に着手することから休耕していたため、川砂等は入れずそのまま埋め戻して終了した。

(2) 層序(第4図)

地形の差異などから地点により土層堆積状況は異なる。沢状地形を呈する18～24トレンチでは小礫を含んだ土層が顕著で、地山面まで約1m程の層がある。この沢状地形に連なるとされる2・8・9トレンチでも地山面まで約1.5m程の層が見られる。現況畑地部分においては地盤が安定しているようで、地山面まで概して浅い。



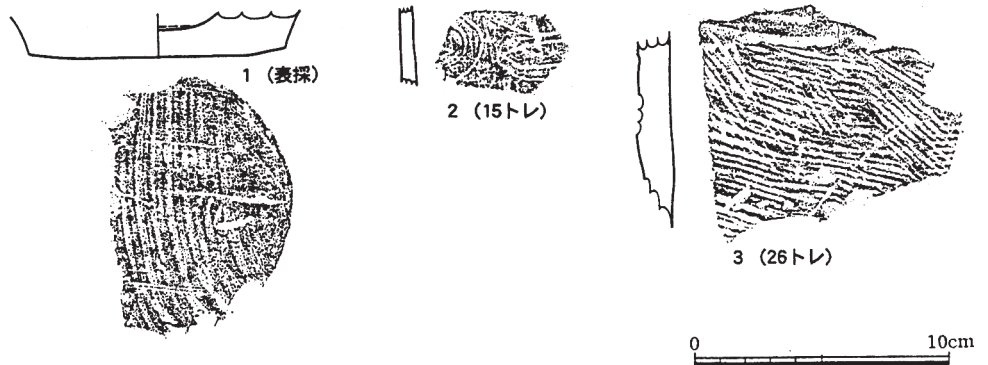
第3図 たて屋敷遺跡推定範囲と確認調査トレンチ設定図 (S=1/2,000)



第4図 たて屋敷遺跡土層柱状図

(3) 遺構と遺物 (第5図)

遺構は全く検出できなかった。調査前の表層地形観察からは沢状地形を呈した部分は、自然地形を利用した堀の機能を有した可能性も想定したが、調査方法の限界などから明らかにできなかった。



第5図 たて屋敷遺跡表採・出土遺物

遺物は沢状地形のトレンチから僅か2点出土したのみである。

なお、1は平成7年度に実施した分布調査の際、25トレンチ東方の畑地において表採された珠洲焼壺底部片である。底径10.0cmを測り、静止糸切り痕を留める。2は15トレンチIII層から出土した弥生土器片で、胎土は雑で沈線により曲線状の文様が描かれる。弥生後期の所産と思われる。3は26トレンチの最下層VI層から出土した珠洲焼甕体部片である。外面に綾杉状のタキ目が見られる。焼成は甘い。年代は特定できないが、中世後期の所産であろう。

(4) 調査のまとめ

上記の結果から、今回の調査対象地点南部においては遺跡が存在せず、北部の沢状地形部に相当すると見られるトレンチから少量ながら遺物が出土した。1及び3の遺物はやはり台地の畑地部分を中心に中世期の遺跡の存在を証明するものであり、今後の更なる周辺部での調査が待たれる。2の弥生時代の遺物は小片ながら、七谷地区における活動の痕跡として貴重な遺物である。以前、当地は縄文時代以降中世に至るまで生業形態の変化や政治的要因により無人の地であったと指摘した〔伊藤1997a〕が、本資料も含め今後の資料の蓄積により再考を求められる可能性が高い。

この結果及び工事方法から、市教委は県文化行政課の指導に基づき、遺物が出土した15・26トレンチ周辺部分で掘削工事時における立ち会い調査を5月25日に実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。

3 古見道遺跡

(1) 遺跡と発掘調査の概要 (第2・第6図)

古見道遺跡は加茂市大字下大谷字古見道に所在する。遺跡は大谷川右岸の丘陵裾部に位置し、民家を中心に周辺水田より約3m程高い状況であった。分布調査時の所見では剥片が採集されたことから縄文時代の遺跡として把握されていた。また、この民家には石墓が巡り、隣接する墓地に宝篋印塔相輪1基が存在する。

調査は任意の約2m×3mの試掘坑を0.3m³のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。10箇所トレンチを設定し、約45m²を調査した。

(2) 層 序 (第7図)

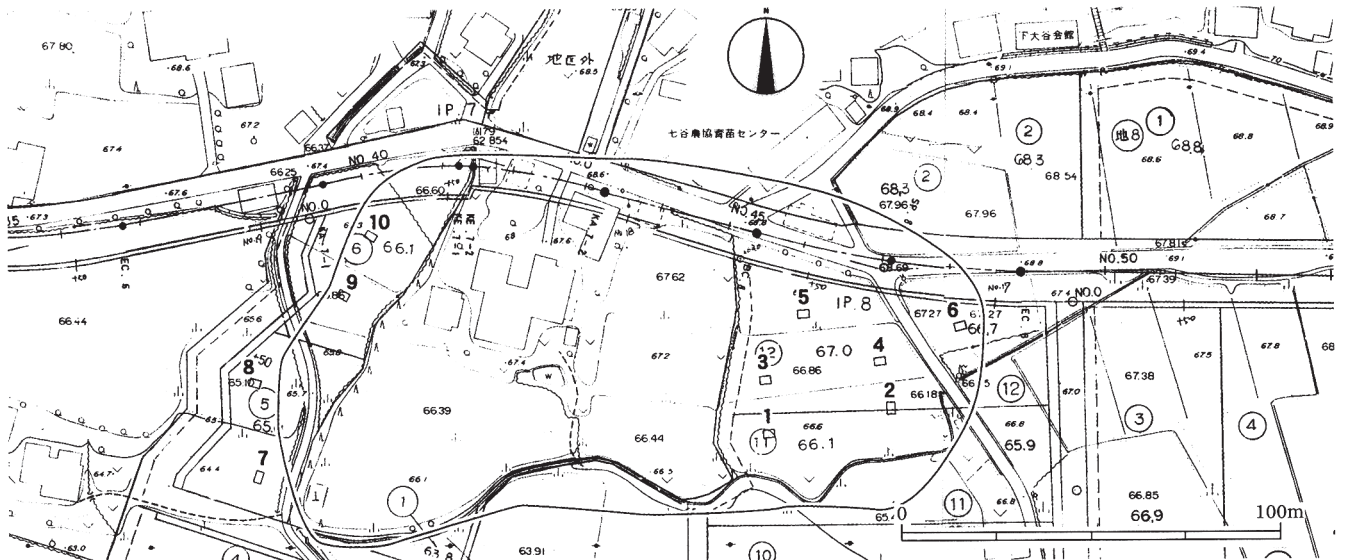
基本的には全トレンチで共通した層で基盤層は礫層を呈する。7～10トレンチにおいては腐植物を含む層が存在し、沢状地形に相当するものと考えられる。

(3) 遺構と遺物

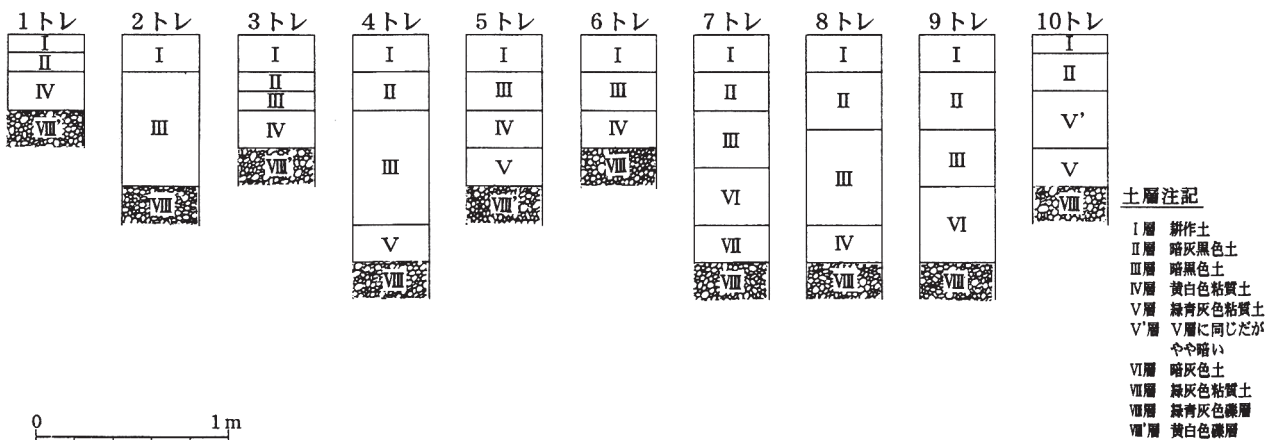
遺構、遺物ともに全く検出できなかった。

(4) 調査のまとめ

以上から調査対象区域内には遺跡は存在しない。民家を含めたやや高い部分に残存しているものと思われる。



第6図 古見道遺跡推定範囲と確認調査トレンチ設定図 (S=1/2,000)



第7図 古見道遺跡土層柱状図

Ⅲ 民間開発関連

1 調査に至る経緯

本年度は民間開発に係わる確認調査を3件実施した。ひとつは中沢遺跡地内における工場増設工事に、もうひとつは岩野原A遺跡地内における携帯電話用基地局建設工事に係わるもの、さらには馬寄遺跡周辺地内における社屋建設工事に係わるものである。いずれも年度当初から把握していた事業ではなかったが、馬寄遺跡周辺地内を除き、他遺跡との調査日程の関係や比較的早期に計画を知ることができたことから、迅速な対応が可能であった。

中沢遺跡地内においては平成9年12月に本年度と同様の原因に基づき、確認調査を実施した。その結果、加茂市では初例となる弥生時代及び古代、中世に至る遺構・遺物が検出され、重要な遺跡であることが明らかとなった〔伊藤1998〕。市教委は開発者である(株)丸五技研に対し、本発掘調査必要区域を示すとともに工場建設位置を遺構・遺物の未検出区域へ変更することで、事実上発掘調査を回避する方向での検討を依頼した。しかし、その後該事業の仲介業者の倒産もあり、事業は立ち消えになったと考えられた。ところが、本年度に入り再び平成9年度調査区に隣接した中沢遺跡地内において工場増設計画の開発申請が提出されていることが明らかになり、確認調査が必要な状況が知られるところとなった。市教委は施行業者である(株)第一建設工業に連絡を取り、5月の連休明けに加茂市都市計画課と三者で協議を開始した。結論から言えば、施行業者サイドでは遺跡の存在は知るところではなく、早急に工事に取りかかりたいとのことであった。その後、市教委は(株)丸五技研に確認調査の必要性を説明し、なんとか承諾を得ることができた。そして調査準備を早急に進め、平成11年5月17日付けで埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、調査に着手した。また、(株)丸五技研は平成11年5月18日付けで文化財保護法57条の2第1項の規定により、埋蔵文化財発掘の届出を文化庁長官宛に行った。なお、この度の確認調査の結果を踏まえ、本調査を実施したが、その結果については別本として刊行したい。

次の岩野原A遺跡地内における携帯電話用基地局建設工事については開発業者である(株)日本コムシスから遺跡所在の照会が4月下旬にあり、遺跡分布地図と照合の上、確認調査が必要な旨回答した。従前から遺跡に関係した事業を実施していることもあり、大変なご理解と協力を頂いた。土地所有者の確認調査承諾書及び詳細設計計画図を待って、平成11年5月31日付けで埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、調査を開始した。また、(株)日本コムシスは平成11年5月21日付けで文化財保護法57条の2第1項の規定により、埋蔵文化財発掘の届出を文化庁長官宛に行った。なお、調査結果から鉄塔建設位置を若干ずらしてもらった上で、掘削工事が及ぶ範囲のみ工事立ち会い調査を実施した。

馬寄遺跡周辺地内における社屋建設工事については開発業者である(株)山忠から、市商工観光課を通じ11月中旬頃に確認調査の早期実施の要請があったが、馬越遺跡発掘調査の追い込み時期でもあったことから、調査の進捗状況の様子を窺いながら、12月上旬に実施することとした。なお、調査は建物建設予定区域のみを対象とし、駐車場などは対象範囲から除外して行ったため、1日で終了した。

2 中沢遺跡

(1) 遺跡と発掘調査の概要(第8・9図)

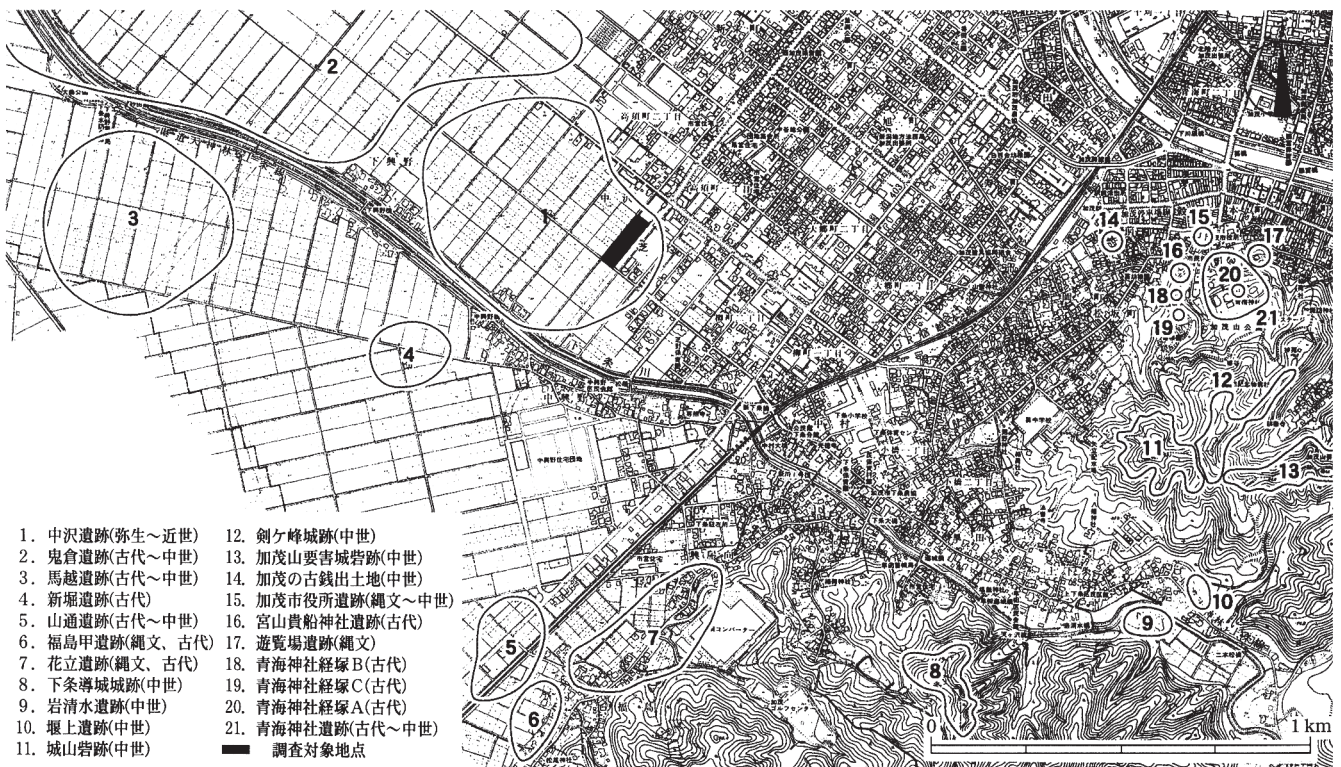
中沢遺跡は加茂市大字下条字中沢、芝野地内にあり、平成7年の詳細分布調査で発見・周知された。遺跡は下条川右岸の沖積低地に立地し、地形分類図上では扇状地端部に近接した位置にある。現況はほとんど水田である

が、周辺部において宅地化が進み今後も開発が予見されている。平成8年3月には今回の調査対象区域東部約70mにおいて行われた汚水管埋設工事の際に古代期の土器が出土している〔伊藤1997b〕。その後、上述した工場工事に係わり、平成9年度に確認調査が実施され、弥生時代、平安時代を中心とした2層の文化層を持つ遺跡で、集落跡であることが判明した〔伊藤1998〕。

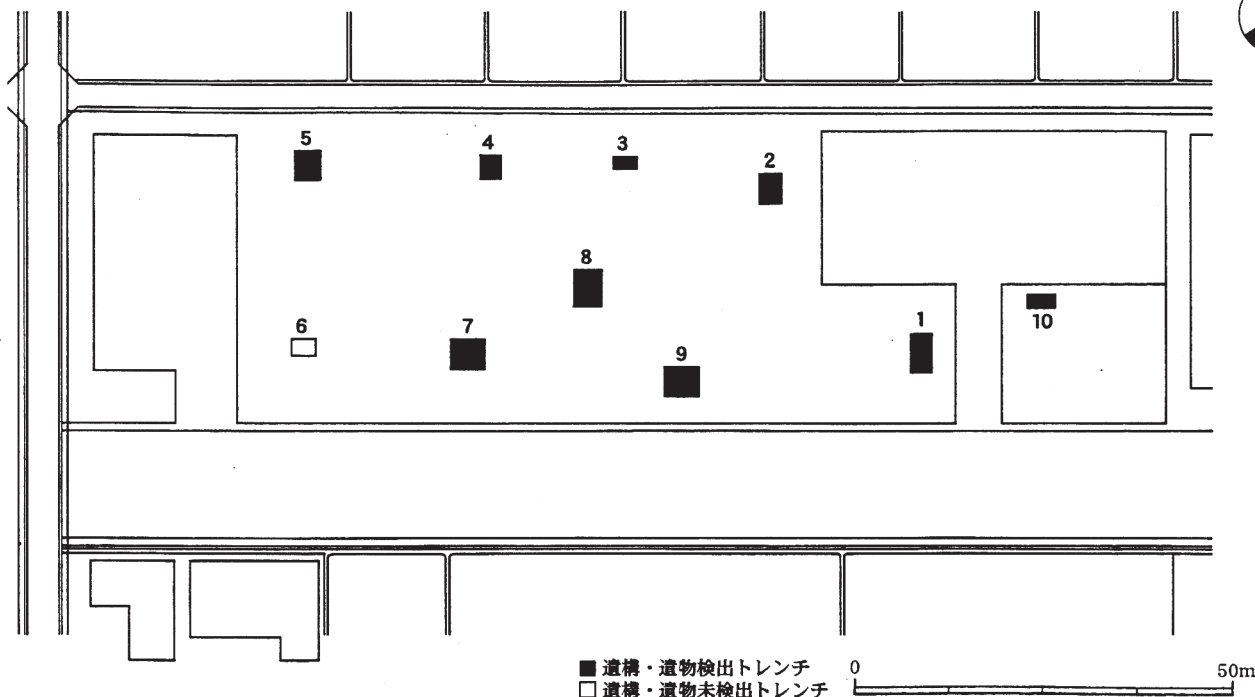
調査は開発計画予定地内全域を対象としたが、既に2か所に構築物が設置されており、それらと通路を避ける形で試掘坑を設定した。試掘坑は任意に設け、0.4㎡のバックホーにて約3m×5mの大ききで掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。ただ、地点により2m以上掘削を行ったところもあり、土壁崩落の危険防止のため、ややそれより大きめに掘削したところもある。なお、確認した遺構についてはより下層における遺跡確認のため発掘し、平板で平面図を作成した後、遺構を破壊する形で下層の調査を実施した。合計10トレンチ、約130㎡の調査を行った。

(2) 層序(第10図)

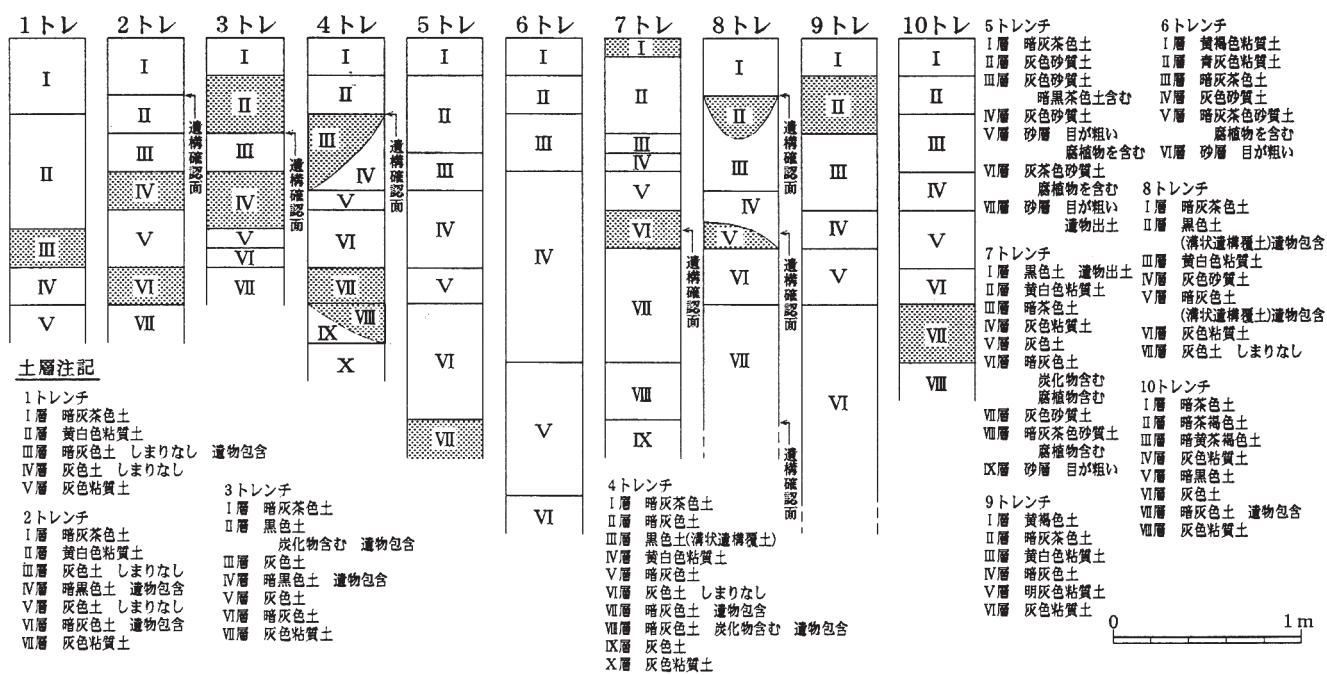
調査対象地の現況は部分的に表土が掘削された状態で、周辺の水田面から約20cm程低い状況を呈していた。また、土層堆積は各トレンチによって若干異なる様相を示している。まず、調査対象区域南西部にある5・6トレンチにおいては、砂層や腐植物層の堆積が顕著で、旧河川跡の存在が窺える。なお、5トレンチ最下層のⅦ層から古代の遺物が出土している。他のトレンチでは基本的にⅠ層暗灰茶色土(旧水田面)、Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層黄白色粘質土があり、2トレンチではⅡ層上面、4トレンチではⅣ層上面、8トレンチではⅢ層上面にて遺構確認面となる。3トレンチⅡ層、4トレンチⅢ層、8トレンチⅡ層では黄白色粘質土の上面に堆積する遺物包含層及び遺構覆土として黒色土が存在し、古代の遺物を出土する。7トレンチではⅠ層に黒色土層が存在し、やはり古代の遺物が出土した。9トレンチではやや様相が異なるが、Ⅱ層とした暗灰茶色土が古代の遺物包含層となる。いずれにしても、古代の遺構は比較的現地表面より浅い層位から出土する。



第8図 中沢遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 20,000)

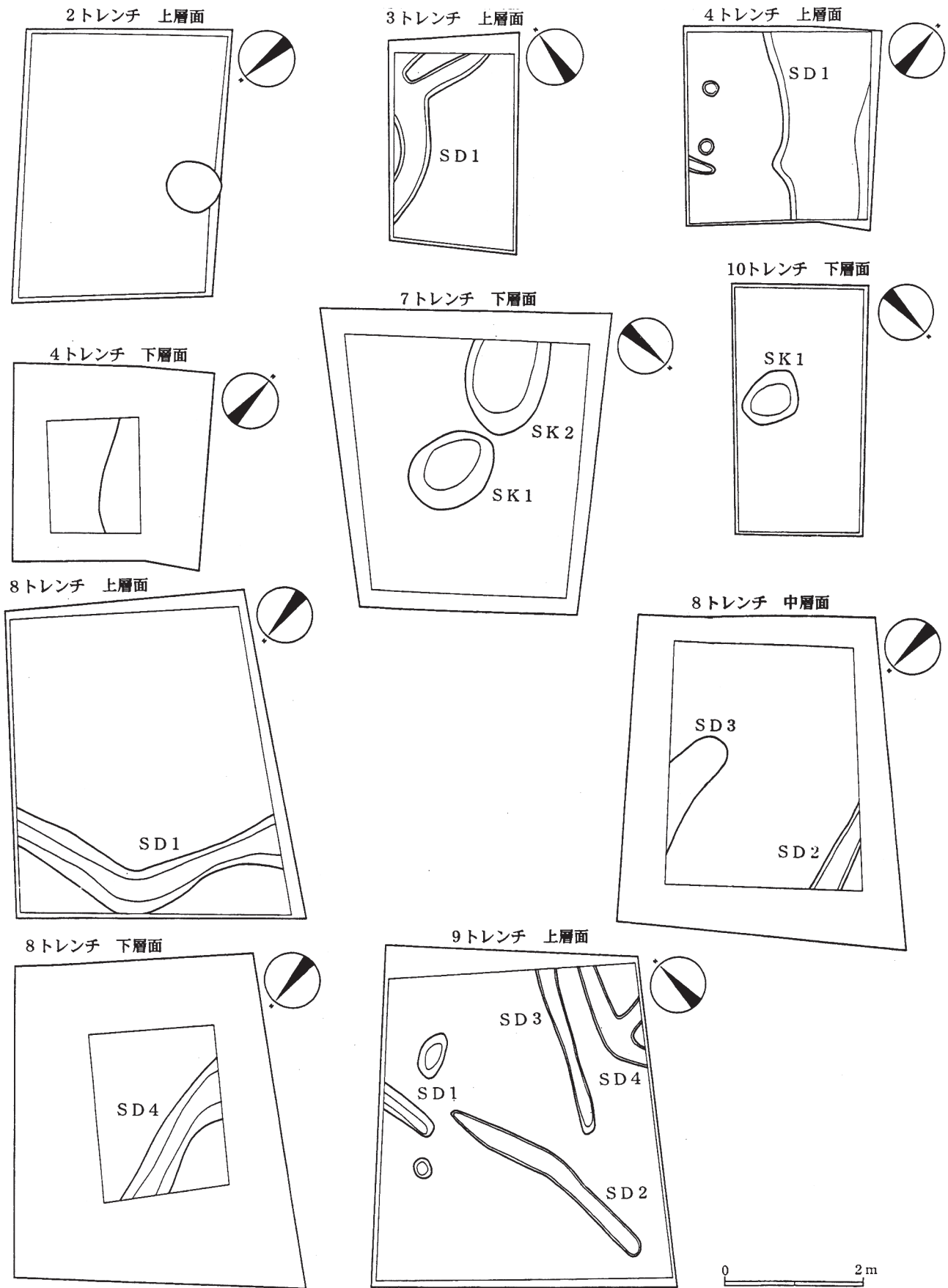


第9図 中沢遺跡確認調査トレンチ設定図 (S=1/1,000)



第10図 中沢遺跡土層柱状図

そして、2・3・4・7・8トレンチにおいては、灰色土系の間層を挟んだより下層に暗黒色土及び暗灰色土の遺物包含層が存在し、古式土師器や古代の土師器が出土した。概ね現地表面から約70~120cm下である。さらに、調査対象地の北部にあたる1・2・10トレンチにおいては、さらに下層の暗灰色土から弥生土器を包含する土層が存在した。以上のとおり、地点によって異なるが2~3層の遺物包含層の形成と遺構確認面の存在が知られることから、周辺域は安定した生活環境であったことが考えられる。



第11図 中沢遺跡確認調査トレンチ遺構配置図 (S=1/80)

(3) 遺構と遺物 (第11～13図)

旧河川跡の存在が窺える5・6トレンチと1トレンチを除き、多くの遺構が検出された。また、遺物も6トレンチを除き、全てのトレンチから出土している。遺構の総数は、土坑(SK)5基、溝状遺構(SD)12基、ピット3基である。遺構に伴う遺物は概して少なく、破片総数で弥生土器約80点、古墳時代の土師器約120点、平安時代の土師器約980点、須恵器約30点、石製品1点、鉄滓1点であった。以下、各トレンチの概略と遺構・遺構出土遺物の説明を行い、遺構外出土遺物については各種別毎に記述を行うこととする。

1トレンチ 遺構は検出されていないが、現地表下約1mのⅢ層暗灰色土から弥生時代後期の土器片約10点程が出土した。

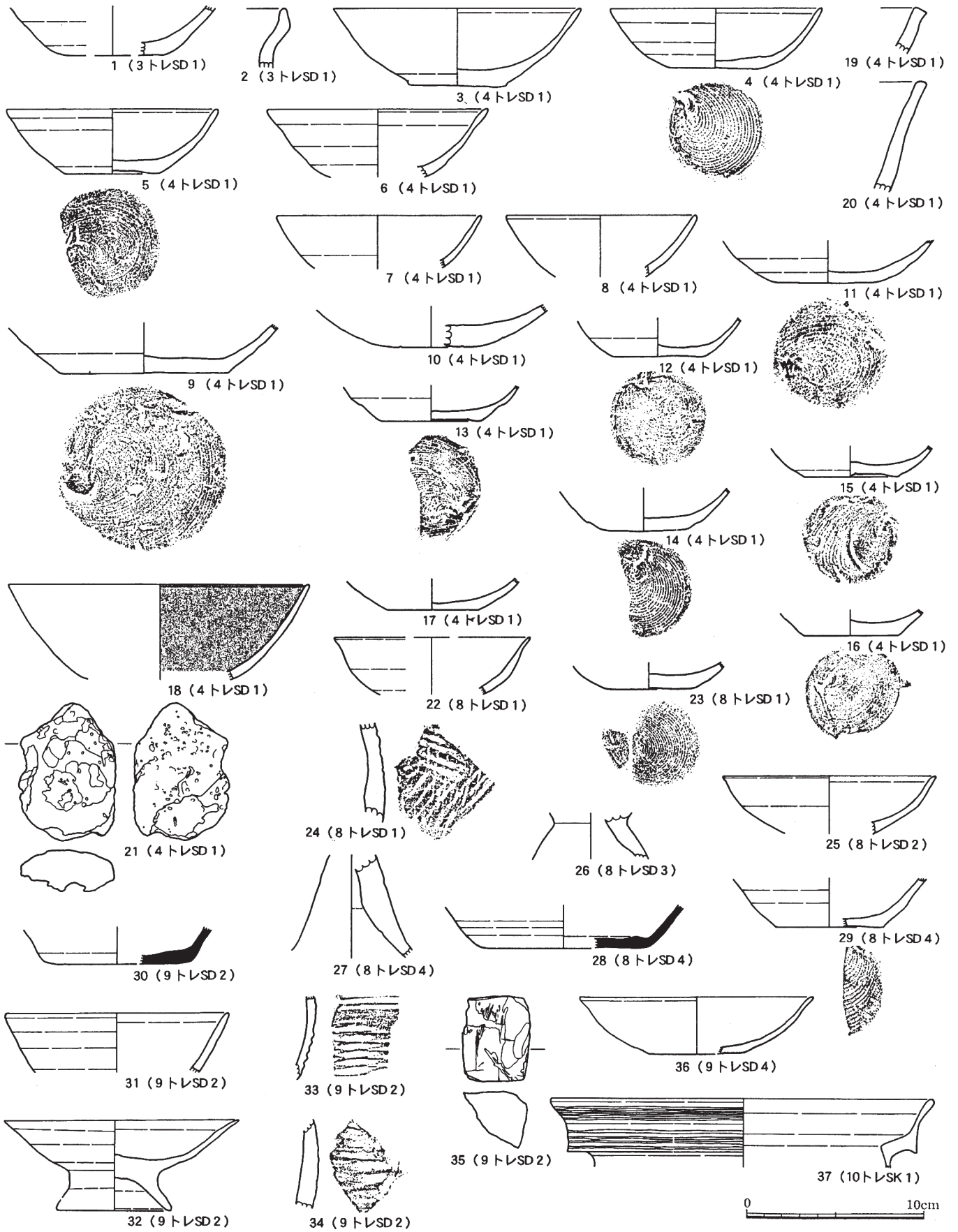
2トレンチ 現地表下約40cmのⅡ層中において、未発掘のため正確な規模は不明ながら、確認面において径約70cmを測る円形の土坑が1基検出された。同一層から土師器の小片が数点出土している。さらに約40cm程下のⅣ層暗黒色土から小片のため明確な時期比定は不可能であるが、砂粒を多く含む胎土の感触などから古墳時代の土師器と思われる土器が10点程出土した。また、さらに約50cm程下のⅥ層暗灰色土から弥生時代後期の土器片数点が出土している。

3トレンチ Ⅲ層上面にて溝状遺構が2基検出された。互いの新旧関係は不明であるが、ひとつは東西方向に伸びる上幅30cmの溝、もうひとつはやや屈曲しながら南西～北東方向に走る上幅40cmの溝(SD1)である。深さはいずれも約20cm程を測る。少量の土師器が出土している。SD1出土土器2点を図示したが、1は土師器無台椀で底径約6.0cmを測り、底部回転糸切り痕を留める。2は土師器長甕口縁部片で、短く「く」の字状に屈曲し、端部は上方につまみ上げられる。また、本トレンチⅡ層から多量の土師器が出土している。この遺構を壊して下層の調査を行ったところ、Ⅳ層とした暗黒色土からも少量ながら古代の遺物が出土した。さらに、下層のⅥ層暗灰色土からは遺物は出土しなかったが、周辺の状態から弥生期の遺物を含む層である可能性が高い。

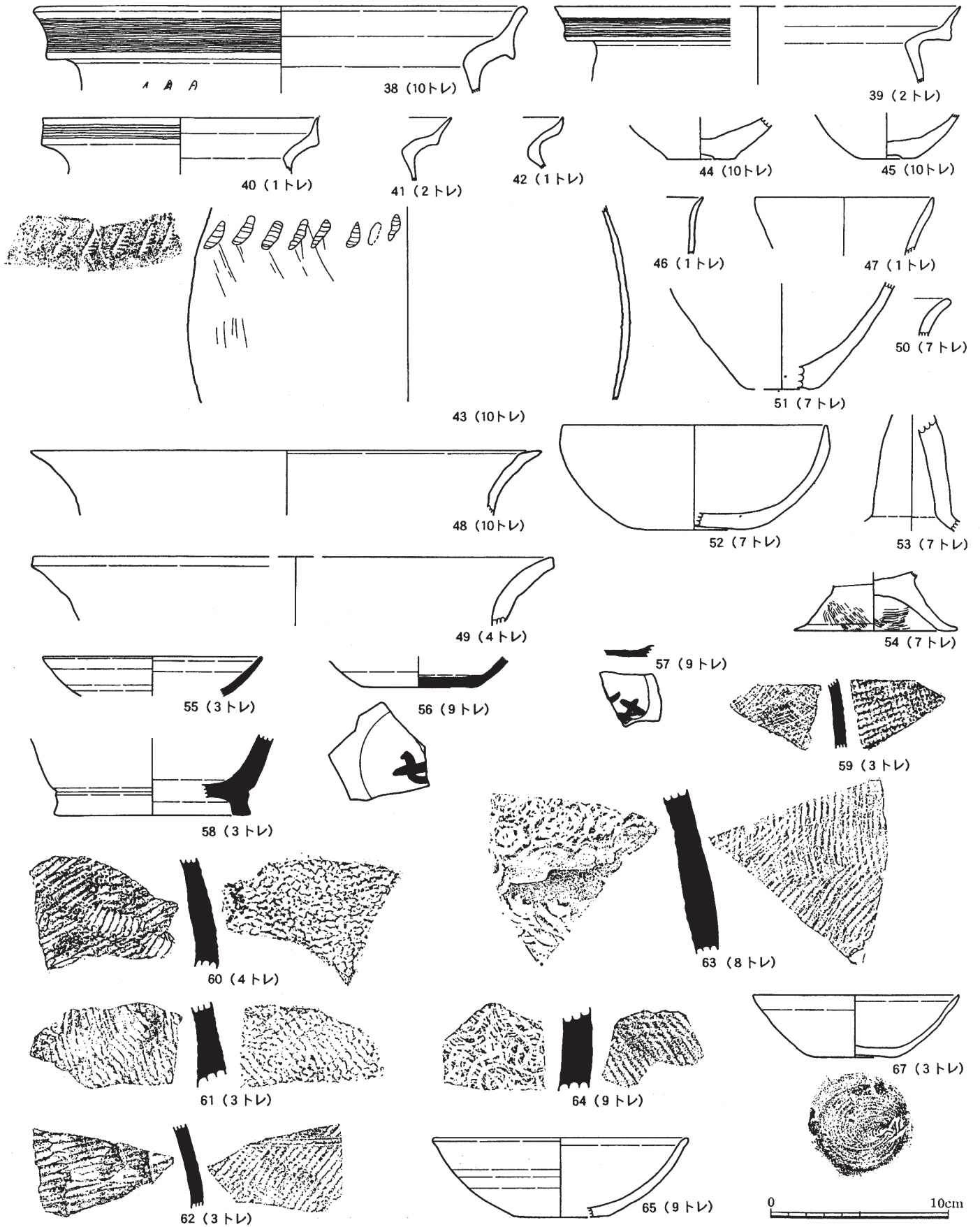
4トレンチ Ⅳ層上面にて溝状遺構が2基、ピットが2基検出された。SD1はほぼ南北方向に伸びる上幅1m以上と推測される大きな溝である。深さは約30cm程である。出土遺物も多く、完形に近い土器や鉄滓1点が出土している。3～17が土師器無台椀で、3～5のみ器形が知られる。3～5はいずれも身が比較的浅く、3は口縁が開き、4・5は内湾する。6～8は口縁部片で、6がやや開き気味で、他は内湾する。9～17は底部資料で10がやや丸底気味の他は全て平底である。また、全て底部回転糸切り痕を留める。底径は9の9.4cmを最大とし5.1～5.4cmのものが多い。18は内面のみ黒色処理される黒色土器椀である。口縁は大きくやや内湾気味に立ち上がる。口径16.8cmを測る。19、20は土師器鍋の口縁部片で、ほぼ直線的に立ち上がるものと見られる。21は鉄滓である。なお、SD1底面から約30cm下層のⅦ層、さらにその下層にて確認した溝状遺構からは古墳～古代の土師器が出土した。

7トレンチ 表土直下の黒色土から少量ながら土師器が出土している。そして、さらに80cm下層のⅥ層において覆土に炭化物を多く含む土坑が2基検出された。2基は近接し、両者とも楕円形を呈する。規模はSK1が長130cm×短100cm、確認面からの深さ約20cm、SK2が長(140cm)×短115cm、確認面からの深さ約20cmを測る。遺物はSK1から少量の土師器が出土した。正確な時期は不明であるが、周辺から古墳時代前期の土師器が出土していることから、該期の所産と考えておきたい。

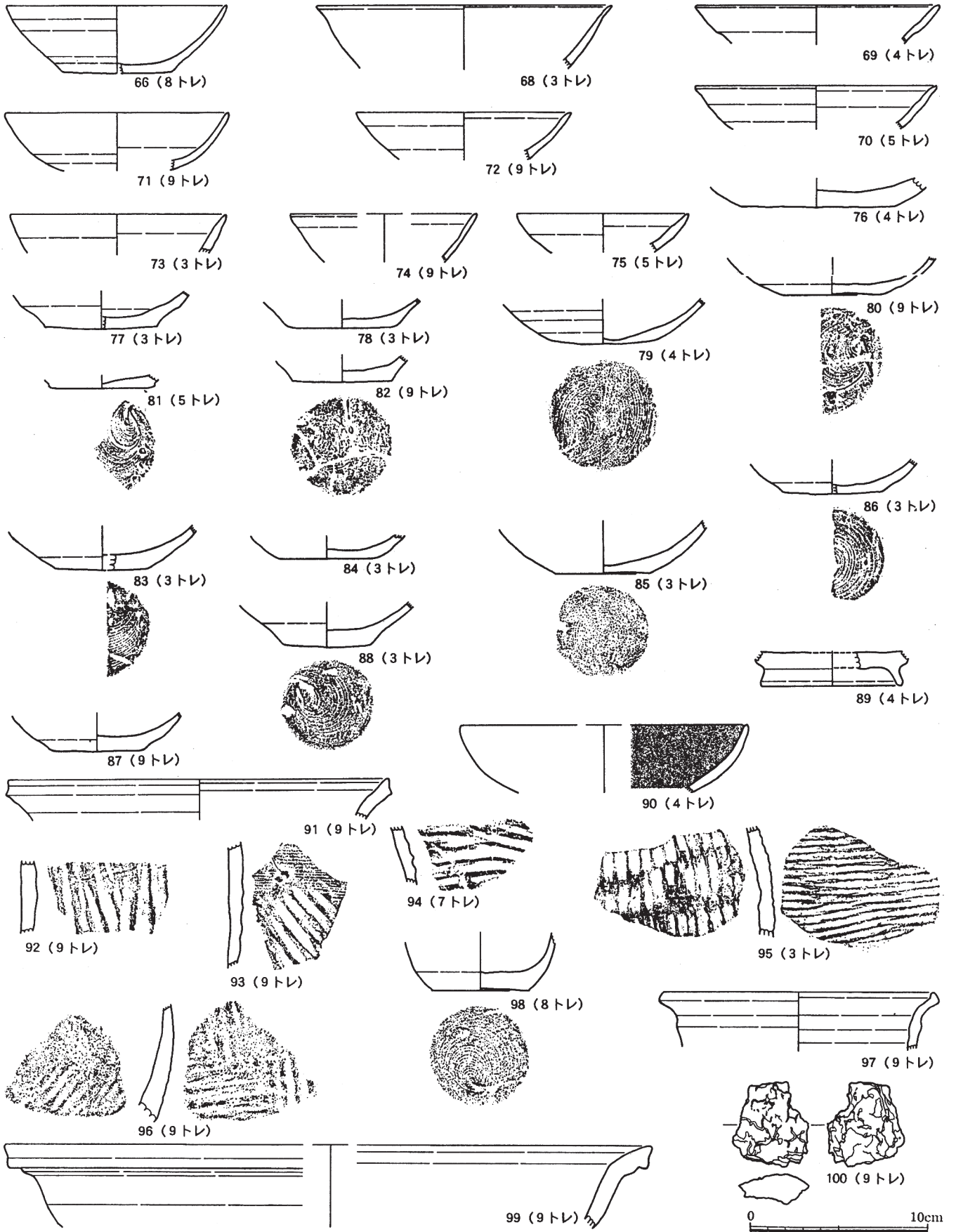
8トレンチ 明確な遺物包含層は不明であるが、地表下約30cm、約100cm、約150cmのところからそれぞれ溝状遺構が検出された。上層面、中層面、下層面と呼ぶこととした。上層面のSD1は屈曲しながら東西方向に走る溝で上幅40～80cm、確認面からの深さ約10～20cmを測る。土師器が少量出土した。22は口径約11.0cmを測る小振りの土師器無台椀の口縁部片で、端部で外反する。23は土師器無台椀底部片で底径5.2cmを測り、底部回転糸



第12図 中沢遺跡遺構出土遺物



第13図 中沢遺跡遺構外出土遺物



第14図 中沢遺跡遺構外出土遺物

切り痕を留める。24は土師器鍋体部片で外面に平行タタキが見られる。

中層面はプランの一部を確認したに留めたが、概ね南北方向に向く溝で、SD 2が上幅40cm、SD 3が上幅60cmを測る。両溝とも少量の土師器を出土した。25はSD 2出土の土師器無台椀で、26はSD 3出土の古式土師器の器台である。

下層面のSD 4はSD 2・SD 3とほぼ同一方向に走る溝で上幅50~60cm、確認面からの深さ約25cmを測る。SD 4の埋土は砂層及び腐植物を含む土で、一定の水流があったことが窺える遺構である。やはり少量の土器が出土し、27の古式土師器の器台、28の須恵器無台杯、29の土師器無台椀が見られる。

9トレンチ Ⅲ層上面にて溝4基、ピット2基を確認した。SD 1、SD 2はほぼ南北方向に軸を向け、SD 2は長さ3.3m・幅30cm・深さ20cmを測る。両溝から少量ながら遺物が出土した。30は須恵器無台杯、31は土師器無台椀、32はほぼ完形の土師器有台椀で足高の高台部は外側に開き径6.3cmを測る。身は大きく開き、口径13.9cmを測る。33、34は土師器甕体部片で外面に平行タタキが見られる。35は砥石で、4面に研磨痕が見られる。石材は凝灰岩である。SD 3・4はSD 1、SD 2と主軸向きが異なる。規模はほぼ同じである。SD 4から36の身が浅く口縁が大きく開く土師器無台椀が出土している。

10トレンチ いわゆる上層においては古代の遺構・遺物は全く検出されず、地表下約150cmのところで、比較的大型破片の弥生土器を包含するⅦ層があり、また弥生土器を出土する土坑が1基検出された。楕円形を呈し、規模は長90cm×短70cm、確認面からの深さ約10cmを測る。37は有段口縁甕で、口径21.2cmを測り、口縁部には磨滅しているが、口縁縁帯幅3.0cmに8条の擬凹線文が施されている。胎土は脆弱で砂粒を多量に含む。

この他、遺構外からも多くの遺物が出土している。時期的には弥生後期後半、古墳前期、平安期に別れる。38~48は弥生後期の土器で、38~42が有段口縁甕の口縁部で、口縁部形態と法量により細分される。38は厚手の作りで口径も27.7cmを測る大型の有段口縁甕である。頸部は緩やかに「く」の字状に括れ、口縁部は外反する。口縁縁帯幅は3.0cmと幅広く、9条の浅い擬凹線文が施される。また、頸部には櫛歯状工具による浅い刺突文が見られる。39は頸部が鋭く括れ、口縁部は外反する。口縁部は先端に向かう程薄く仕上げられている。2.0cmの口縁縁帯幅にやや深い6条の擬凹線文が施される。また、頸部内面はヘラケズリされる。40は小型の甕で、口径15.4cmを測る。口縁部は直立し、1.5cmの口縁縁帯幅に4条の擬凹線文が施される。41は段の屈曲が甘く、口縁部は大きく外反する。42は口縁縁帯幅が1.0cmと狭く、上方につまみ上げられた形態を呈する。2条の擬凹線文が見られる。43は有段口縁甕体部片で頸部近くに櫛歯状工具による浅い刺突文が一行施される。44、45は甕底部片で上げ底である。46、47は壺の口縁部であろう。48は大きく外反し平坦面を持つ器台口縁部であろう。なお、特に甕においては胎土に砂粒を多量に含み、非常に脆い状態である。弥生土器は1、2、10トレンチから出土している。土器の年代については隣接地点から出土した資料の検討〔伊藤1998〕と同じ、後期後半の法仏式に位置づけられよう。

49~54は古式土師器である。49が4トレンチ、他はすべて7トレンチから出土している。49、50は甕の口縁部で、49は端部に面を持つ。51は甕の底部で上げ底を呈する。52は椀で身がやや深く、口縁は内湾する。53、54は高杯の脚部である。これらの土師器は椀形土器の存在などから古墳時代前期末~中期に位置づけられよう。

55~64が須恵器である。55~57が無台杯で、56と57の底部外面に意味不明ながら墨痕が認められる。58は長頸壺の高台部である。59~64は甕体部片である。59~62が外面格子タタキで内面平行当て具、63、64が外面平行タタキで内面同心円当て具である。以上を含めて、須恵器の出土量は極めて少ない。

65~88が土師器無台椀で、器形が窺える資料は少ないが、概ね口縁部が内湾するもの(65、66、71)と外反気味のもの(67、68、69、70、72~75)がある。口径は9.6~16.5cmまであり、小振りのものが多い。また、ほと

3 岩野原A遺跡

んどすべてが底部外面に回転糸切り痕を留め、底径は5.0～8.6cmまであり、大半が5.0～6.0cmに収まる。89は土師器有台碗の高台部で、短脚で径は8.0cmを測る。90が黒色土器碗で、口縁部が内湾しながら立ち上がり、口径は16.0cmを測る。

91～96が土師器長甕で、91が端部に面を持つ口縁部で、口径21.2cmを測る。92～96は体部片で外面に平行タタキ、内面平行当て具痕が見られる。97、98が土師器小甕で97は口端部が内屈し、口径15.0cmを測る。98は底部で回転糸切り痕を留める。99は土師器鍋の口縁部で、ゆるく「く」の字状に折れ、端部に面を持つ。

100の径は不明ながら羽口と思われる。

以上の古代の土器の年代観は隣接地点から出土した資料の検討結果〔伊藤1998〕と大きく変わる点はなく、10世紀中葉前後に位置づけておきたい。

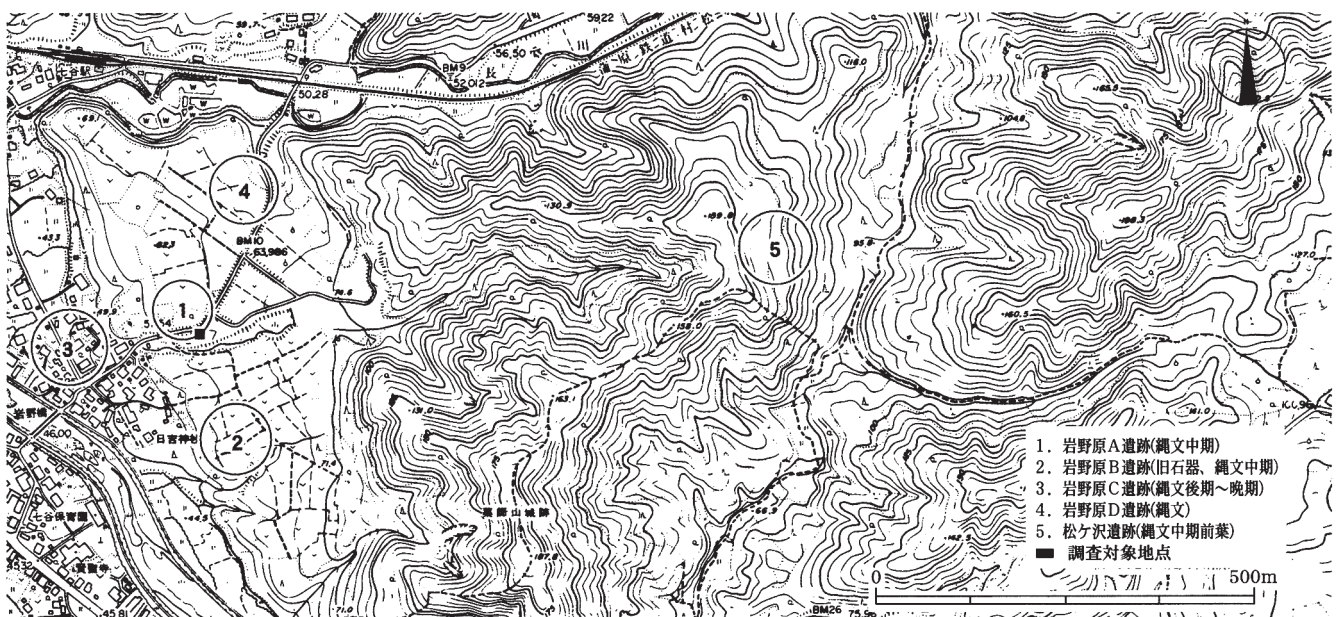
(4) 調査のまとめ

以上から、該事業計画地内においては主に弥生時代後期及び平安時代の活動痕跡が顕著に認められた。特に、平安時代の遺構・遺物からは集落跡の様相を示す。出土遺物から概ね10世紀中頃を主体時期とする遺跡と考えられるが、周辺に確認される古代遺跡と時期的に重ならず、同一地域内における集落の廃絶・移動等の問題を考慮する事例となろう。また、現地表下約2mからの弥生土器の出土も、該時期の歴史的背景を考えると興味深いものである。このように、中沢遺跡周辺域は安定した立地条件を備えており、良好な形で遺跡が遺存していることが推測される。なお、本結果を踏まえ工場基礎工事の掘削される範囲について簡略な発掘調査を実施した。

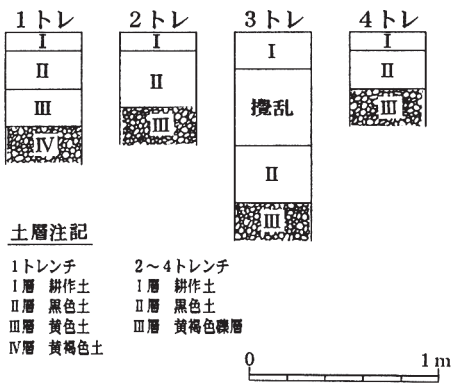
3 岩野原A遺跡

(1) 遺跡と発掘調査の概要（第15・16図）

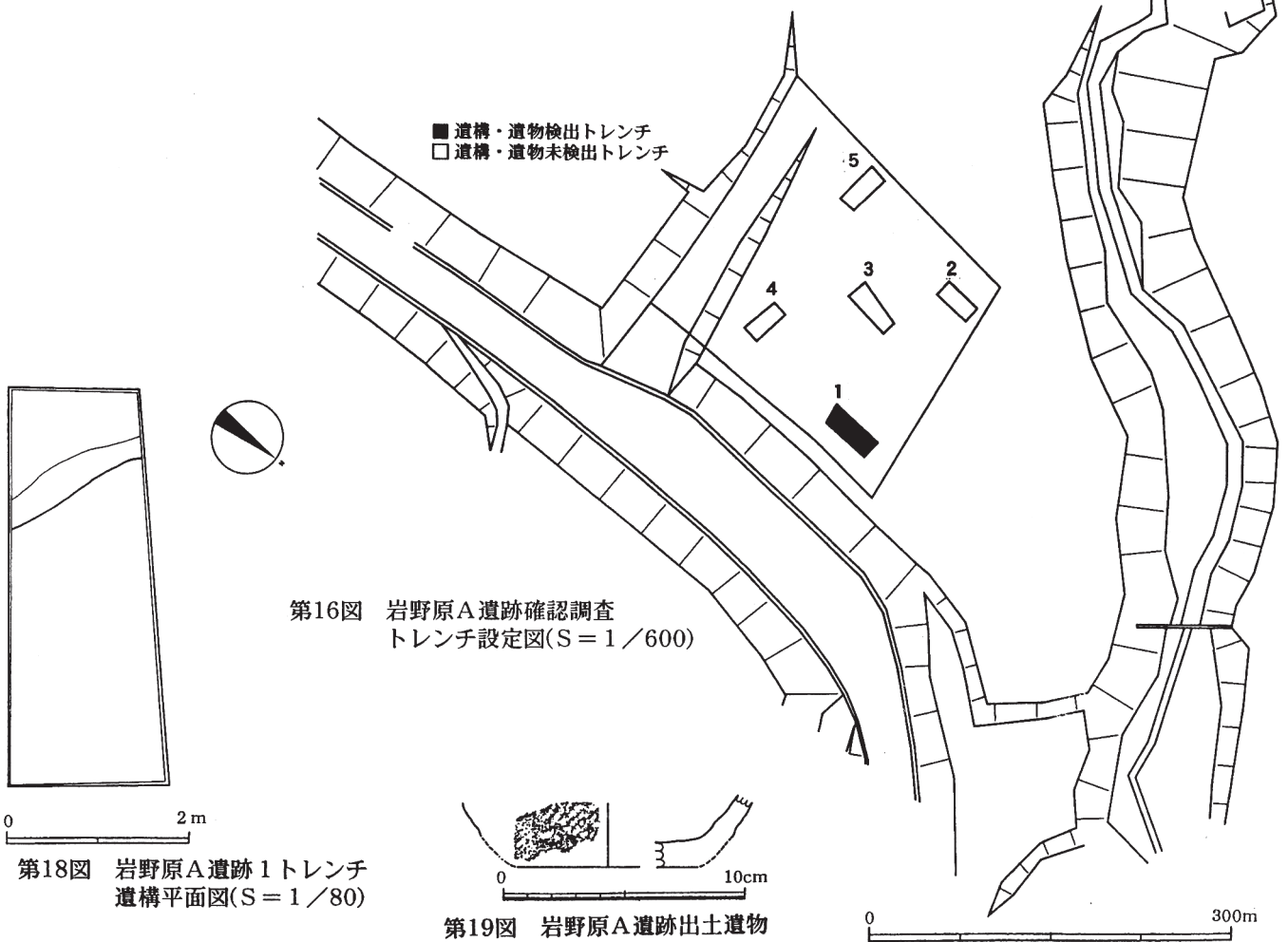
岩野原A遺跡は加茂市大字黒水字岩野地内のいわゆる岩野原台地に存在する。岩野原台地は標高約190mの薬師山山麓から北西方向に延びた広大な平坦地を有する。現在、この台地上に岩野原A、岩野原B、岩野原D遺跡及び台地からやや加茂川に向かい下がった地点に岩野原C遺跡として周知化されている。岩野原B遺跡からは旧石器時代の遺物が採集されているが、他は縄文中期が主で、岩野原C遺跡からは後期～晩期の遺物が出土している。どの地点での遺物出土を示すかは不明であるが、大正7年発刊の『中蒲原郡誌』に早くもその存在が記され



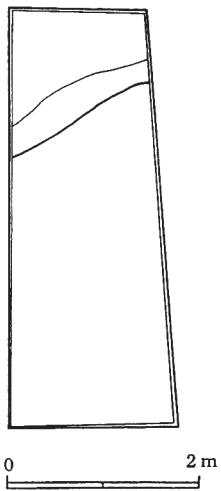
第15図 岩野原A遺跡と周辺の遺跡位置図 (S=1/10,000)



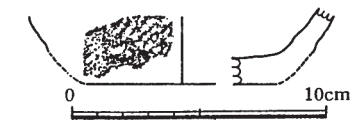
第17図 岩野原A遺跡土層柱状図



第16図 岩野原A遺跡確認調査
トレンチ設定図(S = 1 / 600)



第18図 岩野原A遺跡1トレンチ
遺構平面図(S = 1 / 80)



第19図 岩野原A遺跡出土遺物

ている。昭和60～61年度には七谷全域を対象にした詳細分布調査が実施され、遺跡の推定範囲と採集遺物が図化された(川上ほか1987)。遺跡の立地環境や出土遺物の状況から加茂川流域における中心的集落のひとつとして位置づけられよう。なお、本地点は畜獣の屠殺場や雪室として使用されていたということである。

調査は開発計画予定地内全域を対象とし、0.3㎡のバックホーにて約2m×3mの試掘坑を任意に設定し、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。1トレンチで確認した遺構については発掘し、平板で平面図を作成した。合計5トレンチ、約32㎡の調査を行った。

(2) 層序(第17図)

地山は黄褐色系の土で礫層を呈し、Ⅰ層表土、Ⅱ層黒色土が堆積する。しかし、後世の攪乱の影響か層序は各トレンチにて一定ではない。

(3) 遺構と遺物(第18・19図)

1トレンチにおいて落ち込みを一基確認した。プランは不明であるが、確認面から基底部までの深さ約27cmを測る。この遺構の上面から縄文土器4点が出土した。図化できたものは1点のみであった。

土器は深鉢形土器底部片で底径7.5cmを測る。体部外面に斜行縄文が施される。胎土に砂粒を多量に含む。中～後期かと思われるが、詳細な時期は不明である。

(4) 調査のまとめ

本地点も縄文時代の活動痕跡が確認されたことからやはり岩野原A遺跡の範囲に含まれると理解される。しかし、その痕跡は微弱であることが予想されたため、鉄塔基礎工事区域を1トレンチ周辺からややずらしてもらい予定地内における掘削工事時に立ち会い調査を実施した。

4 馬寄遺跡周辺地

(1) 遺跡と発掘調査の概要(第20・21図)

馬寄遺跡は加茂市大字加茂地内にあり、地形分類図上では扇状地端部に位置する。平成9年3月に今回の調査対象区の北東部において民間開発に伴い確認調査を実施しており、二つの遺構確認面と古墳時代前期、後期の土器、時期不明であるが木簡が1点出土している〔伊藤1997a〕。なお、馬寄遺跡周辺にいくつかの古墳時代前期の遺跡が知られており、早くから開発が進んだ地域であったことが窺える。

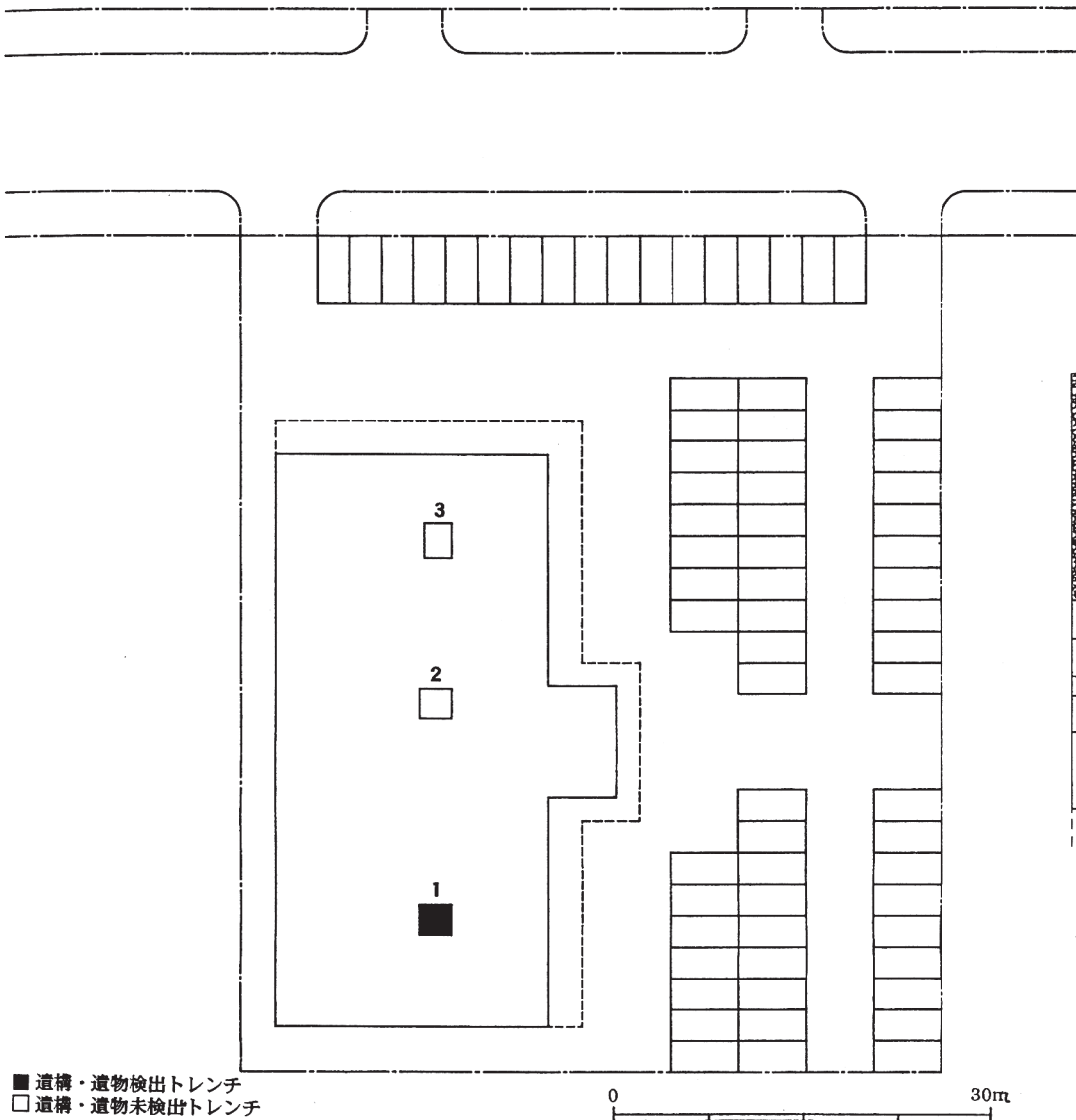
調査は開発計画予定地内の建物建設予定地のみを対象として行った。0.3m³のバックホーにて約2m×3mの試掘坑を任意に3トレンチ設定し、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。約20m²の調査を行った。

(2) 層序(第22図)

調査地はかつては現況水田であったが、現在は盛土及び残土が約1m程ある。盛土下に旧水田耕作土(Ⅰ層)があり、それより下層には暗灰色系の粘質土と砂質土が堆積し、基盤層は不明確である。ところにより、腐植物が多く含まれ、湿地であったことを窺わせる。安全上の問題などから、十分に掘り下げられなかった。

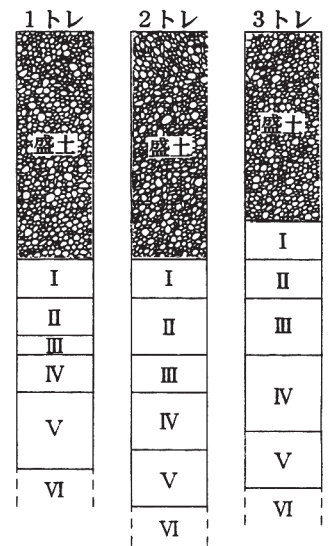


第20図 調査対象地点と周辺の遺跡位置図 (S = 1/20,000)



■ 遺構・遺物検出トレンチ
□ 遺構・遺物未検出トレンチ

第21図 馬寄遺跡周辺地確認調査トレンチ設定図 (S = 1/600)



土層注記

- I層 旧水田耕作土
- II層 暗青灰色粘質土
- III層 暗灰色砂質土
- IV層 暗灰色粘質土
- V層 暗灰茶色粘質土(1トレ土器出土)
- VI層 灰色土

0 1m

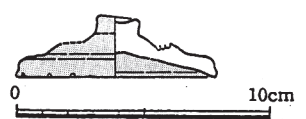
第22図 馬寄遺跡周辺地土層柱状図

(3) 遺構と遺物 (第23図)

遺構は全く検出できなかった。遺物は1トレンチのV層から古式土師器数片が出土したのみであった。図化できたものは1点だけで、器形から蓋と考えられる。器高は2.4cmと低く、体部は外反する。鈕頂部はやや凹む。裾部径7.9cm、鈕径1.7cmを測る。裾部端部に面を持ち、刻みが施される。また、内外面は赤彩される。古墳前期の所産であろう。

(4) 調査のまとめ

少量ではあるが、古墳時代前期の土師器が出土したことから馬寄遺跡の縁辺部にあたるものと考えられる。ただ、遺構などは不明確であることや土質の状況から、直接的な活動痕跡を留める場所ではなく、土器も二次的に流入したものと判断されることから、該工事においては発掘調査の必要を認めず、掘削工事時における立ち会い調査で指導・対応することとしたい。



第23図 馬寄遺跡周辺地出土遺物

IV 道路工事関連

1 調査に至る経緯

本年度は各道路建設工事に関係し、3遺跡が調査対象となった。ひとつは、いわゆる加茂信濃川大橋建設も伴う県道長岡・栃尾・巻線地方道橋梁整備事業に係わり、山伏塚遺跡が計画区域に含まれた。本事業は平成7年度ルート決定され、平成9年度に公共採択がなされたものである。ルートは新潟・小須戸・三条線から信濃川に大橋を架け、須田地区を縦貫し国道8号線に連結するものである。山伏塚遺跡は周知の遺跡であり、加茂市建設課と平成10年度から協議を開始し、用地買収後の平成11年度当初に確認調査を実施することとなった。三条土木事務所は平成11年4月1日付け三土第1号で文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知を文化庁長官宛行った。その後市教委は平成11年4月20日付けで埋蔵文化財発掘調査の報告を県文化行政課に行い調査の準備に入った。なお、その間、事業主管課側から現況の果樹木の伐採を行ってもらった。

中沢遺跡は、平成7年度の県教委による詳細分布調査により発見・周知化された遺跡である。今回の調査原因である都市計画道路下条・陣ヶ峰線はそれ以前に路線決定がなされており、遺跡の存在は大きな問題となった。市教委は本年度に入り、事業課である加茂市建設課から遺跡の照会を受け、協議を開始した。折しも、前述した民間開発に関わり、隣接地点を確認調査及び本調査を行っていたこともあり、遺跡の存在は十分予想される状況であった。事業の進捗状況に大きな影響を及ぼすため、来年度工事が実施される予定であることなどから、ひとまず用地買収が終了している区域を対象に確認調査を行い、今後の方針を決めることで合意した。加茂市は平成11年6月18日付け建第551号で文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知を文化庁長官宛行った。その後市教委は他事業との関連から、平成11年8月18日付けで埋蔵文化財発掘調査の報告を県文化行政課に行い調査の準備に入った。そして、後述する調査結果から調査対象区域を拡大した第2次の確認調査が必要と判断され、さらなる用地買収終了を待って、協議が整った10月下旬に第2次の確認調査を実施した。

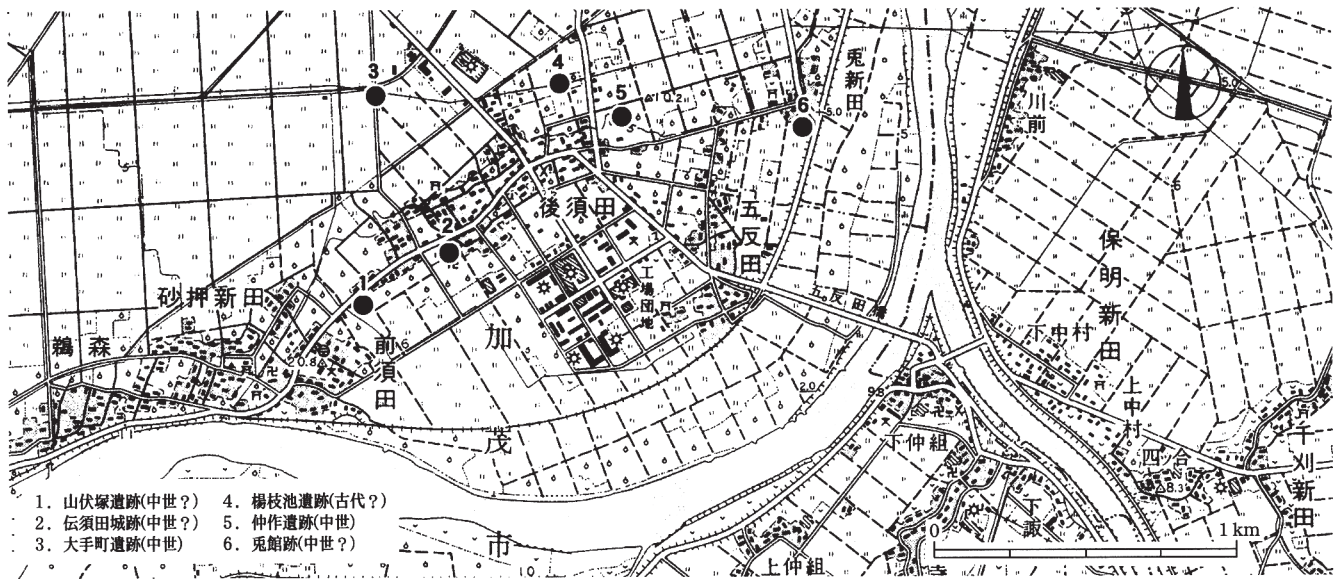
舞臺遺跡は千刈・駒岡線道路工事に係わり、平成6年度に土地買収状況に合わせこれまでに二次にわたる確認調査を実施してきたところである。その結果を受け、平成8年3月～6月にかけて約1,200㎡を発掘調査している（未報告）。本年度に入り、加茂市都市計画課から道路工事が発掘調査隣接地点から開始されることを聞き、遺跡の取り扱いについて協議を開始した。用地買収は未了なものの、蒲原鉄道線路敷については既に市用地であったことから、今後の工事日程を考慮し早急な遺跡の把握が望まれた。市教委は平成11年8月20日付けで埋蔵文化財発掘調査の報告を県文化行政課に行い、中沢遺跡確認調査終了と同時に調査を開始した。なお、加茂市は平成11年9月10日付け加都第253号で文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知を文化庁長官宛行った。

なお、山伏塚遺跡を除き、年度当初から把握し計画していたものではなかったが、馬越遺跡発掘調査の開始が9月になったこともあり、対応が可能であった。

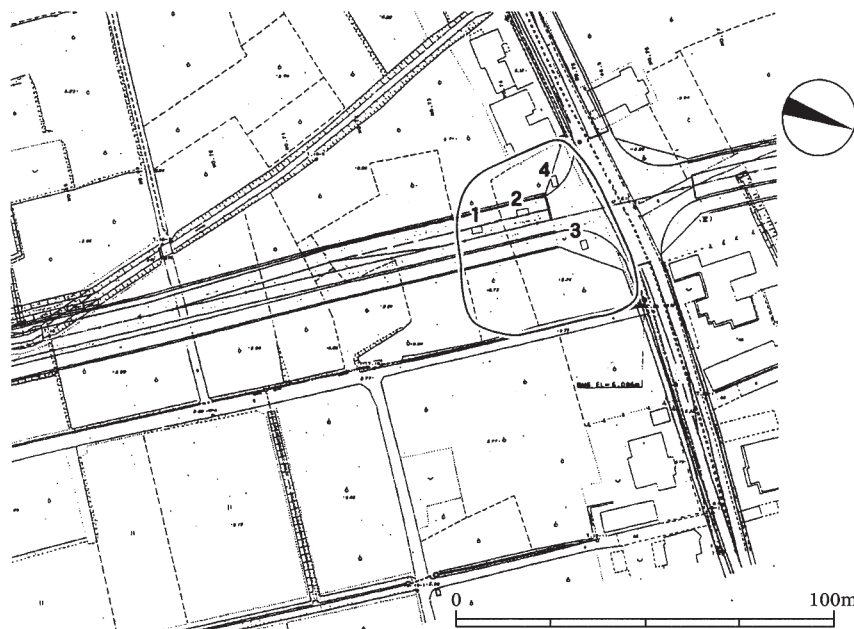
2 山伏塚遺跡

(1) 遺跡と発掘調査の概要（第24・25図）

山伏塚遺跡は加茂市大字前須田字割前に所在する。信濃川左岸の自然堤防上に立地し、現集落の一角に位置する。現況は果樹園で、塚の形跡はない。即身仏の伝説や過去に刀や布切れが出土したとされるが、詳細は不明である。



第24図 山伏塚遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



第25図 山伏塚遺跡推定範囲と確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 2,000)

調査は任意の約 2 m × 3 m の試掘坑を 0.4 m³ のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。4 箇所トレンチを設定し、約 25 m² を調査した。調査は 1 日で終了した。

(2) 層序 (第26図)

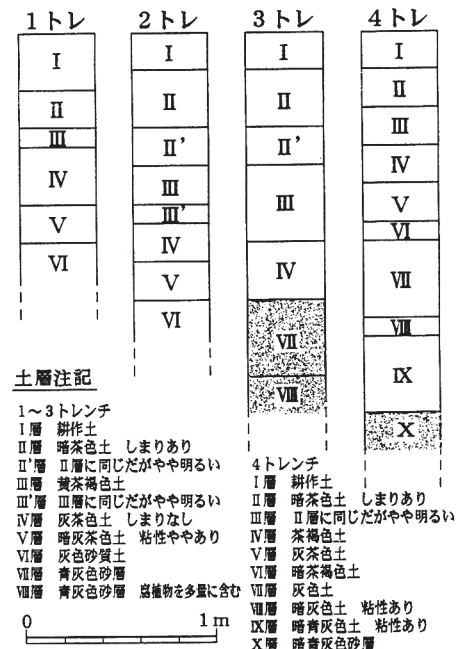
各トレンチともほぼ類似した土層堆積が確認できた。I 層耕作土の下は、茶色を呈するしまりのない土層が 1 m 以上存在し、遺構確認面は判然としない。深掘りしたところ、現地表面下約 2 m で暗青灰色砂層が検出され、湧水を見た。信濃川の旧流路ないしは氾濫原であった可能性もあろう。

(3) 遺構と遺物

遺構、遺物ともに全く検出できなかった。

(4) 調査のまとめ

以上から調査対象区域内には遺跡は存在しない。塚は削平され消滅したものであろう。



第26図 山伏塚遺跡土層柱状図

3 中沢遺跡

(1) 遺跡と発掘調査の概要 (第27・28図)

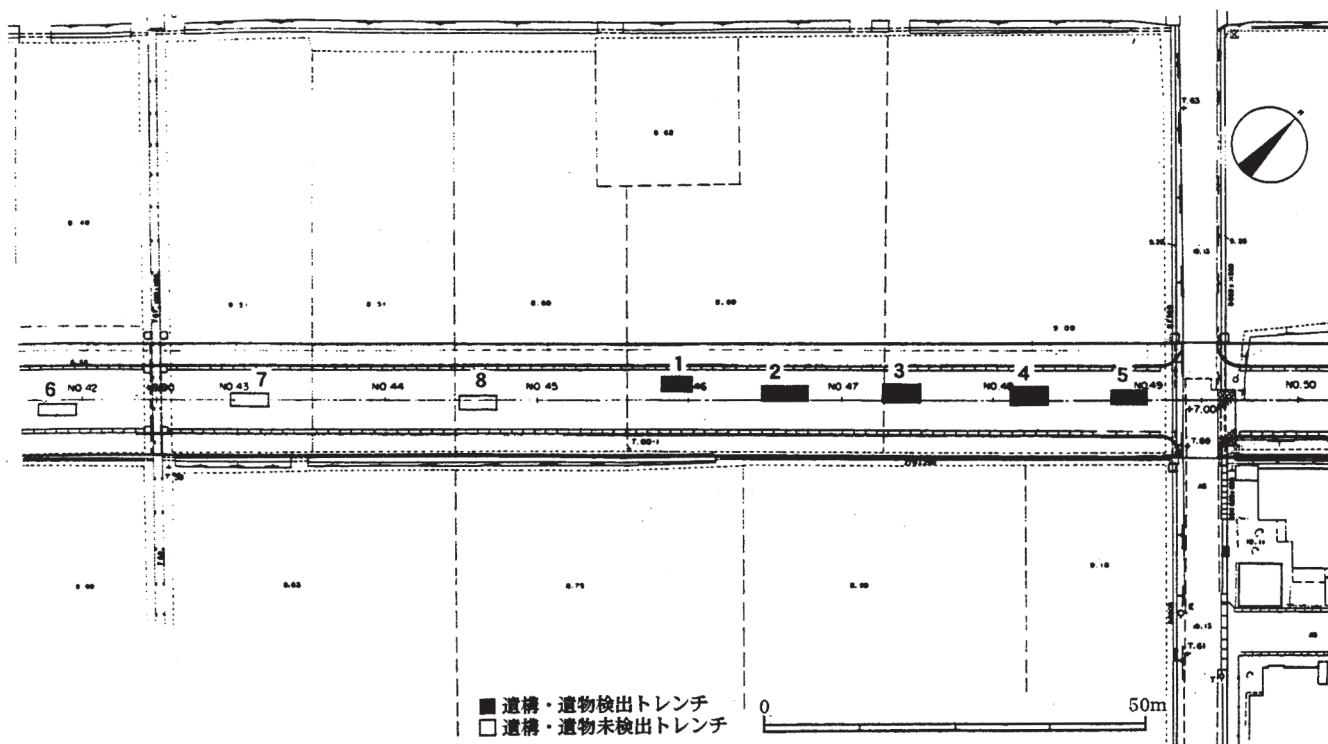
遺跡の概要については先述しているので省略する。調査は用地買収進捗状況及び調査結果を考慮し、2回に分けて行われた。1回目は8月18・19日に行い、1～5トレンチを調査した。調査対象区において任意の約2m×5mの試掘坑を0.4m²のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。約59m²を調査したが、従来の調査結果から古代以前の遺跡の存在が知られていたことから、古代の遺構を確認し平板にて平面プランを実測の後、さらに古代の遺構が希薄な地点においてさらなる深掘りを行った。そして、調査結果から当該事業の開発区域内の遺跡の範囲を明確に把握できないことから、10月27日に同様の方法により2回目の調査を実施した。約30m²を調査し、両者合計面積は約90m²を測る。

(2) 層序 (第29図)

調査対象区域の現況は雑草が繁る荒地であるが、従来は水田であった。この道路法線北側、南側部分は1m以上の盛土がなされ、畑地として利用されている。土層は各トレンチにて若干異なる状況を呈する。1トレンチと2トレンチは同様の土層堆積で、I層耕作土、II層床土でIII、IV層に灰色系の粘質土を挟んで、V層暗灰色粘質土、VI層に暗灰黒色粘質土の平安時代の遺物包含層となる。3トレンチではII層の下層に黄白色砂質土が堆積するが、遺物包含層は2トレンチと同様である。このように、1～3トレンチ周辺では現地表面から約70～90cm下に古代の遺物包含層が存在する。遺物包含層の厚さは約30～50cm程である。4トレンチでは地表下約60cmのIII層暗灰黄色土から少量であるが土器が出土した。そして、それぞれ間層のIV、VI層を挟むが、V、VII層の遺物包含層が存在する。5トレンチにおいては耕作土下に砂質土が堆積し、三層に分層可能なV、VI、VII層の遺物包含層がある。層厚は約60cmある。なお、3トレンチは遺構が密に確認されたため不可能であったが、古代の遺構確認面を壊して、より下層の調査を行ったところ、現地表面から約220～240cm下に暗灰黒色土が確認され、僅かであるが古代以前の土器片及び遺構が検出され、前記の周辺部の確認調査状況から弥生時代の包含層である可能性がある。6～8トレンチではほぼ同じ層序で、約2m程掘削したが、1～5トレンチでは見られなかった腐植物層の堆積が顕著に見られ、遺物包含層及び遺構確認面を把握できなかった。より下層での遺跡の存在は否定できないが、今回の調査対象区域内においては1トレンチと8トレンチの間に遺跡の切れ目があるものと考えられる。



第27図 中沢遺跡と調査対象地点 (S = 1 / 20,000)



第28図 中沢遺跡道路建設工事部分確認調査トレンチ設定図 (S = 1/1,000)

(3) 遺構と遺物 (第30～32図)

今回の調査では遺構は平面プランを確認し、概略図を作成したに留めている。1トレンチでは隅丸方形を呈した土坑2基、2トレンチでは溝状遺構1基・ピット1基、3トレンチでは遺構の新旧関係が見られる溝状遺構と土坑、4トレンチ上層面でピット3基、下層面で溝状遺構1基、5トレンチでは溝状遺構1基、土坑1基が検出された。

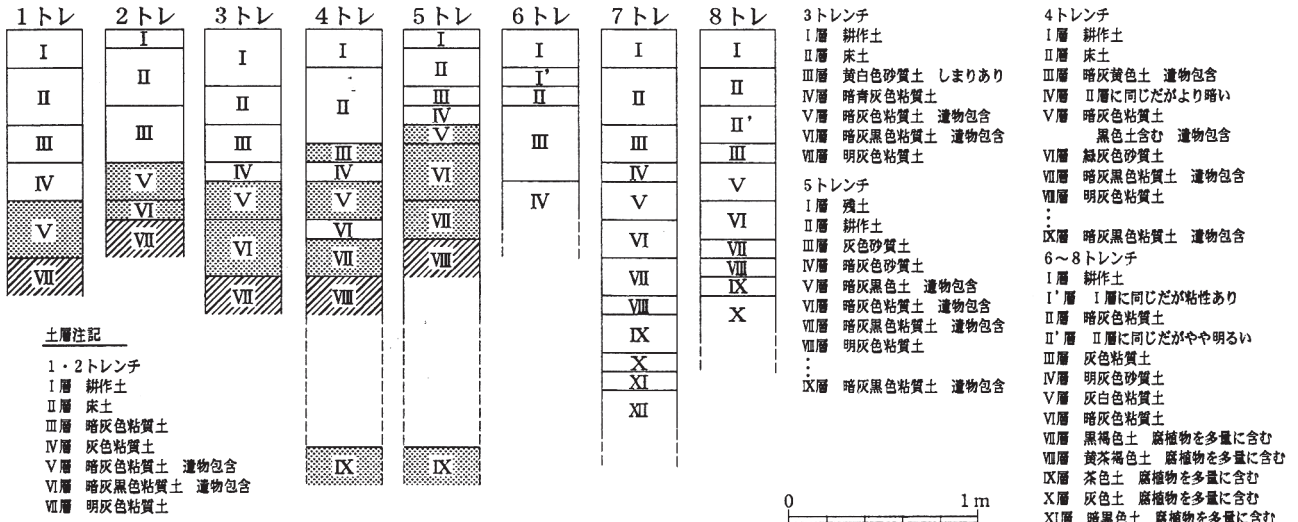
遺物は1トレンチを除いた全てのトレンチから出土した。以下、種別毎に記す。

1は4トレンチ下層から出土した弥生土器で無文の有段口縁甕である。

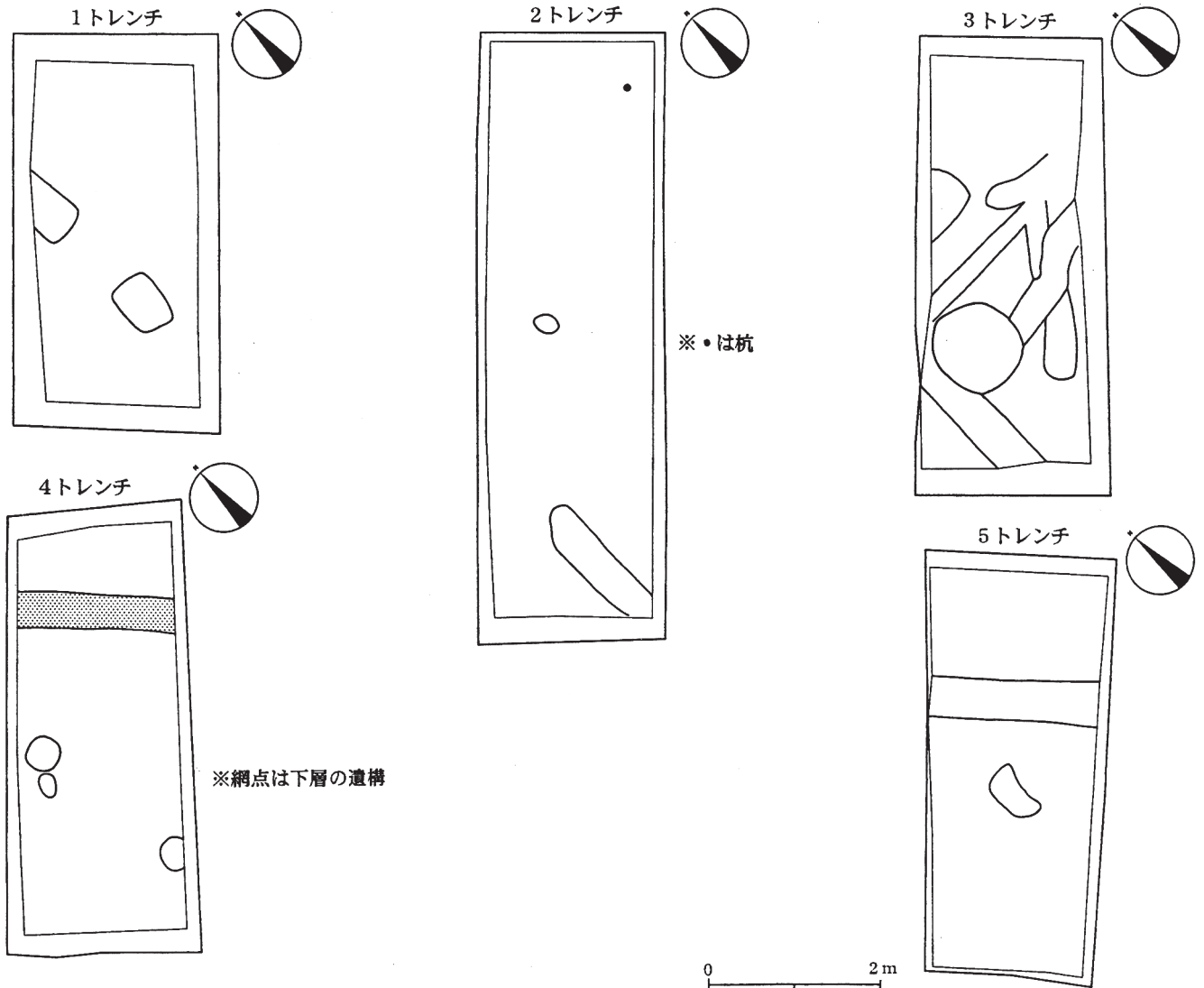
2～6は須恵器無台杯で、器形は2の比較的器壁が薄く口縁部が大きく外傾するものとその他の口縁部の開きが少ないものに大別される。2の底部～体部下半には墨書が見られる。7、8は有台杯で、7は比較的器壁が薄く体部は直線的に立ち上がり、高台部は低く退化している。9、10は杯蓋でそれぞれ鈕の形がボタン状で中央がくぼむもの、擬宝珠形を呈する。11は有台碗の高台部である。12は横瓶の口縁部である。口縁端部は欠損するが横方向につまみ出されるものであろう。13は短頸壺の口縁部で、器壁が薄い。14～19は甕の体部片で、外面叩きが17が格子である他は平行叩きで、内面当て具は14が平行である他は同心円当て具痕が見られる。

20～33は土師器無台碗である。口径12～13cm前後のものが多いが、20は口径18.4cmと大きい。器形は大きくは口縁部が内湾するもの(22、28)、直線的に立ち上がるもの(21、26)、外反するもの(20、23～25、27)に大別される。身がやや深いものが多い。なお、21は底部～体部内面にかけて漆が付着しており、その成分等について自然科学分析を実施した(VI参照)。29～33は土師器無台碗底部片で、底径5.2～7.2cmを測る。いずれも底部回転糸切り痕を留める。また、29には墨書が見られる。34は内面黒色処理された黒色土器の無台碗である。

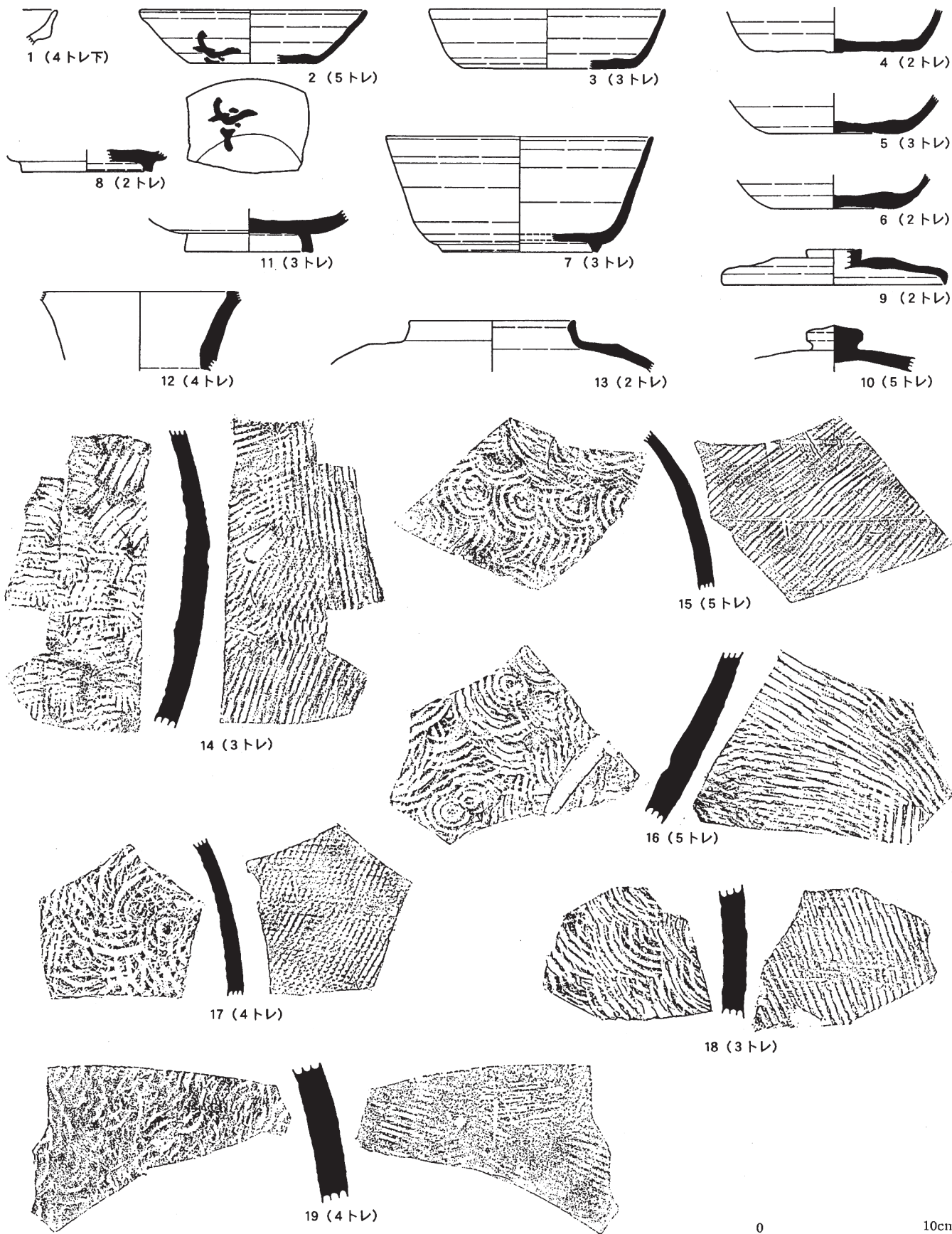
35～39は土師器長甕である。35は口縁端部が上方に伸び、中央はくぼむ。36は口縁端部が下方につまみ出される形態を呈する。37～39は体部片でいずれも外面平行叩きが見られ、内面は37で平行当て具が、39ではハケ目が見られる。40～42は土師器小甕であるが、それぞれ口縁形態が異なる。40は「く」の字状に強く括れ、口縁端部に面を持つ。41は口縁端部に面を持つが、40に比べ緩く括れ、口縁部は短い。42は口縁部が屈曲し、端部が内側



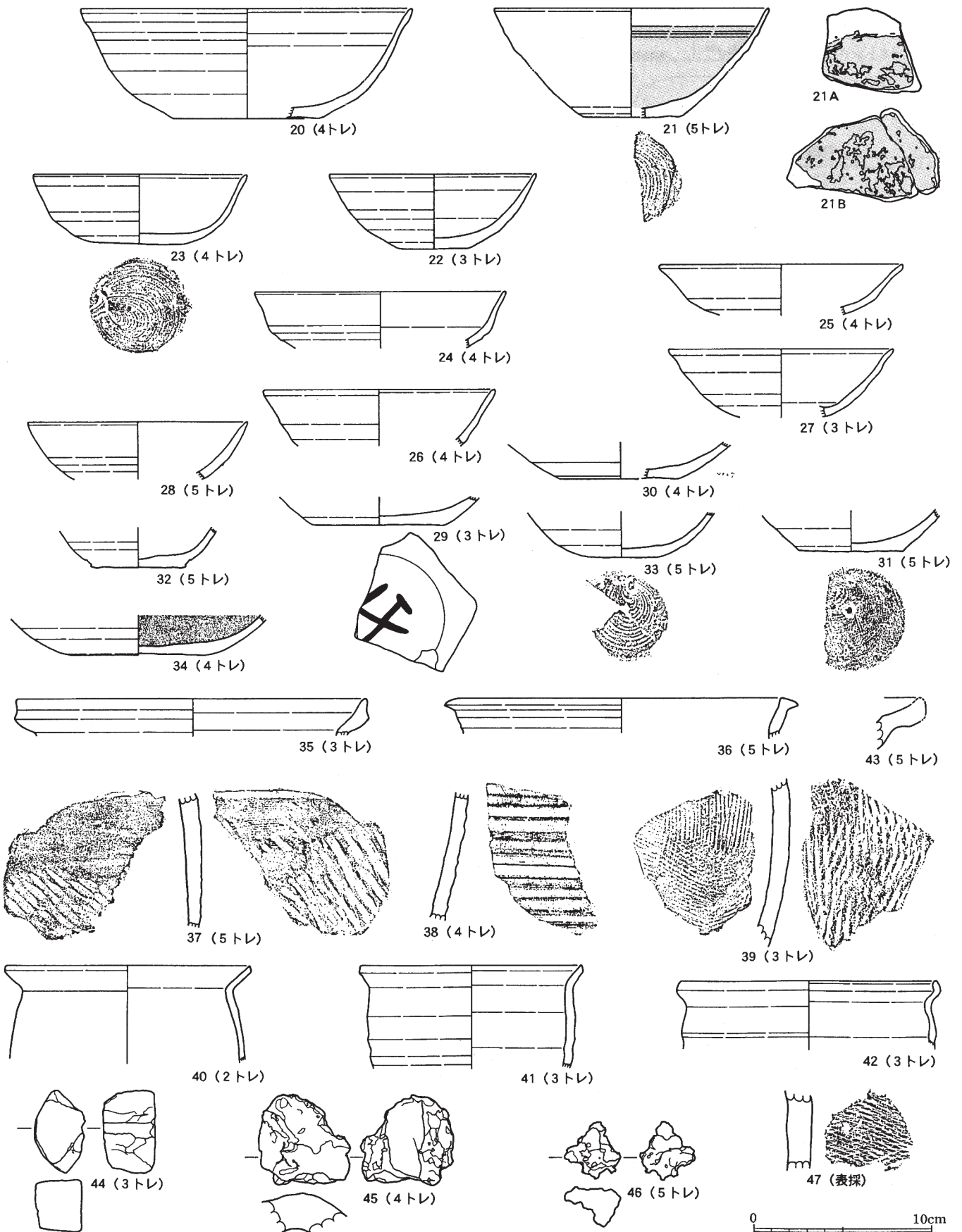
第29図 中沢遺跡道跡建設工事部分土層柱状図



第30図 中沢遺跡道路建設工事部分確認調査トレンチ遺構配置図 (S = 1/80)



第31図 中沢遺跡道路建設工事部分出土遺物



第32図 中沢遺跡道路建設工事部分出土遺物

を向く。43は鍋の口縁部片である。

44は約1/2程遺存する黄白色を呈した凝灰岩製の紡錘車である。45、46は鍛冶に関係した遺物で、その形態から45は羽口、46は椀型滓と考えられる。

47は3トレンチ付近で表採された珠洲焼甕体部片である。

以上のとおり平安時代の遺物が中心であるが、その年代については須恵器食膳具等の形態などから概ね9世紀末～10世紀初め頃に位置づけられよう。

(4) 調査のまとめ

調査対象区域内では1～5トレンチ周辺において濃密に遺跡が存在することが明らかとなった。少量ではあるが、弥生時代後期の土器、多量の平安時代の遺構・遺物が検出され、複数時期にまたがる遺跡であることが示された。この結果はⅢ2で報告した隣接地の調査結果ともほぼ同じ状況で、遺跡の拡がりをおぼろげに確認した。ただ、その出土状況及び土器の年代にやや相違点があり、地点によっては異なる状況を呈する。今回の調査区域では遺物包含層がより深い位置にあることと土器の年代観も古い様相を示すことが指摘される。今後はこれらの事実を踏まえた記録保存のための発掘調査が必要で、上層面約1,200㎡、下層面約645㎡の合計1,845㎡が対象となる。

4 舞臺遺跡

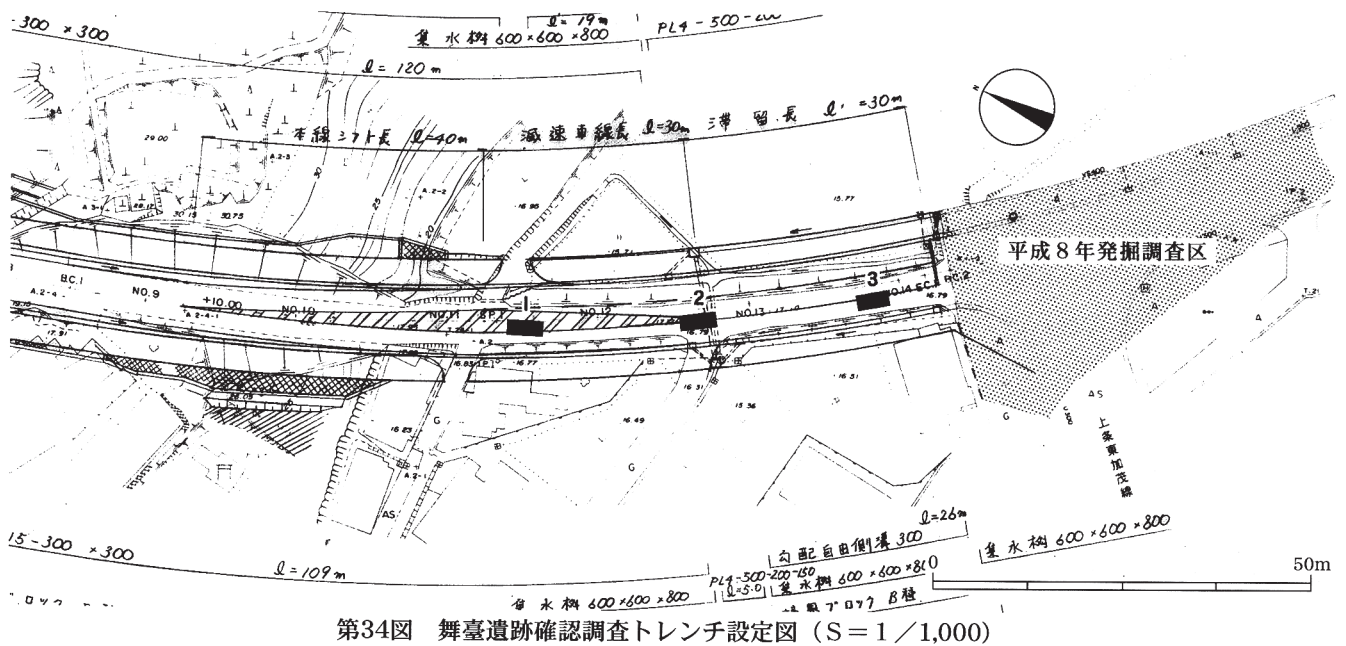
(1) 遺跡と発掘調査の概要(第33・34図)

舞臺遺跡は加茂市大字上条字舞臺に所在する。加茂川右岸谷底平野の低地部で戦国期の特徴を留める上條城跡が所在する丘陵直下に立地している。標高は約16mを測り、加茂川との距離は約400m程である。現況は水田であるが、丘陵を沿うように盛土があり、旧蒲原鉄道線路敷が遺存している。近年、周辺地は宅地化が進み遺跡の範囲は不明瞭となっている。平成8年に今回の調査対象区東側で実施された発掘調査では二つの旧河川跡が検出され、そのうちの一つには護岸用の杭列や堰状遺構が設置され、また二つの河川跡を連結する溝が掘削されていた。河川南側では集落跡の一部も確認された。河川跡から土器や木製品が出土し、ほとんどが中世前期の所産と



第33図 舞臺遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1/20,000)

4 舞臺遺跡



考えられる。呪符木簡や青白磁梅瓶など稀少な遺物も多数出土した。

調査は任意の約2m×5mの試掘坑を0.7m³のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。旧蒲原鉄道線路敷の上に3箇所トレンチを設定し、約29m²を調査した。調査は線路敷の上に限られたため、厚い盛土と崩落の危険性に阻まれ、十分に意を尽くせたかは心許ない。

(2) 層序 (第35図)

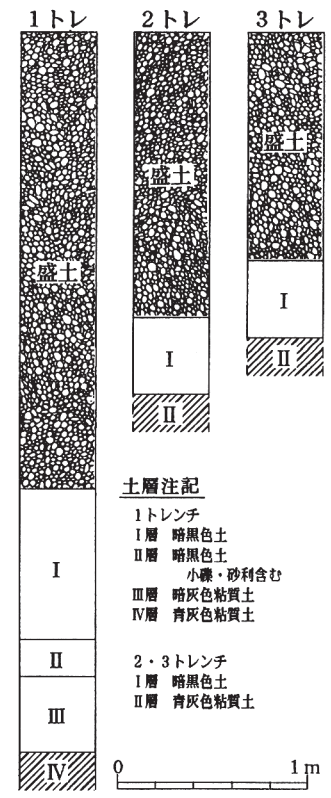
線路敷の盛土が厚く堆積(約1.2~2.4m)し、その下に旧耕作土であるI層暗黒色土(約40~80cm)があり、2・3トレンチではすぐに地山の青灰色粘質土となる。1トレンチでは旧耕作土と地山の間に小礫や砂利を含むII層やIII層暗灰色粘質土が約60cm程堆積している。

(3) 遺構と遺物 (第36図)

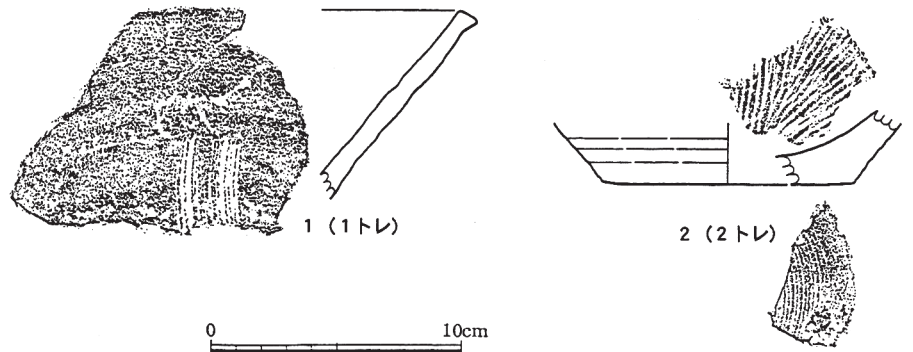
遺構は検出できなかった。遺物も僅かで、1は1トレンチのII層から出土した珠洲焼の播鉢である。口縁端部は面取りされ、内面の卸目は粗で2.5cm幅で11条の卸目が見られる。焼成が非常に甘い。珠洲III期に位置づけられよう。2は近世陶器で肥前系の播鉢である。内面に卸目が密に施され、底部外面には回転糸切り痕を留める。17世紀後半代のものであろう。

(4) 調査のまとめ

以上、少量の遺物が出土したが遺構は確認できず、調査対象区は遺跡の縁辺部にあたるものと考えられる。この結果から、掘削工事時における立ち会い調査で対応することとした。ただ、周辺域にも遺跡が拡がる可能性を暗示しており、今後も試掘・確認調査を実施していく必要性はある。



第35図 舞臺遺跡土層柱状図



第36図 舞臺遺跡出土遺物

V 吉津川地区県営ほ場整備事業関連

1 調査に至る経緯

吉津川地区県営ほ場整備事業は加茂市及び三条市地内の受益面積約265haに及ぶものである。加茂市分が約60%の160haとなる。本事業計画は平成12年度に新規採択され、採択後の平成13～15年度にかけて工事を実施する計画である。本事業計画地内においては、平成7年度に詳細分布調査が県教育委員会主催で実施され、7遺跡が周知化されていた。市教委は平成9年から三条農地事務所、三条土地改良区と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を開始し、試掘・確認調査の日程、調査方法等を決めた。

平成10年度には約4.8haの創設非農用地内における工業団地造成及び知的障害者援護施設建設計画に伴い、早急に対応が求められた馬越遺跡・鬼倉遺跡地内の試掘・確認調査をまず平成10年12月に実施した〔伊藤1999〕。本年度の調査はそれに引き続くその他の面整備工事に伴うものである。まだ、工事の年次別工事予定が未確定の段階であったが、三条農地事務所、三条土地改良区との協議で下条川上流部からの施行計画を想定し、横土居遺跡・稻荷浦遺跡・西吉津川遺跡及び平成9年度に行われた三条市の詳細分布調査の結果、加茂地内に延びる遺跡推定地の天神林地内においてもトレンチを設定、遺跡の存在を確認した。なお、計画当初は面整備を視野に入れてかなり広範囲を調査対象としていたが、県文化行政課の指導の下、周辺の調査成果から遺跡が面工事にあまり影響を受けない深さにあることを考慮し掘削が深く入る主線排水路計画地内のみを調査対象とすることとした。

また、調査期間は稲刈り後の9月～10月中旬にかけて予定を組んだが、国道403号線バイパス工事に伴う馬越遺跡発掘調査の佳境時期にあり、結局馬越遺跡発掘調査終了後の平成11年12月中旬頃から開始し、途中降雪のため中断期間を含めて平成12年1月下旬頃まで必要とした。

この間、三条農地事務所は本事業計画地内における加茂地内の全ての遺跡に対し、平成11年9月29日付け三農地第1041の2～6、9、12号で文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知を文化庁長官宛に行った。



第37図 天神林地内遺跡位置図 (S = 1 / 20,000)



第38図 横土居遺跡・稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡・天神林地内確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 4,000)

2 横土居遺跡・稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡・天神林地内

(1) 遺跡と発掘調査の概要 (第37・38図)

遺跡は加茂市大字天神林地内に存在し、下条川左岸の沖積低地に立地する。今回対象とした遺跡はいずれも平成7年度に確認された横土居遺跡・稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡である。これらの遺跡は下条川と信濃川の合流地点近くにあり、加茂市域北西端で現在の天神林集落の後背地に位置し三条市と境を接する。現況はほとんど水田で一部が畑として利用されている。各遺跡は土師器・須恵器が少量ではあるが採集されており、古代の遺跡と考えられている。周辺部での発掘調査の事例はなく、今回初めて触れる区域である。

なお、天神林は「上松文書」所収、文禄4(1595)年の直江兼統黒印状の中で大槻庄の10ヶ村の一つとして村名として記載されていること〔関1975〕や「浅野家文書」の天文12(1543)年給知宛行状に「天神林岡部分」とあること〔関1991〕から少なくとも中世末期以前には開発・立村していた区域であったことが窺える。

調査は主に工事により破壊が免れず、試掘・確認調査結果によっては本発掘調査が必要になることが考えられた主線排水路工事計画地内とその周辺地を対象とした。任意の約2.5m×3.5mの試掘坑を0.3m³のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。埋め戻しは、地元の要望により川砂を入れて点圧し、耕作への影響を少なくするよう考慮した。馬越遺跡の現場作業がほぼ終了した12月16日から稲荷浦遺跡付近から調査を開始したが、12月18日以降に降雪を見たため一時調査を中断した。再開は雪消えの翌年1月6日であった。途中、調査対象範囲を若干広げたこともあり、土地所有者から承諾を得る期間等一時休止したが、1月24日にすべて終了した。ただし、一部所有者から承諾が得られないこともあり、当初予定箇所から2少ない32箇所の試掘坑を調査して終了した。トレンチ番号は遺跡毎に付けず、連番としている。実質調査面積は約298m²である。時節的には悪天候が予想されたが中断期間前後を除き、比較的天候に恵まれたため、何とか終了することが可能であった。しかし、地盤や壁が脆く湧水とともに崩落等があり、安全面での課題を残している。

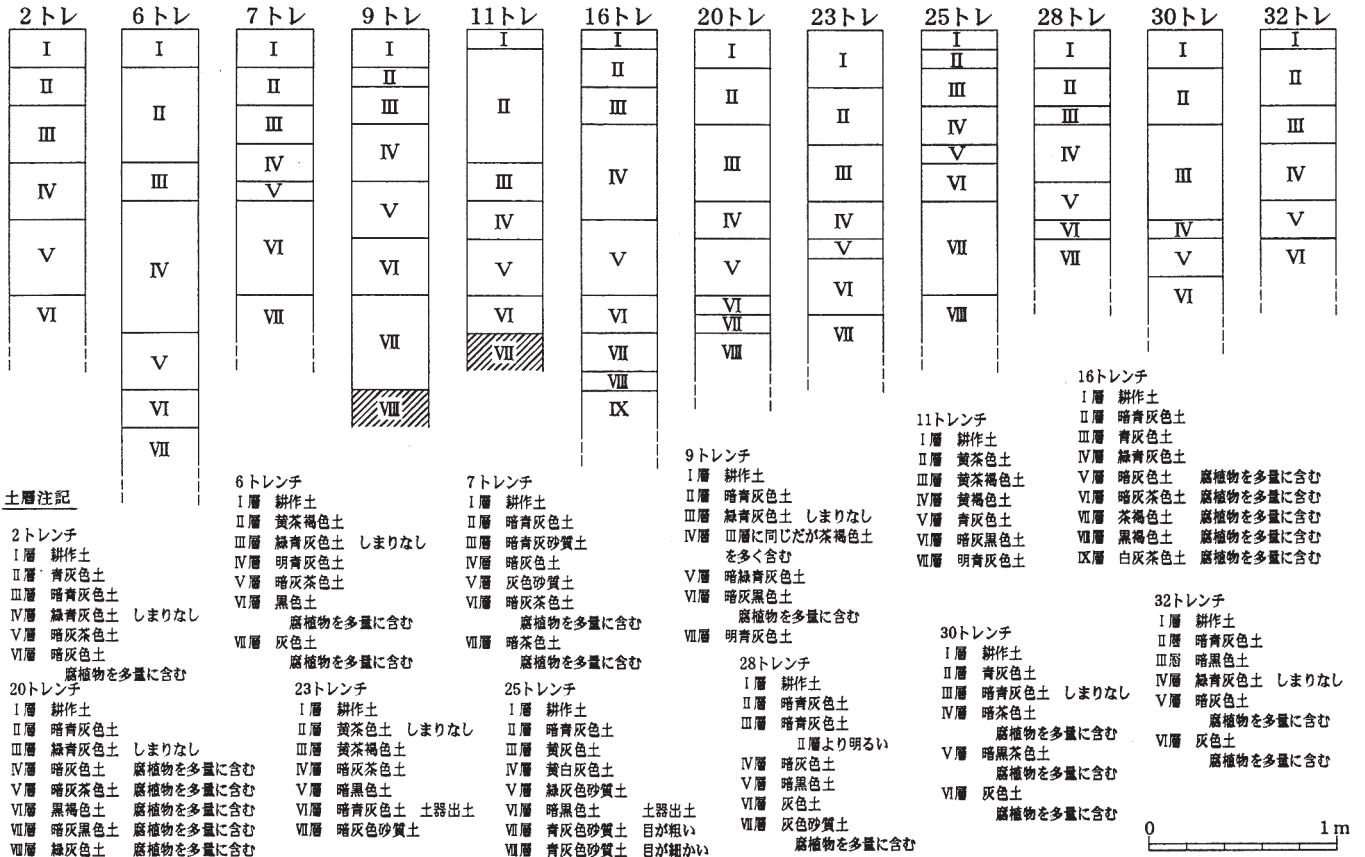
(2) 層序 (第39図)

各トレンチにおいて約2mを上限とした掘削を行い調査を行ったが、横土居遺跡地内の9～12トレンチを除いて地山面が不明瞭な状況であった。1～8トレンチ周辺においては水田耕作土下部分的には砂層を挟みながら、灰色系の粘質土が約1m程堆積し、現地表面下約2m付近で腐植物を多量に含む層が見られ、不安定な場所であったことが知られる。9～12トレンチ付近では耕作土下に黄茶褐色土が見られ、その下に青灰色土、暗灰黒色土が続き、地山は明青灰色土となる。地山面までの深さは1.5m前後を測る。恐らく、遺物を包含するとすれば暗灰黒色土で地盤もやや安定していることから、周辺での遺跡の存在が推測される。13～20トレンチの状況は1～8トレンチと類似する。23トレンチではしまりのない黄茶色土の堆積が顕著で、最下部においては砂層が見られ旧河道の存在が考えられる。24～32トレンチの西吉津川遺跡周辺の状況は若干異なるトレンチもあるが、概ね現地表面下約1m前後のところで暗黒色土ないしは暗灰色土が存在し、25トレンチから中世陶器が出土していることなどを考えると、遺物を含む可能性が高い層であると考えられる。しかしながら、その下層においては遺構が確認できる地山面が不明瞭となり、今回の調査対象区域においては遺跡の内容については把握できなかった。

(3) 遺構と遺物 (第40図)

遺構は全く検出できなかった。遺物も僅かで、合計4点に留まる。1は23トレンチの現地表下約1.4mのVI層暗青灰色土から出土した土師器甕の平底を呈する底部片である。底径8.0cmを測る。胎土に砂粒を多量に含む。2は25トレンチの現地表下約1.0mのVI層暗黒色土から出土した珠洲焼甕の体部片である。外面には目の細かい綾杉状の叩きが見られる。打圧密度は3cmあたり16目を数える。

以上の遺物の年代であるが、1の土師器甕については小片のため詳細な年代は不明であるが、概ね古代以降の



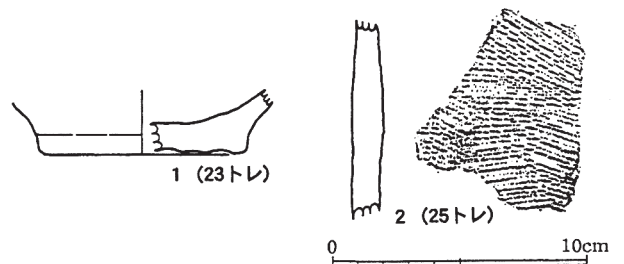
第39図 天神林地内土層柱状図

所産であろう。2の珠洲焼甕は目の細かい綾杉状の叩き目などから、概ね中世前期のものと考えられる。

(4) 調査のまとめ

以上の結果から、稲荷浦遺跡・横土居遺跡・西吉津川遺跡地内における主線排水路工事予定地においては、掘削した深さにおいては遺構が見られず、遺物も近接した23、25トレンチから少量の遺物が出土したのみで、遺物も極めて稀薄な状況であることが窺えた。23、25トレンチは西吉津川遺跡推定範囲の外側に位置するが、南東部に展開する遺跡本体から流れ込んだものと考えられる。中世の遺跡の存在が推測される。

今後は主線排水路工事予定地においては本調査は必要ではないが、遺物が出土している23、25トレンチ周辺においては慎重工事の上、立ち会い調査が必要であろう。また、今回は遺跡のほんの一部分を切開したに過ぎず、今後も同事業における開発工法などを踏まえ、更なる試掘・確認調査が必要と考えられる。



第40図 天神林地内出土遺物

VI 自然科学分析

中沢遺跡出土土器の胎土および付着物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

越後平野南部の東縁辺に位置する加茂市所在の中沢遺跡では、平安時代の9世紀後半～10世紀初め頃とされる遺物や遺構が確認されている。出土した同時期の土師器の中には、土師器にしては非常にきめの細かい均質な胎土を有し、黒色～灰黒色を呈する物質の付着しているものが確認された。本報告では、この土師器について、その胎土の特徴をより詳細に捉えることと付着物を構成する物質の特定を試みる。

2 試料

試料は、中沢遺跡より出土した9世紀後半～10世紀初め頃とされている土師器片2点（第32図21A・B）である。2点の試料ともに「ナカザワカクニン道5トレ990819」という注記があり、それぞれ「40」（21B）、「42」（21A）と書いたテープが貼り付けてあった。「40」（21B）は土器の底部と考えられ糸切り痕が見られ、「42」（21A）は土器の胴部と思われる。どちらの土器も外面はやや黄土色がかかった灰白色を呈し、砂粒はほとんど見られない非常にきめの細かい均質な胎土を有する。一方、内面は、ほぼ全面が暗灰色を呈し、部分的に黒色の塊状の物質が付着している。

胎土の観察および黒色付着物の分析は、2点の土器片についてそれぞれ行った。

3 分析方法

（1）胎土分析

本分析では、胎土の均質な状態の観察を主眼とすることから、薄片観察を用いる。薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにし、また素地の状態については、鏡下で観察される孔隙の程度とその方向性、焼成による粘土のガラス化の程度および含鉄量を記載することにより各試料の胎土の特徴を把握した。

（2）付着物分析

付着物は、外見から有機物、特に漆であることが指摘されていることから、赤外線吸収スペクトル法による分析（赤外分光分析）を実施した。赤外線吸収スペクトル法では、あらかじめ試料物質が予想できるときには、既知の吸収スペクトルと比較して未知物質の同定および確認ができ、物質の多重結合や官能基の構造がわかる〔山田, 1986〕。今回は漆の標準物質を同時に分析し、得られた吸収スペクトルと目的試料の吸収スペクトルを比較する。処理過程を以下に述べる。

1) 分析試料の調製

土師器に付着している黒色物質を剥離し、メノウ乳鉢で微粉碎（200メッシュ以下）し、分析試料とした。また、漆の標準物質は風乾処理後に得られる膜状固形物を分析に供した。なお、黒色物質の抽出は極めて薄く塗布されているために、純粋に黒色物質のみを抽出することは困難であったが、極力黒色物質のみを抽出するようにつとめた。

2) 赤外線吸収スペクトルの測定

調製した微粉碎試料を以下の条件で測定した〔山田, 1986〕。

装置：島津製作所製 F T I R - 8 1 0 0 A

測光値 (Measuring mode) : %T

分解能 (Resolution) : 4.0cm⁻¹

積算回数 (No. of Scan) : 40回

ゲイン (Gain) : 自動

ミラー速度 (Detector) : 2.8mm/sec

アポダイズ関数 (Apodization) : Happ-genzel

測定範囲 : 4600~400cm⁻¹

測定方法 : K B r ミクロ錠剤法

4 結 果

(1) 胎土分析

2点の試料ともに胎土中に含まれる砂粒は微量であり、砂の粒径も0.1mm以下である。砂を構成するのは、ほとんどが石英またはカリ長石の微細片であり、他の鉱物片や岩石片はほとんど認められない。ただし、土器底部の試料には極めて微量の斜長石および角閃石の鉱物片が認められた。素地は2点の試料ともに、緻密で孔隙はわずかに認められる程度、孔隙の伸びた形に素地の方向性がやや窺える。素地を構成する粘土鉱物は、ほとんどガラス化しておらず、焼成温度の低い土師器であることがわかる。また、酸化鉄が含まれており、微小な酸化鉄塊も認められる。観察結果を第2表に示す。

第2表 胎土薄片観察結果

試料	砂 粒			砂粒の種類構成				孔隙度	方向性	粘土残存量	含鉄量
	全体量	淘汰度	最大径	石英	カリ長石	斜長石	角閃石				
ナカザワ カクニン道5トレ 990819 (底部:40,第32図21B)	+	○	0.1	+	+	(+)	(+)	×	△	◎	△
ナカザワ カクニン道5トレ 990819 (胸部:42,第32図21A)	+	○	0.1	+	+			×	△	◎	△

量比……………◎：多量 ○：中量 △：少量 +：微量 (+)：極めて微量
 淘汰度……………○：良好 △：中程度 ×：不良
 孔隙度……………○：多い △：中程度 ×：少ない
 方向性……………○：強い △：中程度 ×：弱い
 砂粒の最大径の単位はmm

部の試料には極めて微量の斜長石および角閃石の鉱物片が認められた。素地は2点の試料ともに、緻密で孔隙はわずかに認められる程度、孔隙の伸びた形に素地の方向性がやや窺える。素地を構成する粘土鉱物は、ほとんどガラス化しておらず、焼成温度の低い土師器であることがわかる。また、酸化鉄が含まれており、微小な酸化鉄塊も認められる。観察結果を第2表に示す。

(2) 付着物分析

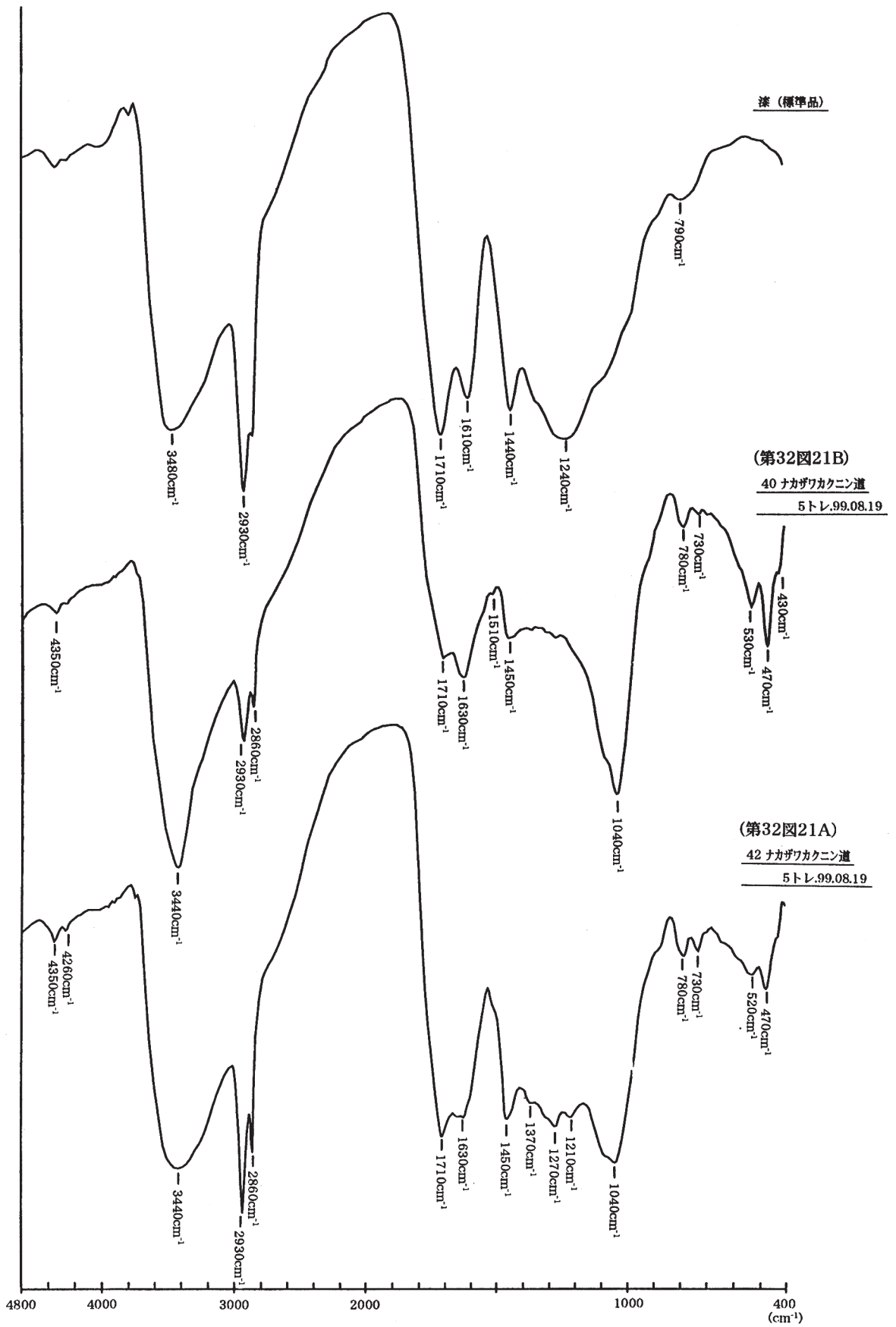
試料および漆の標準物質の赤外線吸収スペクトルを第41図に示した。漆の標準物質の吸収スペクトルは3480cm⁻¹、1240cm⁻¹、790cm⁻¹付近に幅広く強い吸収帯、2930cm⁻¹、1710cm⁻¹、1610cm⁻¹、1440cm⁻¹付近の吸収帯が特徴的である。この内、3480cm⁻¹、790cm⁻¹はO-H基の伸縮・変角振動、またこれに関連する吸収と判断される。また、2930cm⁻¹、1440cm⁻¹はC-H基、1610cm⁻¹、1240cm⁻¹はC=C基、1710cm⁻¹はC=O基と判断される。

一方、試料の吸収スペクトルについては1100cm⁻¹以下に土師器胎土混入に伴ったSi-O基の伸縮振動が顕著に認められるものの、他の特徴的な吸収帯が漆の標準物質のスペクトルと酷似していることが指摘される。なお、上記吸収帯以外にも弱い吸収帯が認められるが、これらは強い吸収帯に付随する吸収帯であると考えられる。

5 考 察

(1) 胎土について

胎土を構成している粘土や砂の由来を知る手がかりとなるのは、含まれている鉱物片の種類や岩石片の種類である。今回は、岩石片はなく、鉱物片もほとんど石英とカリ長石のみである。石英は、様々な種類の岩石に含ま



第41図 土器附着物のIRスペクトル

れる鉱物であり、また風化に強いために未固結の砂や泥の中にも多く含まれている。カリ長石は石英ほど普遍的ではないが、酸性火成岩をはじめとする多くの岩石に含まれている。したがって、今回の結果のみから胎土の由来を考えることはできない。

今後は、加茂市周辺あるいは越後平野における同時期の土師器中に今回の試料と胎土の類似する土器を見出し、薄片観察による確認をした上で、その分布を明らかにすることができれば、今回の試料についても再評価ができると考える。

(2) 付着物について

パリノ・サーヴェイ (株) では試料の出所が既知の物質について、同一測定条件で赤外線吸収スペクトルを測定した例がいくつかあるが (未公表)、遺跡で検出される黒色物質の代表として漆、天然アスファルト、松脂、動植物油、炭化物などが調査例としてあげられる。これらは、いずれも固有の赤外吸収スペクトルの吸収帯があり、漆では 3480 、 2930 、 1710 、 1610 、 1440cm^{-1} 、天然アスファルトでは 2900 、 1600 、 1460 、 1380cm^{-1} と脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯に特徴がある。また、松脂は 1700cm^{-1} 、動植物油は 1740cm^{-1} 、炭化物は $1140\sim 1160\text{cm}^{-1}$ に特徴ある吸収帯がある。

今回の分析調査では漆の可能性を検討したが、 $\text{Si}-\text{O}$ 基の吸収振動を除いて考えると試料のスペクトルパターンは漆のスペクトルパターンに酷似していることが指摘される。特に試料の吸収スペクトル中に漆に特徴的に認められる 2930 、 2860 、 1710cm^{-1} の $\text{C}-\text{H}$ 基、 $\text{C}=\text{O}$ 基の吸収が認められることから、その性状は漆に近いと考えられる。

引用文献

山田富貴子 (1986) 赤外線吸収スペクトル法. 『機器分析のてびき第1集』 : p.1-18, 化学同人.

VII ま と め

1 平成11年度調査成果について

平成11年度の調査件数は8事業に係わり、9遺跡・1遺跡周辺・1地内を対象とした過去最高の件数となったが、8事業の内訳は県営ほ場整備が2、民間開発が3、道路建設が3となり、それぞれの地区も七谷～須田地区と広域に散在した。結果的に遺跡の状況及び工事方法を勘案し、本発掘調査が回避できなかったケースは民間開発に伴う中沢遺跡と道路建設事業に伴う中沢遺跡の二つであった。前者については、すでに緊急的な調査が行われており、後者については平成12年度以降に実施する予定になっている。他の遺跡についてはほとんどが工事立ち会い調査で対応することとなった。報告の最後にあたり、各遺跡の調査成果や課題等を記しておきたい。中沢遺跡については、情報量も多く、別にして述べたい。

たて屋敷遺跡では、昨年度と本年度の2ヶ年度にわたり確認調査が実施されたが、地名に残る館屋敷、町屋敷などを具体的に証明する遺構・遺物は発見されなかった。しかしながら、少量ではあるが中世陶器が出土したことは、調査対象区域外部に該期の遺跡が展開している可能性を示唆したと言えよう。また、小片ながら弥生土器の出土は七谷地区の歴史を考える際に軽視できない資料であり、今後の更なる出土事例の増加に期待したい。

古見道遺跡については当初、縄文時代の遺跡と考えられたが、該期の遺構・遺物は全く出土しなかった。地盤は礫層で、遺構を形成できる状況は看取されなかった。遺跡があるとするれば、民家や墓地がある一段小高い地点であろうが、更なる検討が必要である。なお、本年度では場整備事業に係わる、大谷地区での調査は終了した。

岩野原A遺跡では遺跡中心部から小さい沢を挟んだ地点を対象にした調査であったため、少量の縄文土器が出土したに留まった。本遺跡は加茂川流域最大の平坦面を有する台地にあり、旧石器～縄文晩期までの活動痕跡が窺えるが、今回の調査地点からは小規模ながらも土地利用の在り方を窺うことができた。

馬寄遺跡周辺地の調査では、馬寄遺跡と同時期かと考えられる古式土師器が少量ながら出土し、遺跡の縁辺部に相当することが考えられた。沖積低地部での古墳時代前期の活動痕跡を示唆する資料として位置づけられる。

山伏塚遺跡は信濃川左岸の須田地区にあるが、須田地区における遺跡調査は今回で二回目である。今回を含めいずれも、遺構・遺物は発見されなかった。山伏塚遺跡はいわゆる塚のマウンドが存在したと考えられるが、現在その形跡はなく、下部においても遺跡の存在は認められなかった。

舞臺遺跡では調査上の制約もあり、遺構は検出できなかったが、少量の中世～近世の陶磁器が出土し、遺跡の拡がりを確認することができた。ただ、遺跡の中心は平成8年調査区域から南部に展開するものと考えられ、今後の周辺での調査を期待したい。

横土居遺跡・稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡・天神林地内の調査では西吉津川遺跡周辺から少量の珠洲焼などが出土したのみであり、地盤の安定した地点も少なかった。しかし、調査方法や対象区域が限定された中で実施していることもあり、本来の遺跡の内容については明らかにしえないことが多い。来年度以降も吉津川地区県営ほ場整備事業に係わり、試掘・確認調査が継続されることになっており、遺跡の内容を把握できるように努めたい。

2 中沢遺跡と平安時代の土器について

中沢遺跡は民間開発(工場建設)と道路建設に係わり隣接した2地点が調査された。調査対象区域は、平成9年に調査された地点と合わせ、中沢遺跡推定範囲の南東部で、最も丘陵部寄りに位置している。平成8年に今回の調査地点から南東約100mの地点において10世紀代の土器が出土しており、遺跡は丘陵部寄りに向かい拡がるこ

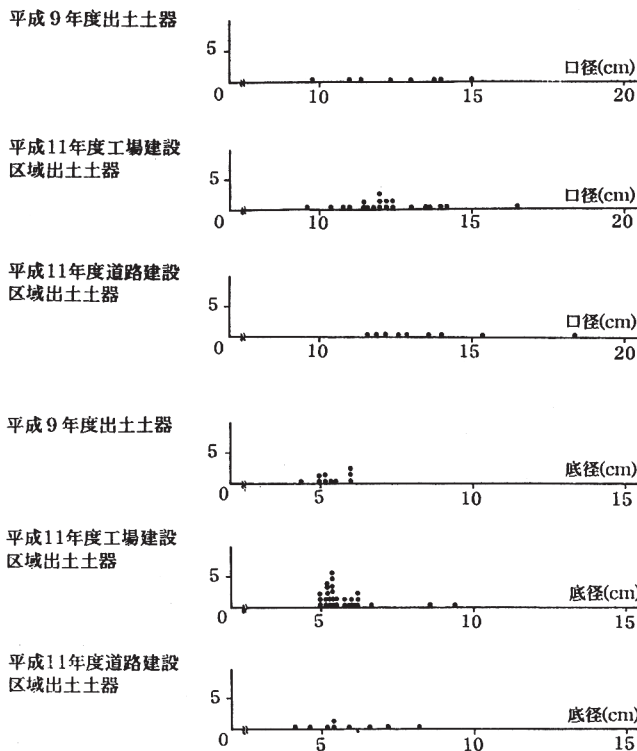
とは確実である〔伊藤1997b〕。中沢遺跡は、加茂市内における平安時代の最大規模の遺跡のひとつである。

調査の結果、遺構は工場建設予定地10トレンチで検出された土坑1基と稀薄な状況ではあるが、有段口縁甕を中心とした弥生時代後期後半、法仏式の古相に比定される土器が出土した。年代は平成9年度出土の遺物と同じと見られる〔伊藤1998〕。中沢遺跡は現在までのところ加茂市内唯一の弥生時代の遺跡であると同時に、周辺地域の同時期の遺跡の多くが丘陵上に立地していることから、沖積地にある稀少な事例である。

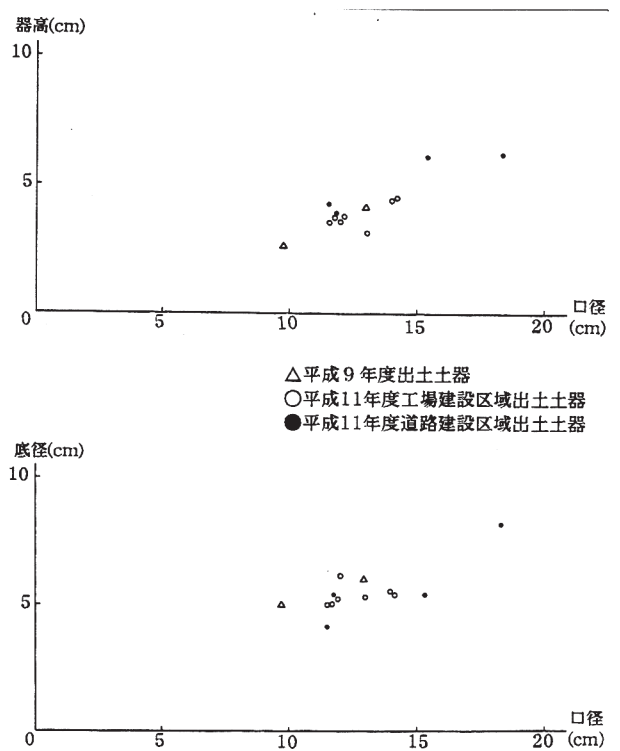
古墳時代の土器も少量見られるが、本遺跡の主体となる時期は平安時代である。工場建設予定地では1・5・6・10トレンチ以外で溝状遺構、土坑などが検出され集落の一部に相当するものと見られる。道路建設予定地においても溝状遺構、土坑などが検出されていることから、やはり集落跡が存在するものと考えられる。しかし、ここで確認しておきたい点は、工場建設予定地と道路建設予定地では遺物出土層位と遺構確認面が異なる深さにあることである。工場建設予定地では現地表面が削平されていたこともあるが、概ね上層面出土とした遺物は現地地表下約30～60cmの黒色土から出土している。平成9年度調査地区においても現地地表下約40～60cm下から遺物が出土しており、ほぼ同じ状況であることが窺える。これに対し、道路建設予定地では現地地表下約100cm前後の暗灰色土系の土層から定量出土している。これは、以下で、両者の出土土器の様相を比較検討するが、そこに時期差が認められることを裏付ける事実として把握しておきたい。

様相差を導きだすために主に食膳具の形態と土師器無台碗の法量分布図などから検討して見たい。食膳具は須恵器無台杯・有台杯・杯蓋・有台碗、土師器無台碗・有台碗、黒色土器碗が確認されるが、工場建設予定地では須恵器食膳具が極めて少なく、土師器無台碗が卓越している。平成9年度調査地区においては、須恵器食膳具は全く出土していない。これに対し、道路建設予定地では須恵器食膳具が一定量出土している。

次に土師器無台碗の口径・底径分布図と法量分布図を見ると、口径分布では平成9年度調査地区・工場建設予定地では10cm前後のものが見られるが、道路建設予定地では10cm前後のものはなく、概して大きい傾向にある。底径分布では、平成9年度調査地区・工場建設予定地において5～6cm前後にほぼ収まるが、道路建設予定地では



第42図 中沢遺跡土師器無台碗口径・底径分布図



第43図 中沢遺跡土師器無台碗法量分布図

散在する傾向が窺える。次に法量分布図で器高指数を見ると、平成9年度調査地区・工場建設予定地では27と29～33にまとまる。一方、道路建設予定地では33、34、36、40と大きいものが存在する。底径指数は平成9年度調査地区・工場建設予定地で38～51、道路建設予定地で34～45を示し、後者がやや小さい傾向を持つようである。いずれにしても、遺構一括出土などの良好な資料からの操作ではなく、資料数も少ないことから、慎重に判断する必要があるが、両地点の概ねの傾向は窺うことができよう。

食膳具に占める須恵器食膳具の定量の出土があることや小泊窯産の器形、土師器無台椀の器高指数において35を超えるものが存在することから道路建設予定地出土土器は春日氏の編年1期〔春日1997b〕、9世紀末～10世紀初頭頃に、工場建設予定地内の出土土器は大半が平成9年度出土土器と同じく須恵器食膳具が極めて少ないことや土師器無台椀口径の小型化や足高高台椀が見られることなどから、春日氏の編年3期〔春日1997b〕、10世紀中葉～後半に位置づけられるものと考えられる。

以上から、道路建設予定地は工場建設予定地よりも、やや古い平安時代の活動痕跡をとどめることが明らかであり、両地点における集落様相や微地形等の環境に違いがあったことに注意を向けながら、今後の調査にあたる必要がある。

【引用・参考文献】

- 伊藤秀和 1996 『平成7年度加茂市内遺跡確認調査報告書－屋敷田遺跡 上大谷地内 草生津遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1997a 『平成8年度加茂市内遺跡確認調査報告書－丸瀧遺跡 鬼倉遺跡 馬越遺跡 蚊口太遺跡 寺屋敷跡 馬寄遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1997b 「加茂市中沢遺跡出土の土器について」 『越佐補遺些』第2号 越佐補遺些の会
- 伊藤秀和 1998 『平成9年度加茂市内遺跡確認調査報告書－丸瀧遺跡 新通遺跡 馬越遺跡 上條館跡 中沢遺跡 石川遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1999 『平成10年度加茂市内遺跡確認調査報告書－たて屋敷遺跡 蚊口太遺跡 草生津遺跡 伝涌泉寺跡遺跡 大塚遺跡 馬越遺跡 鬼倉遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2000 「加茂川下流右岸域における奈良・平安時代の遺跡について－表採遺物の紹介から－」 『加茂郷土誌』第22号 加茂郷土調査研究会
- 春日真実・上野一久 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 上郷遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997a 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」 『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1997b 「越後における10・11世紀の土器様相」 『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 金子正典 1999 『内野手遺跡・経塚山遺跡』 三条市教育委員会
- 川上貞雄ほか 1987 『東部地区遺跡詳細分布調査報告書』 加茂市教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」 『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 関 正平 1975 「第2節 天神林村の成立と構成」 『加茂市史』下巻 加茂市
- 関 正平 1991 「加茂町・浅野家文書について」 『加茂郷土誌』第15号 加茂郷土調査研究会
- 高橋雅弘 1997 「加茂市内及びその周辺の中世城館跡(その一)－七谷地区を中心に(上)－」 『加茂郷土誌』第19号 加茂郷土調査研究会
- 滝沢規朗ほか 1992 『西谷遺跡発掘調査報告書』 刈羽村教育委員会
- 田中 靖 1995 『門新遺跡』 和島村教育委員会
- 田畑 弘 1994 『道下・白地遺跡』 田上町教育委員会
- 鳴海忠夫 1994 「加茂市上条城跡について－要害の縄張りを中心として」 『加茂郷土誌』第17号 加茂郷土調査研究会
- 八百枝茂 1975 「第2編 考古」 『加茂市史』上巻 加茂市
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

第3表 遺物観察表

凡例

法量 (cm) □=口径 底=底径 高=器高
胎土 石=石英 長=長石 金=金雲母
海針=海綿骨針 白微=白色微粒子

たて屋敷遺跡

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考
第5図	1	表探	珠洲焼	壺	底部	底10.0	白微	N6/ 灰	普通	底外静止糸切り	
	2	15トレンチ	弥生土器?		体部		石・長・海針	10YR5/2 灰黄褐	普通	沈線による文様	
	3	26トレンチ	珠洲焼	甕	体部		石・長・海針	7.5YR6/1 灰	不良	外綾杉状	

中沢遺跡 (工場建設予定地)

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考
第12図	1	3トレスD1	土師器	無台碗	底部	底6.0	石・長・小礫	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	底外回転糸切り	
	2	3トレスD1	土師器	長甕	口縁部		石・小礫	5YR7/6 橙	普通		
	3	4トレスD1	土師器	無台碗	口~底部	□14.0 底5.5 高4.4	石・小礫・金	7.5YR7/4 にぶい橙	普通	底外回転糸切り	
	4	4トレスD1	土師器	無台碗	口~底部	□12.0 底5.2 高3.5	石・長・小礫	10YR7/2 にぶい黄橙	普通	底外回転糸切り	
	5	4トレスD1	土師器	無台碗	口~底部	□11.8 底5.0 高3.7	石・長・小礫・金	10YR6/3 にぶい黄橙	普通	底外回転糸切り	
	6	4トレスD1	土師器	無台碗	口縁部	□12.4	石・海針	10YR8/2 灰白	普通		
	7	4トレスD1	土師器	無台碗	口縁部	□11.7	石・長・小礫・金	7.5YR7/2 明褐灰	普通		
	8	4トレスD1	土師器	無台碗	口縁部	□10.8	石・長・小礫	7.5YR7/4 にぶい橙	普通		
	9	4トレスD1	土師器	無台碗	底部	底9.4	石・長・海針	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	底外回転糸切り	
	10	4トレスD1	土師器	無台碗	底部	底6.7	石・長・小礫・金	10YR7/2 にぶい黄橙	不良	底外回転糸切り	
	11	4トレスD1	土師器	無台碗	底部	底6.2	石・長・小礫	7.5YR7/2 明褐灰	不良	底外回転糸切り	
	12	4トレスD1	土師器	無台碗	底部	底5.4	石・長・小礫	7.5YR7/4 にぶい橙	普通	底外回転糸切り	
	13	4トレスD1	土師器	無台碗	底部	底5.4	石・長・小礫	7.5YR7/4 にぶい橙	普通	底外回転糸切り	
	14	4トレスD1	土師器	無台碗	底部	底5.3	石・長・小礫・金	2.5Y6/1 黄灰	普通	底外回転糸切り	
	15	4トレスD1	土師器	無台碗	底部	底5.3	石・小礫	7.5YR7/4 にぶい橙	普通	底外回転糸切り	
	16	4トレスD1	土師器	無台碗	底部	底5.3	石・長・小礫	10YR8/1 灰白	良好	底外回転糸切り	
	17	4トレスD1	土師器	無台碗	底部	底5.1	石・長・小礫	10YR7/2 にぶい黄橙	普通	内面ミガキ・底外回転糸切り	
	18	4トレスD1	黒色土器	無台碗	口縁部	□16.8	石・小礫・海針・金	7.5YR7/4 にぶい橙	普通	内面黒色処理	
	19	4トレスD1	土師器	鍋	口縁部		石・小礫	7.5YR7/4 にぶい橙	普通		
	20	4トレスD1	土師器	鍋	口縁部		石・長・小礫・金	7.5YR7/4 にぶい橙	普通		
	22	8トレスD1	土師器	無台碗	口縁部	□11.0	石・小礫	10YR7/2 にぶい黄橙	普通		
	23	8トレスD1	土師器	無台碗	底部	底5.2	石・小礫	10YR7/2 にぶい黄橙	普通	底外回転糸切り	
	24	8トレスD1	土師器	鍋	体部		石・小礫・金	7.5YR7/4 にぶい橙	普通	外面平行タタキ	
	25	8トレスD2	土師器	無台碗	口縁部	□12.0	石・小礫・金	10YR7/2 にぶい黄橙	普通		内スス
	26	8トレスD3	古式土師器	器台	脚部		石・小礫	2.5Y7/2 灰黄	普通		
	27	8トレスD4	古式土師器	器台	脚部		石・小礫	10YR6/3 にぶい黄橙	普通		
	28	8トレスD4	須恵器	無台杯	底部	底9.4	石・白微	7.5YR6/1 褐灰	普通	底外ヘラ切り無調整	
	29	8トレスD4	土師器	無台碗	底部	底5.8	石・小礫	10YR8/3 浅黄橙	普通	底外回転糸切り	
	30	9トレスD2	須恵器	無台杯	底部	底8.2	石	2.5Y5/3 黄褐	不良		
	31	9トレスD2	土師器	無台碗	口縁部	□12.3	石・小礫	10YR7/2 にぶい黄橙	普通		
	32	9トレスD2	土師器	有台碗	口~台部	□13.9 台6.3 高5.2	石・長・小礫・金	7.5YR7/3 にぶい橙	普通		足高高台
	33	9トレスD2	土師器	甕	体部		石・海針	7.5YR7/4 にぶい橙	普通	外面平行タタキ	
	34	9トレスD2	土師器	甕	体部		石・小礫・金	10YR7/2 にぶい黄橙	普通	外面平行タタキ	
36	9トレスD4	土師器	無台碗	口~底部	□13.0 底5.3 高3.2	石・小礫・海針	7.5YR7/4 にぶい橙	不良	底外回転糸切り		
37	10トレスK1	弥生土器	甕	口縁部	□21.2	石・長・小礫多量	7.5YR8/2 灰白	不良	口縁外8条の擬凹線文		
第13図	38	10トレンチ	弥生土器	甕	口縁部	□27.7	石・長・小礫多量	2.5YR7/3 淡赤橙	不良	口縁外9条の擬凹線文、体外刺突文	
	39	2トレンチ	弥生土器	甕	口縁部	□22.8	石・長・小礫多量	10YR7/2 にぶい黄橙	普通	口縁外6条の擬凹線文、体内ヘラケズ!	
	40	1トレンチ	弥生土器	甕	口縁部	□15.4	石・小礫多量	10YR7/2 にぶい黄橙	不良	口縁外4条の擬凹線文、体内ヘラケズ!	
	41	2トレンチ	弥生土器	甕	口縁部		石・小礫多量	7.5YR8/3 浅黄橙	不良		
	42	1トレンチ	弥生土器	甕	口縁部		石・長・小礫多量	10YR7/2 にぶい黄橙	不良	口縁外2条の擬凹線文	
	43	10トレンチ	弥生土器	甕	体部		石・長・小礫多量	10YR7/2 にぶい黄橙	不良	体外刺突文とハケメ	
	44	10トレンチ	弥生土器	甕	底部	底4.0	石・長・小礫多量	2.5YR6/6 橙	普通	上げ底	
	45	10トレンチ	弥生土器	甕	底部	底3.3	石・長・小礫多量	10YR7/2 にぶい黄橙	普通	上げ底、体外ハケメ、指ナデ頂	
	46	1トレンチ	弥生土器	壺	口縁部		石・長・小礫多量	7.5YR7/4 にぶい橙	不良		
	47	1トレンチ	弥生土器	壺	口縁部	□10.0	石・小礫多量	7.5YR8/3 浅黄橙	普通		
	48	10トレンチ	弥生土器	高杯	口縁部	□28.6	石・長・小礫多量	7.5YR7/4 にぶい橙	普通		
	49	4トレンチ	古式土師器	甕	口縁部	□29.2	石・長・海針	10YR7/2 にぶい黄橙	普通		
	50	7トレンチ	古式土師器	甕	口縁部		石・長・小礫・金	10YR7/3 にぶい黄橙	不良		外スス
	51	7トレンチ	古式土師器	甕	底部	底4.0	石・長・小礫	2.5YR6/6 橙	普通		
	52	7トレンチ	古式土師器	碗	口~底部	□14.7 底6.4 高5.9	石・長・小礫・海針	7.5YR5/2 灰褐	不良		外スス
	53	7トレンチ	古式土師器	高杯	脚部		石・長	10YR8/4 浅黄橙	普通		

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考
第13 区	54	7トレンチ	古式土師器	高杯	脚部	底9.2	石・長・小礫	10YR8/4 浅黄橙	普通	内外面ハケメ	
	55	3トレンチ	須恵器	無台杯	口縁部	口12.2	石・白微	5B4/1 暗青灰	良好		黒斑
	56	9トレンチ	須恵器	無台杯	底部	底6.4	石・白微	N6/ 灰	普通		底外墨書
	57	9トレンチ	須恵器	無台杯	底部		石・白微	N7/ 灰白	不良		底外墨書
	58	3トレンチ	須恵器	壺	底部	台11.0	石・白微	N4/ 灰	普通		
	59	3トレンチ	須恵器	甕	体部		石・白微	10BG4/1 暗青灰	普通	外面格子タタキ、内面平行当て具	
	60	4トレンチ	須恵器	甕	体部		石・白微	N6/ 灰	普通	外面格子タタキ、内面平行当て具	
	61	3トレンチ	須恵器	甕	体部		石・白微	N6/ 灰	普通	外面格子タタキ、内面平行当て具	
	62	3トレンチ	須恵器	甕	体部		石・白微	5B5/1 青灰	普通	外面格子タタキ、内面平行当て具	
	63	8トレンチ	須恵器	甕	体部		石・長	N4/ 灰	普通	外面平行タタキ、内面同心円当て具	
	64	9トレンチ	須恵器	甕	体部		石・白微	5B5/1 青灰	普通	外面平行タタキ、内面同心円当て具	
	65	9トレンチ	土師器	無台碗	口～底部	口14.2 底5.4 高4.5	石・長・海針	2.5Y6/6 橙	不良	底外回転糸切り	
	第14区	66	8トレンチ	土師器	無台碗	口～底部	口12.2 底6.1 高3.8	石・長・海針	5YR7/6 橙	普通	底外回転糸切り
第13区	67	3トレンチ	土師器	無台碗	口～底部	口11.6 底5.0 高3.5	石・長・海針	10YR7/3 にぶい黄橙	普通	底外回転糸切り	
第14 区	68	3トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	口16.5	石・長・小礫・金	10YR8/2 灰白	普通		
	69	4トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	口13.6	石・長	7.5YR7/4 にぶい橙	普通		
	70	5トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	口13.5	石	10YR6/3 にぶい黄橙	普通		
	71	9トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	口12.4	石・長・小礫・金	7.5YR7/4 にぶい橙	普通		
	72	9トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	口12.0	石・長	7.5YR6/1 褐灰	普通		
	73	3トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	口12.0	石・長・小礫	10YR8/2 灰白	普通		
	74	9トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	口10.4	石・長・小礫	2.5YR7/4 淡赤橙	普通		
	75	5トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	口9.6	石・長・小礫	7.5YR7/4 にぶい橙	普通		
	76	4トレンチ	土師器	無台碗	底部	底8.6	石・長・小礫	7.5YR7/4 にぶい橙	不良	底外回転糸切り	
	77	3トレンチ	土師器	無台碗	底部	底6.2	石・長・小礫・金	7.5YR7/3 にぶい橙	普通	底外回転糸切り	
	78	3トレンチ	土師器	無台碗	底部	底6.2	石・長・小礫	7.5YR7/3 にぶい橙	不良		
	79	4トレンチ	土師器	無台碗	底部	底6.0	石・長・小礫・金	7.5YR7/3 にぶい橙	普通	底外回転糸切り	
	80	9トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.9	石・長	7.5YR8/2 灰白	普通	底外回転糸切り	
	81	5トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.8	石・海針	10YR7/2 にぶい黄橙	普通	底外回転糸切り	
	82	9トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.5	石・長・小礫・金	2.5YR6/6 橙	普通	底外回転糸切り	
	83	3トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.4	石・長・小礫・金	7.5YR8/3 浅黄橙	普通	底外回転糸切り	
	84	3トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.4	石・長・小礫	2.5YR6/6 橙	普通		
	85	3トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.3	石・長・小礫	2.5YR6/6 橙	普通	底外回転糸切り	
	86	3トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.3	石・長・小礫	5YR7/6 橙	普通	底外回転糸切り	
	87	9トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.2	石・長・小礫	7.5YR8/2 灰白	不良	底外回転糸切り	
	88	3トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.0	石・長・小礫	5YR7/6 橙	普通	底外回転糸切り	
	89	4トレンチ	土師器	有台碗	高台部	台8.0	石・長	10YR7/2 にぶい黄橙	普通		
90	4トレンチ	黒色土器	無台碗	口縁部	口16.0	石・長・小礫	7.5YR8/2 灰白	普通	内面黒色処理		
91	9トレンチ	土師器	長甕	口縁部	口21.2	石・長・小礫	7.5YR8/3 浅黄橙	普通			
92	9トレンチ	土師器	長甕	体部		石・長・海針	10YR5/2 灰黄褐	普通	外面平行タタキ		
93	9トレンチ	土師器	長甕	体部		石・長・小礫	5YR8/3 淡橙	普通	外面平行タタキ		
94	7トレンチ	土師器	長甕	体部		石・長	10YR5/2 灰黄褐	普通	外面平行タタキ	外スス	
95	3トレンチ	土師器	長甕	体部		石・長・小礫	10YR6/1 褐灰	普通	外面平行タタキ、内面平行当て具		
96	9トレンチ	土師器	長甕	体部		石・長・小礫	2.5YR7/4 淡赤橙	普通	外面平行タタキ、内面平行当て具		
97	9トレンチ	土師器	小甕	口縁部	口15.0	石・長・小礫・金	10YR7/3 にぶい黄橙	普通			
98	8トレンチ	土師器	小甕	底部	底5.7	石・長・小礫・海針	2.5YR6/6 橙	普通	底外回転糸切り	外スス	
99	9トレンチ	土師器	鍋	口縁部	口36.0	石・長・小礫	7.5YR8/4 浅黄橙	普通			

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	重量	色調	石材	備考
第12 区	21	4トレスD1	鉄滓	椀形鍔	治滓	長さ7.8 幅5.4 厚み2.4	145.5	7.5R2/2 極暗赤褐	—	
	35	9トレスD2	石製品	砥石		長さ4.8 幅3.9 厚み3.2	72.5	2.5Y8/3 淡黄	凝灰岩	
第14区	100	9トレンチ	鉄滓	羽口		長さ4.7 幅4.3 厚み1.7	26.5	N6/ 灰	—	

岩野原A遺跡

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考
第19区		1トレンチ	縄文土器	深鉢	底部	底7.5	石・長・小礫	2.5YR7/3 浅黄	不良	体外斜行縄文	

馬寄遺跡周辺地

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考
第23区		1トレンチ	古式土師器	蓋	鈕～口縁部	鈕1.7 口7.9 高2.4	石・長・小礫	10YR7/2 にぶい黄橙	普通	口端部に刻み	内外赤彩

中沢遺跡（道路建設予定地）

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考
第 31 図	1	4 トレンチ	弥生土器	甕	口縁部		石・長・小礫	2.5YR6/6 橙	普通		
	2	5 トレンチ	須恵器	無台椀	口～底部	口12.4 底7.2 高2.9	石・白微	5B4/1 暗青灰	普通	底外ヘラ切り	体外墨書
	3	3 トレンチ	須恵器	無台椀	口～底部	口13.0 底9.5 高3.3	石・白微	2.5GY6/1 オリーブ灰	普通	底外ヘラ切り	
	4	2 トレンチ	須恵器	無台椀	底部	底9.0	石・白微	N5/ 灰	普通	底外ヘラ切り	
	5	3 トレンチ	須恵器	無台椀	底部	底7.4	石・白微	N6/ 灰	普通	底外ヘラ切り	
	6	2 トレンチ	須恵器	無台椀	底部	底7.3	石・白微	N6/ 灰	普通	底外ヘラ切り	
	7	3 トレンチ	須恵器	有台椀	口～台部	口14.6 台8.6 高6.4	石・白微	N7/ 灰白	普通		
	8	2 トレンチ	須恵器	有台椀	高台部	台7.2	石・白微	N6/ 灰	普通		
	9	2 トレンチ	須恵器	蓋	鈕～口縁	口12.3 鈕3.1 高1.9	石・白微	N5/ 灰	普通		内自然釉
	10	5 トレンチ	須恵器	蓋	鈕部	鈕3.1	石・白微	N7/ 灰白	不良		
	11	3 トレンチ	須恵器	有台椀	高台部	台7.0	石・長	N6/ 灰	普通		
	12	4 トレンチ	須恵器	横瓶	口縁部	口10.8	石・白微	N3/ 暗灰	普通		内自然釉
	13	2 トレンチ	須恵器	短頸壺	口縁部		石・長	N7/ 灰白	普通		外自然釉
	14	3 トレンチ	須恵器	甕	体部		石・白微	N5/ 灰	普通	外面平行タタキ、内面平行当て具	
	15	5 トレンチ	須恵器	甕	体部		石	N6/ 灰	普通	外面平行タタキ、内面同心円当て具	内外黒斑
	16	5 トレンチ	須恵器	甕	体部		石・長	5B5/1 青灰	良好	外面平行タタキ、内面同心円当て具	
	17	5 トレンチ	須恵器	甕	体部		石・白微	5B6/1 青灰	普通	外面格子タタキ、内面同心円当て具	
	18	3 トレンチ	須恵器	甕	体部		石・長	5B6/1 青灰	普通	外面平行タタキ、内面同心円当て具	
	19	4 トレンチ	須恵器	甕	体部		石・長	N5/ 灰	普通	外面平行タタキ、内面同心円当て具	
第 32 図	20	4 トレンチ	土師器	無台椀	口～底部	口18.4 底8.2 高6.2	石・長・小礫・金	2.5YR6/8 橙	普通	底外回転系切り	
	21	5 トレンチ	土師器	無台椀	口～底部	口15.4 底5.4 高6.1	石・長	2.5Y 8/2 灰白	普通	底外回転系切り	内漆付着
	22	3 トレンチ	土師器	無台椀	口～底部	口11.6 底4.1 高4.2	石・長・海針	10YR7/2 にぶい黄橙	普通	底外回転系切り	内スス
	23	4 トレンチ	土師器	無台椀	口～底部	口11.9 底5.4 高3.9	石・長・小礫	7.5YR8/4 浅黄橙	普通	底外回転系切り	
	24	4 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部	口14.0	石・長・小礫・海針	7.5YR8/4 浅黄橙	普通		
	25	4 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部	口13.6	石・長・小礫	10YR6/2 灰黄褐	普通		外スス
	26	4 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部	口12.9	石・長・小礫	7.5YR8/4 浅黄橙	普通		
	27	3 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部	口12.6	石・長	10YR8/2 灰白	良好		
	28	5 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部	口12.2	石・長・海針	7.5YR8/3 浅黄橙	普通		
	29	3 トレンチ	土師器	無台椀	底部	底7.2	石	10YR8/2 灰白	良好		底外墨書
	30	4 トレンチ	土師器	無台椀	底部	底6.6	石・長・小礫	2.5YR7/3 淡赤橙	不良	底外回転系切り	
	31	5 トレンチ	土師器	無台椀	底部	底5.9	石・長・小礫	5YR8/3 淡橙	普通	底外回転系切り	
	32	5 トレンチ	土師器	無台椀	底部	底5.2	石・長・小礫	2.5YR7/3 淡赤橙	普通	底外回転系切り	
	33	5 トレンチ	土師器	無台椀	底部	底4.6	石・長・小礫	10YR8/3 浅黄橙	良好	底外回転系切り	
	34	4 トレンチ	黒色土器	無台椀	底部	底7.5	石・長・小礫・海針	5YR7/4 にぶい橙	普通	内面黒色処理、底外ロクロズリ	
	35	3 トレンチ	土師器	長甕	口縁部	口19.3	石・長・小礫	10YR5/2 灰黄褐	普通		外スス
	36	5 トレンチ	土師器	長甕	口縁部	口18.0	石・長	10YR5/2 灰黄褐	普通		外スス
	37	5 トレンチ	土師器	長甕	体部		石・長・小礫	2.5YR6/6 橙	普通	外面平行タタキ、内面平当て具	
	38	4 トレンチ	土師器	長甕	体部		石・長・海針	7.5YR7/2 明褐灰	普通	外面平行タタキ	
	39	3 トレンチ	土師器	長甕	体部		石・長・小礫	7.5YR5/2 灰褐	普通	外面平行タタキ、内面ハケメ	内スス
	40	2 トレンチ	土師器	小甕	口～体部	口13.5	石・長・小礫	10YR8/3 浅黄橙	普通		
	41	3 トレンチ	土師器	小甕	口～体部	口12.3	石・長・小礫	10YR5/2 灰黄褐	普通		
	42	3 トレンチ	土師器	小甕	口～体部	口14.3	石・長・小礫	10YR7/2 にぶい黄橙	普通		内スス
	43	5 トレンチ	土師器	鍋	口縁部		石・長・小礫	5YR7/4 にぶい橙	普通		
	47	表探	珠洲焼	甕	体部		石・長・海針	N5/ 灰	普通	外面平行タタキ	

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	重量	色調	石 材	備 考
第 32 図	44	3 トレンチ	石製品	紡錘車		長さ4.6 幅(2.9) 厚み(2.9)	48.5	2.5Y8/3 淡黄	凝灰岩	
	45	4 トレンチ	鉄滓	羽口		長さ5.1 幅5.2 厚み(2.3)	44.5	N6/ 灰(外面溶着物付着)	——	外径6.8 内径2.8
	46	5 トレンチ	鉄滓	碗形鍛冶滓		長さ3.2 幅3.2 厚み2.2	6.0	N4/ 灰	——	

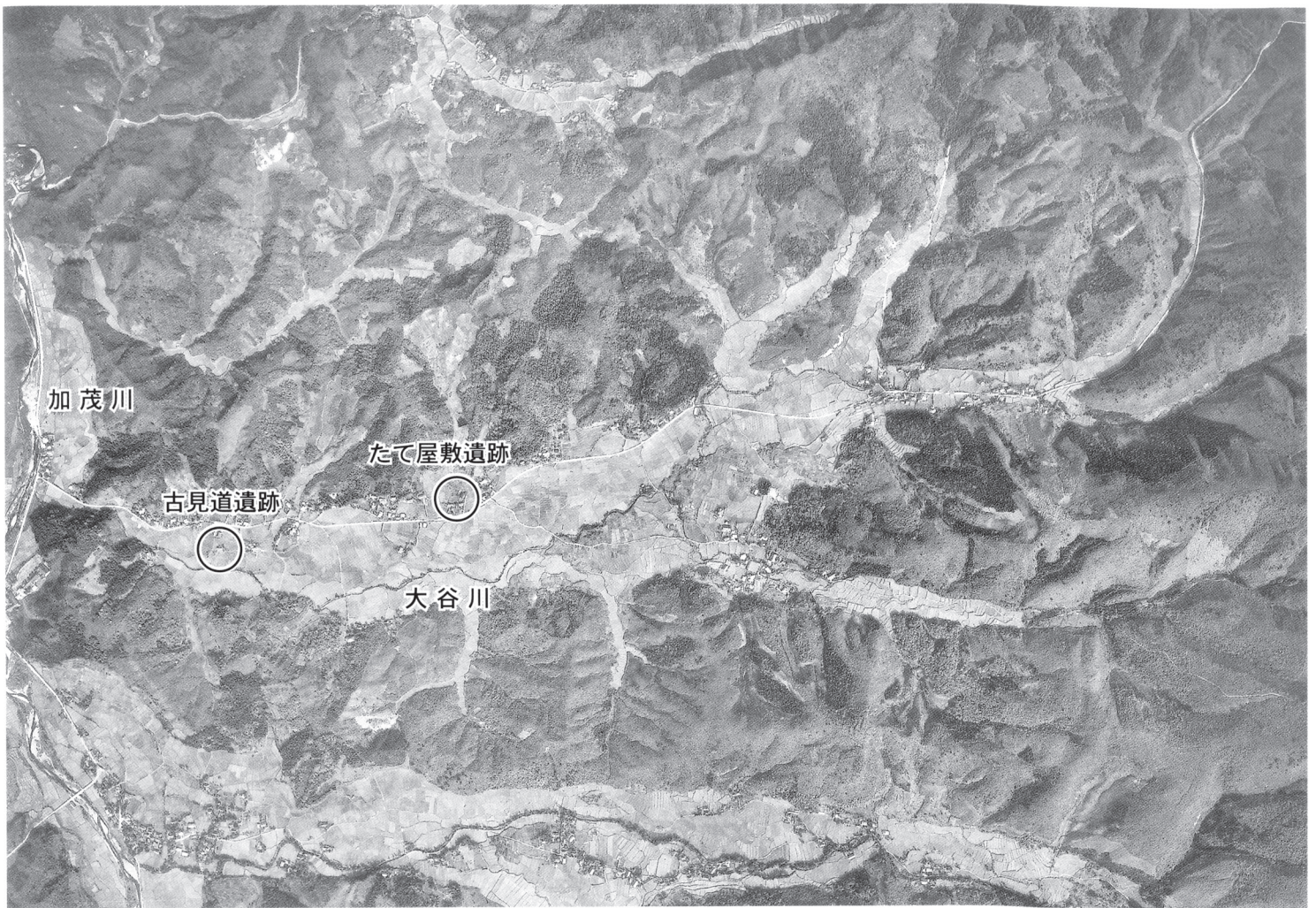
舞臺遺跡

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考
第 36 図	1	1 トレンチ	珠洲焼	播鉢	口縁部		石・長・海針	10YR7/1 灰白	不良	11条単位のまばらな節目	珠洲Ⅲ期
	2	2 トレンチ	肥前系陶器	播鉢	底部	底10.0	石・長	10R5/4 赤褐	普通	内面全面に節目、底外回転系切り	外有機物

天神林地内

図 No.	番号	出土位置	種別	器種	部位	法量	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考
第 40 図	1	23 トレンチ	土師器	甕	底部	底8.0	石・長・小礫	2.5Y4/1 黄灰	不良		
	2	25 トレンチ	珠洲焼	甕	体部		石・長・白微	5PB6/1 青灰	普通	外面綾杉状の細かいタタキ	

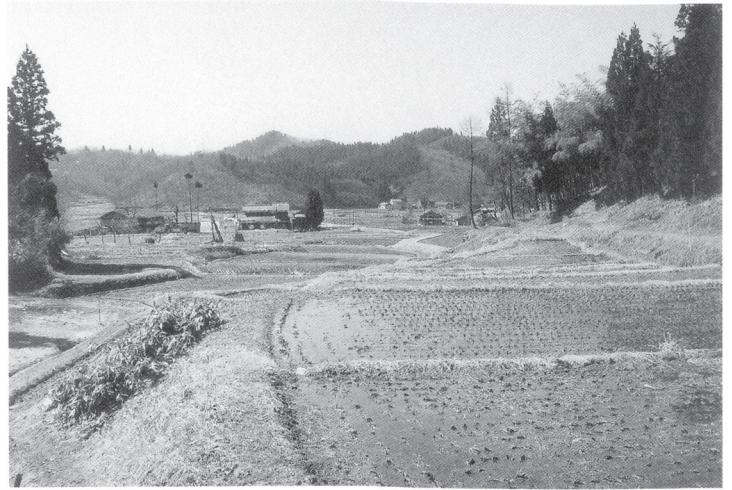
写 真 图 版



たて屋敷遺跡・古見道遺跡周辺の空中写真



15トレンチ周辺近景 南から



18~26トレンチ周辺近景 北から

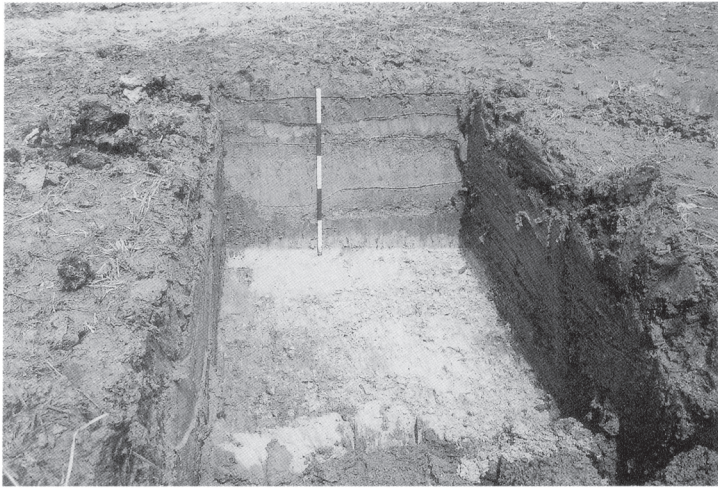


調査風景



調査風景

図版2 たて屋敷遺跡



1トレンチ土層断面 南から



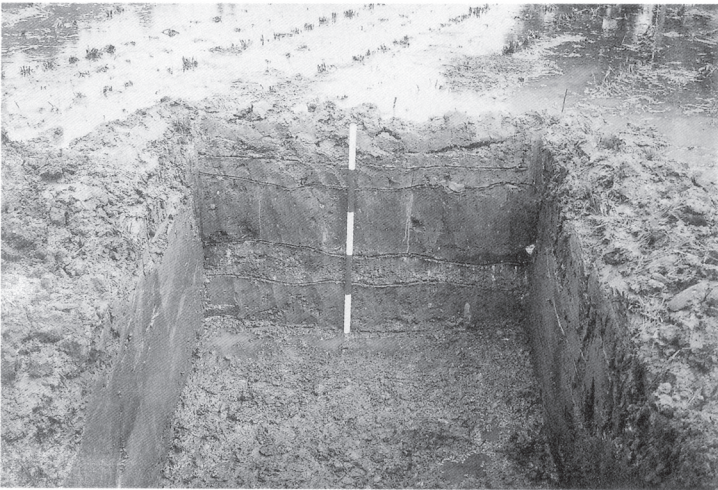
5トレンチ土層断面 北から



8トレンチ土層断面 北から



12トレンチ土層断面 西から



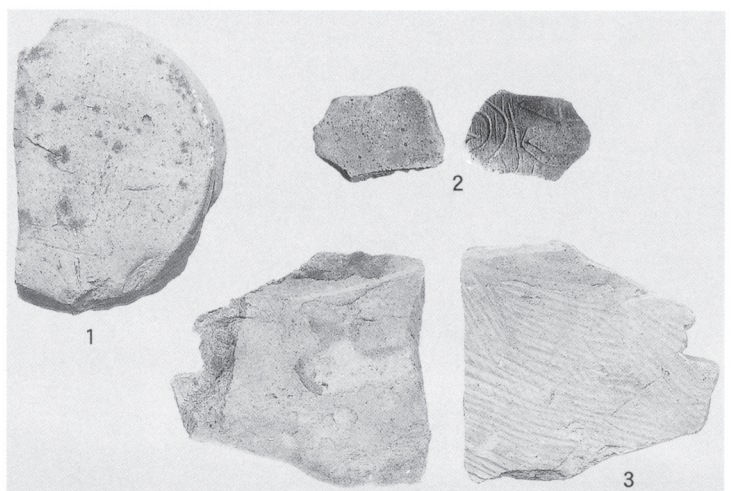
15トレンチ土層断面 南から



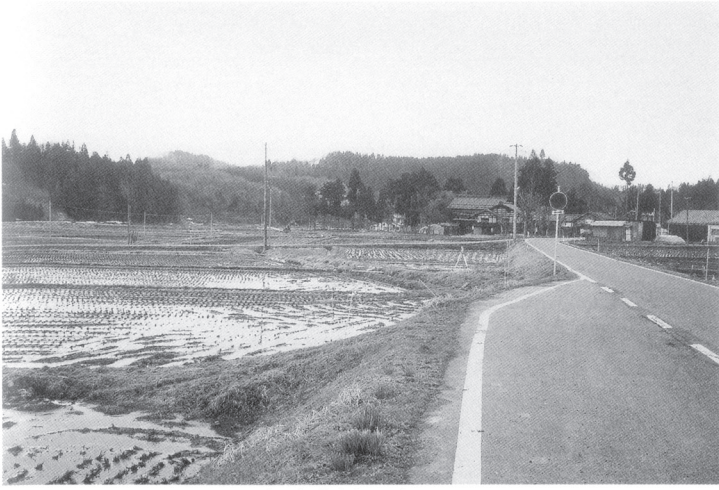
26トレンチ土層断面 南から



工事立ち会い状況



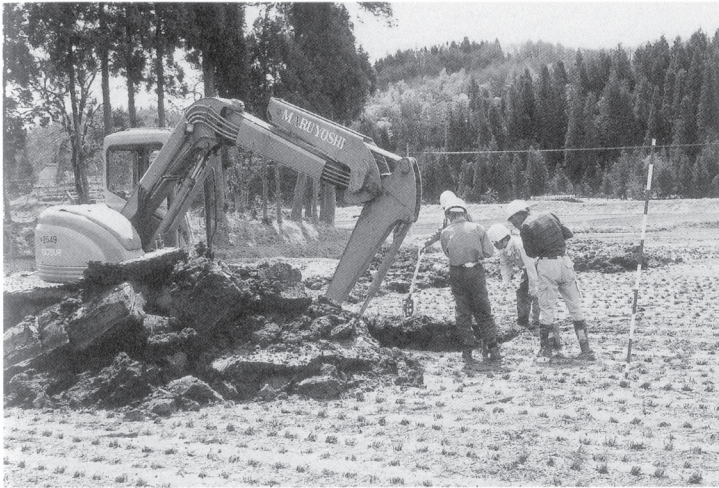
出土遺物



遺跡遠景 東から



遺跡遠景 南西から



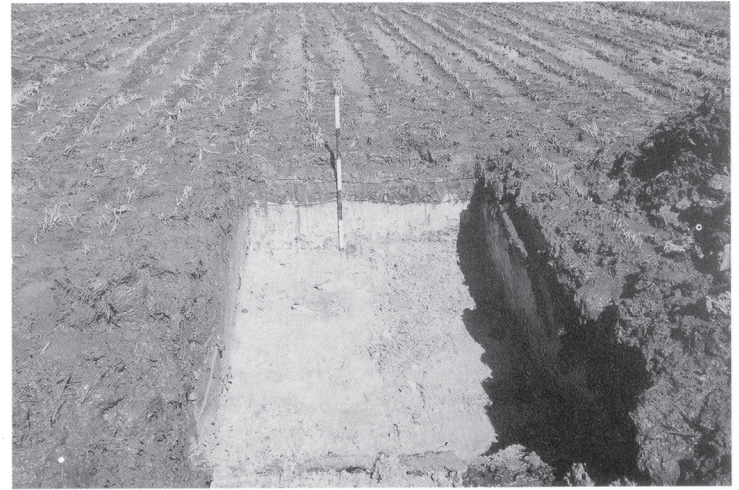
調査風景



調査風景



2トレンチ土層断面 南から



6トレンチ土層断面 西から



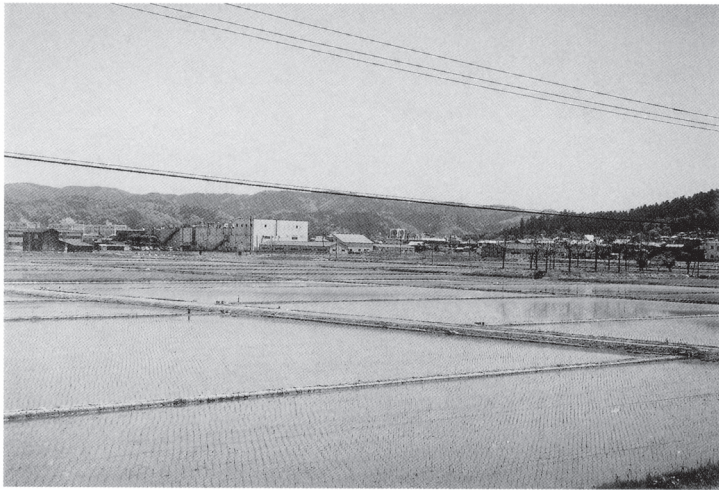
8トレンチ土層断面 東から



10トレンチ土層断面 西から



中沢遺跡周辺の空中写真



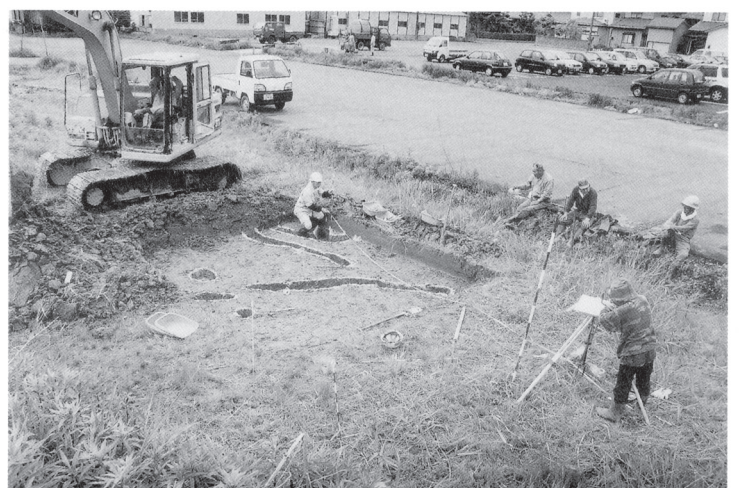
調査地遠景 南西から



調査地近景 南から



調査風景



調査風景



1トレンチ土層断面 東から



2トレンチ土層断面 東から



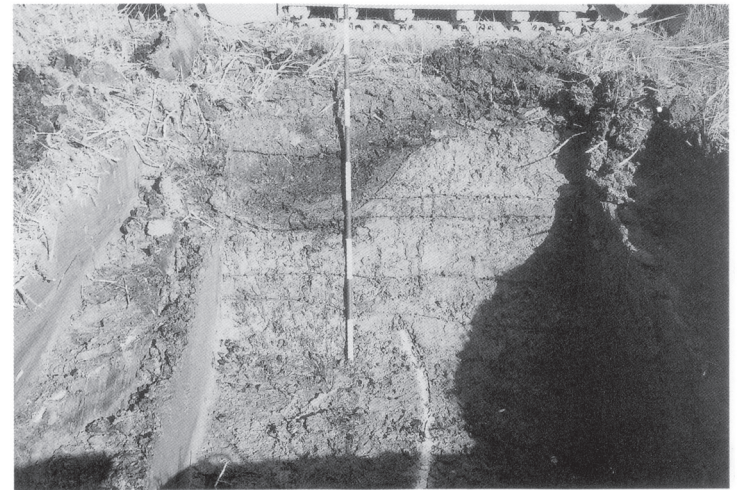
3トレンチ遺構確認状況 南西から



3トレンチ土層断面 南西から



4トレンチ遺構完掘状況 東から



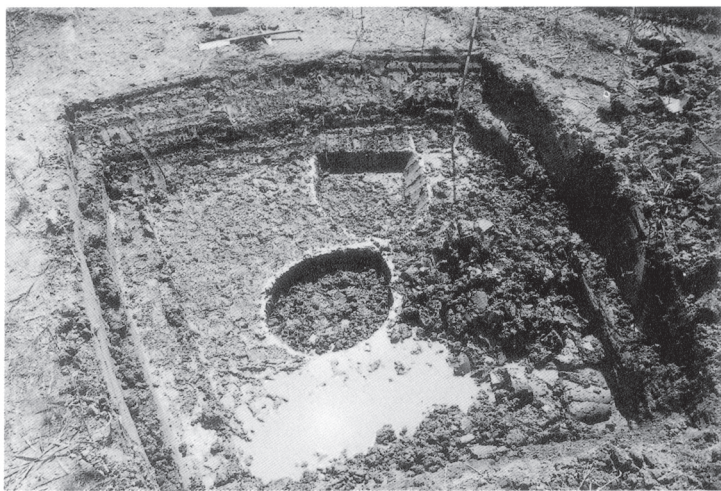
4トレンチ土層断面 北西から



5トレンチ土層断面 南東から



6トレンチ土層断面 北東から



7トレンチ遺構完掘状況 東から



8トレンチ上層面遺構完掘状況 北東から



8トレンチ中層面遺構確認状況 北東から



8トレンチ下層面遺構完掘状況 北から



8トレンチ土層断面 南東から



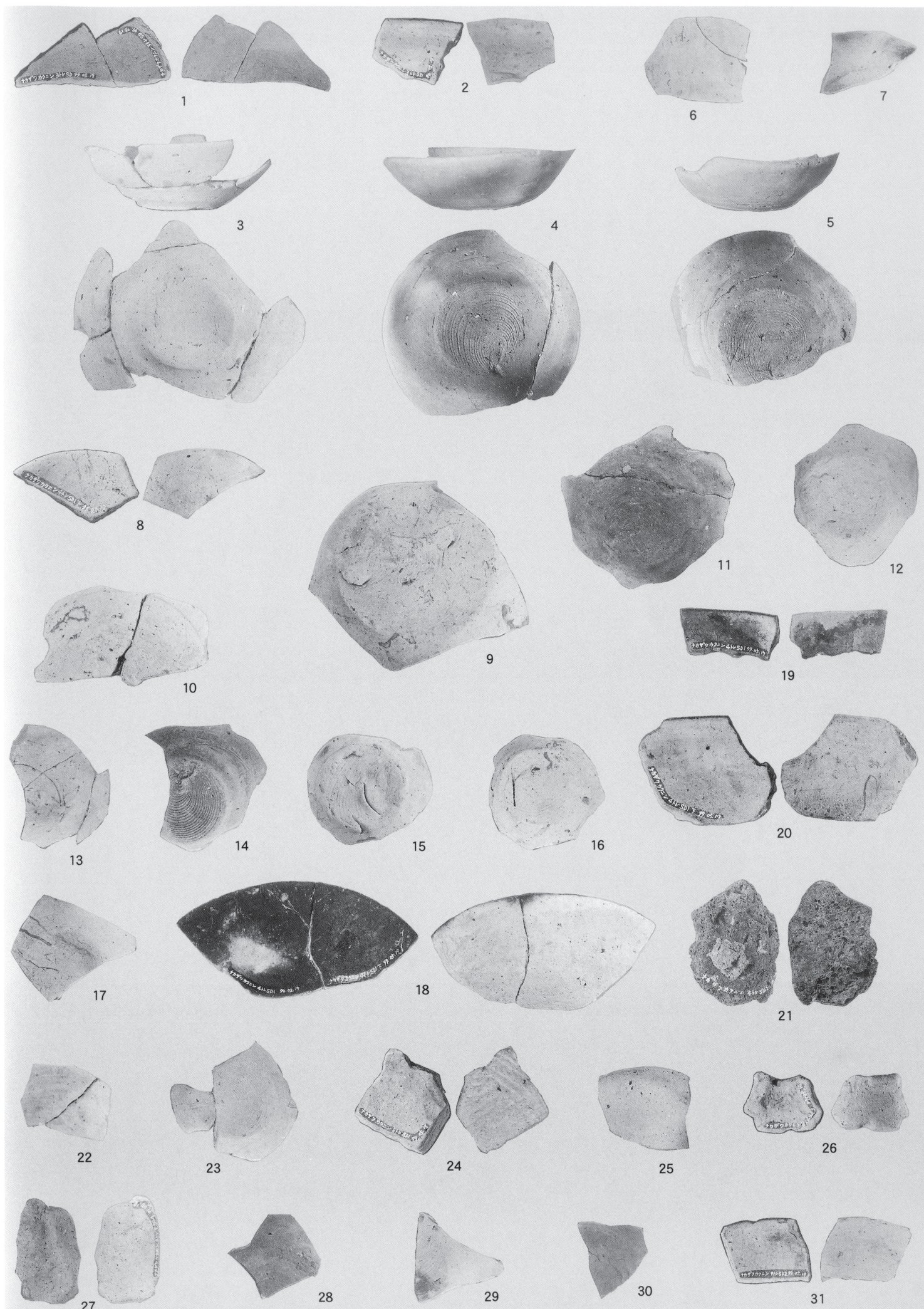
9トレンチ遺構完掘状況 北東から



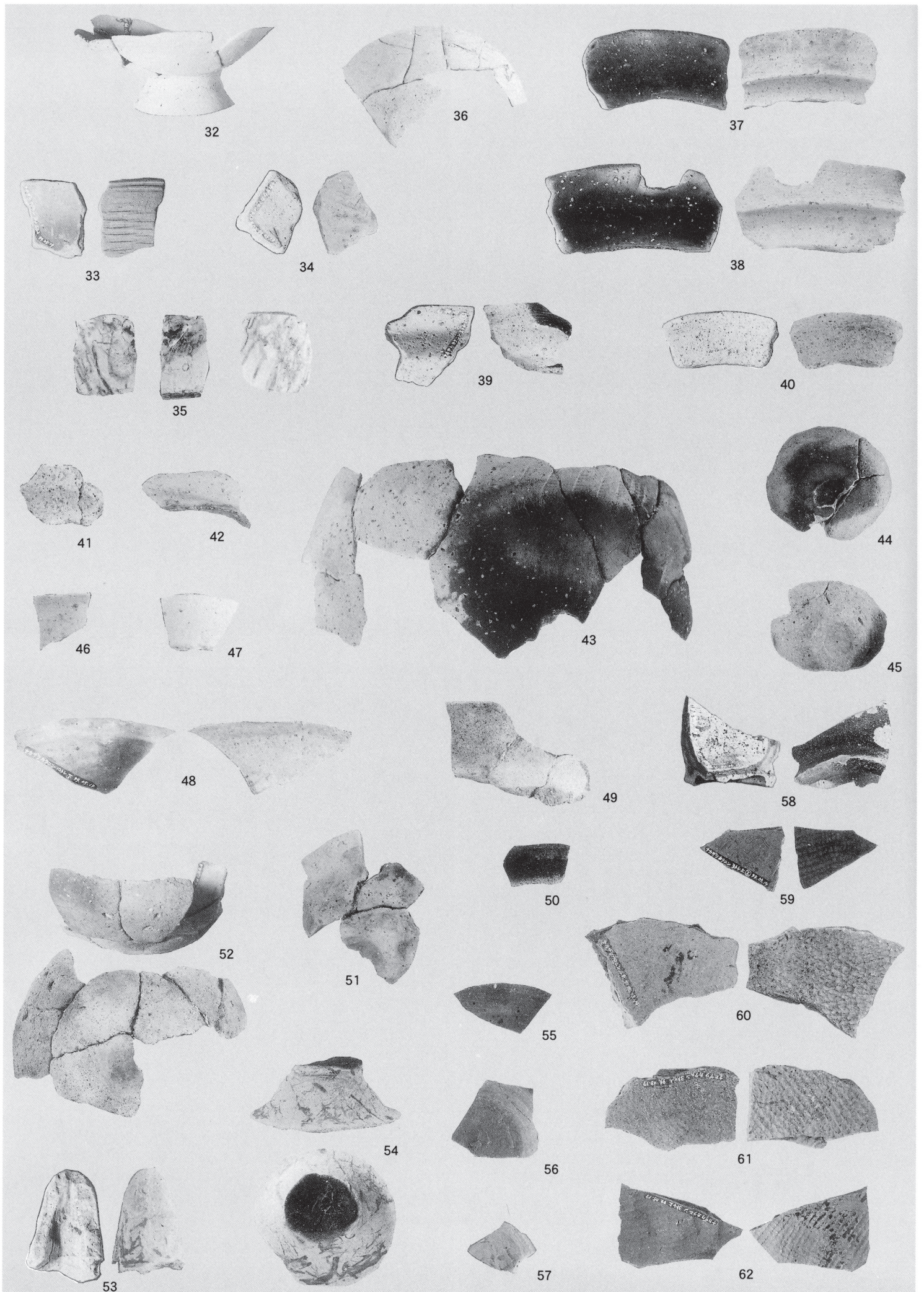
9トレンチ土層断面 北東から

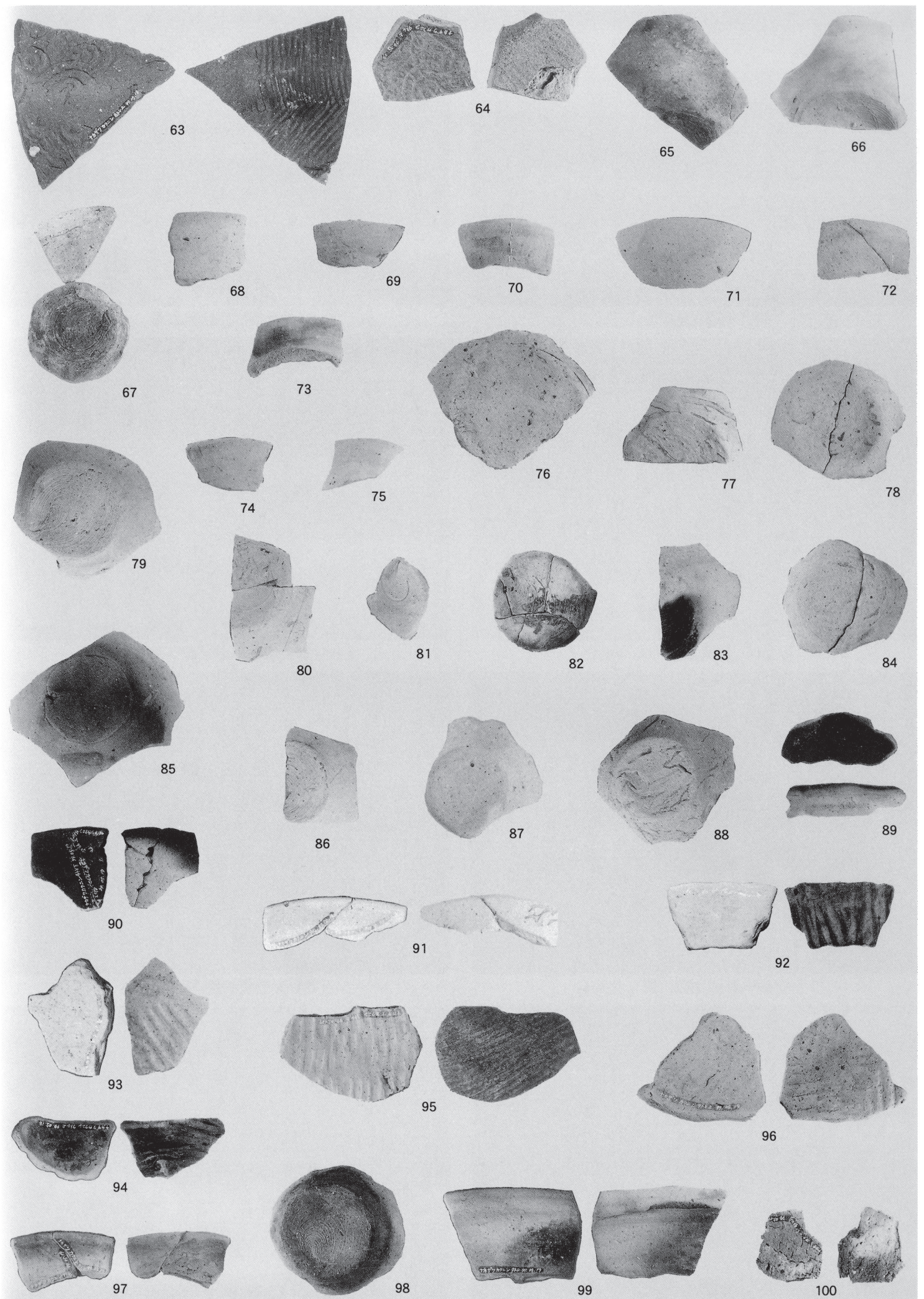


10トレンチ遺構完掘状況と土層断面 北東から



出土遺物





出土遺物



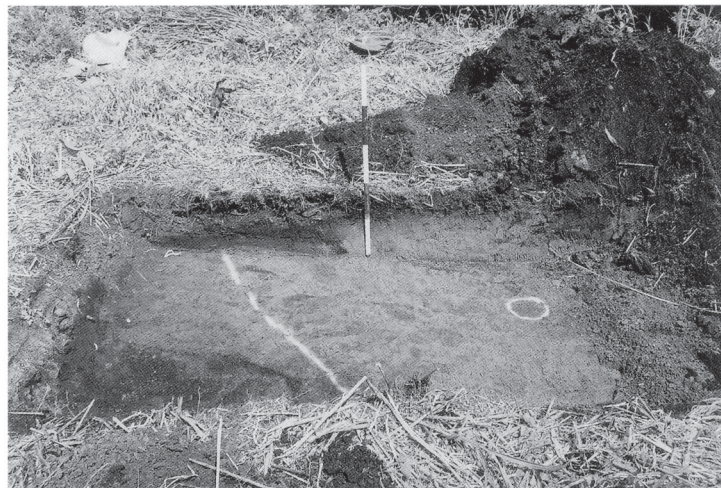
調査地近景 北から



調査風景



調査風景



1トレンチ遺構確認状況 南東から



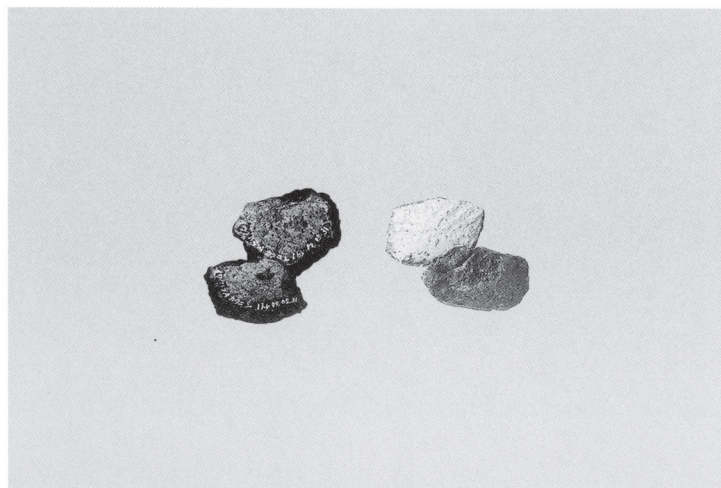
1トレンチ遺構完掘状況 北から



5トレンチ土層断面 南から



工事立ち会い状況



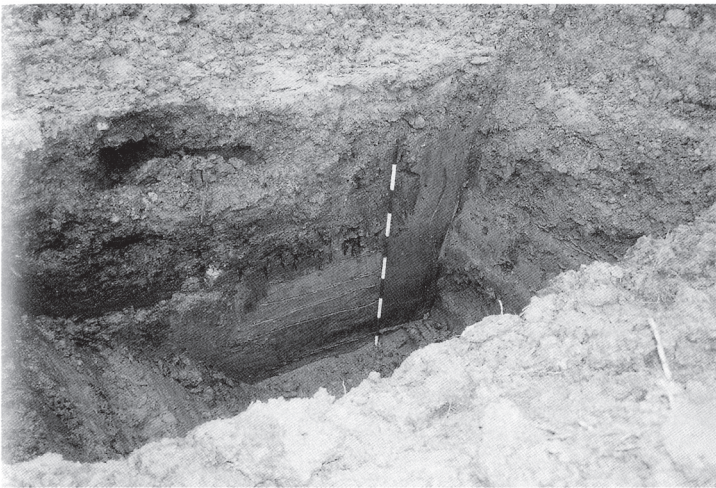
出土遺物



調査地近景 北から



調査風景



1トレンチ土層断面 南西から



1トレンチ完掘状況 西から



2トレンチ完掘状況 西から



3トレンチ土層断面 南西から



3トレンチ完掘状況 西から



出土遺物



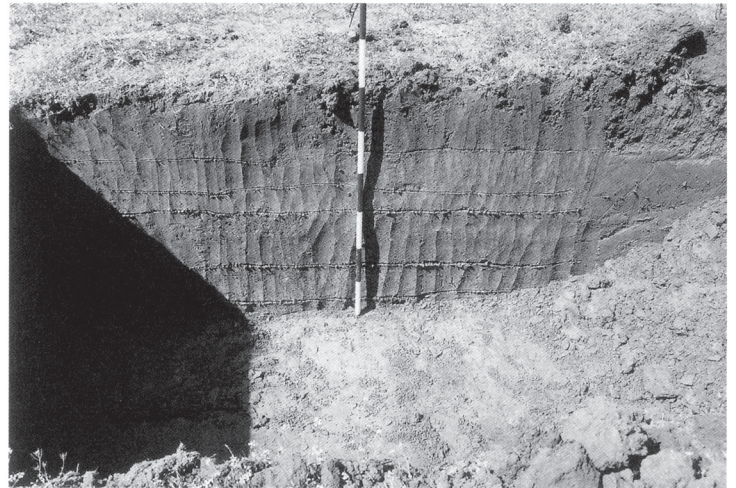
調査地近景 北から



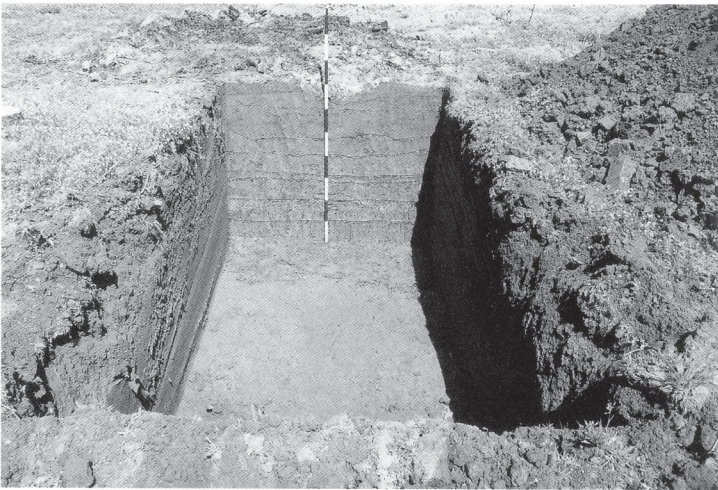
調査風景



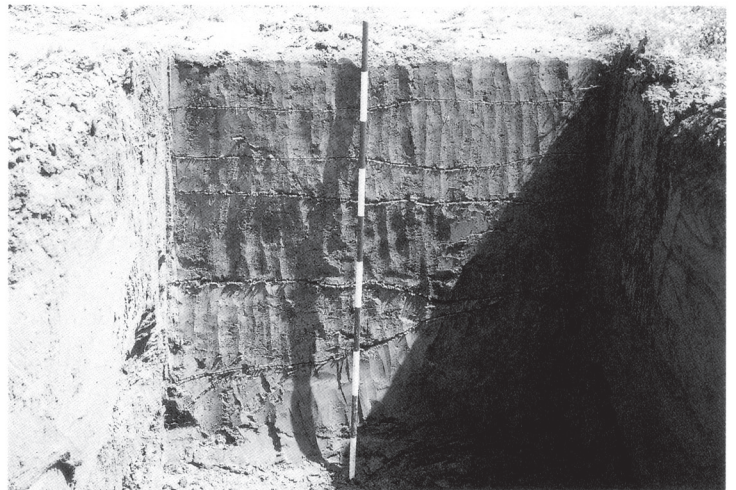
調査風景



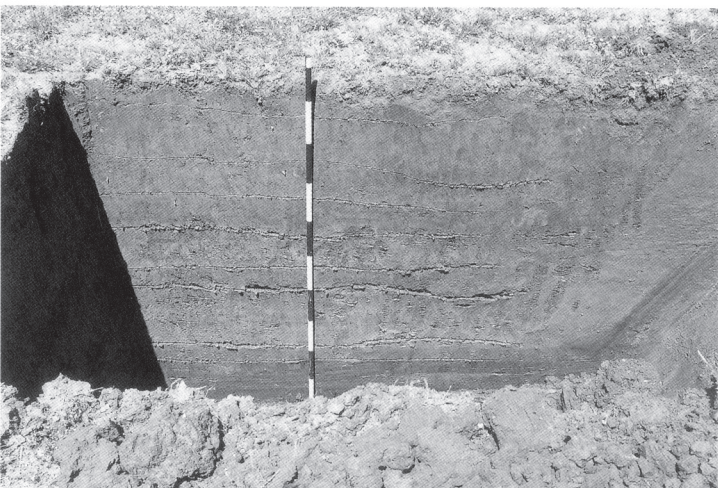
1トレンチ土層断面 北から



2トレンチ土層断面 東から



3トレンチ土層断面 南から



4トレンチ土層断面 東から



4トレンチ深掘状況 北から



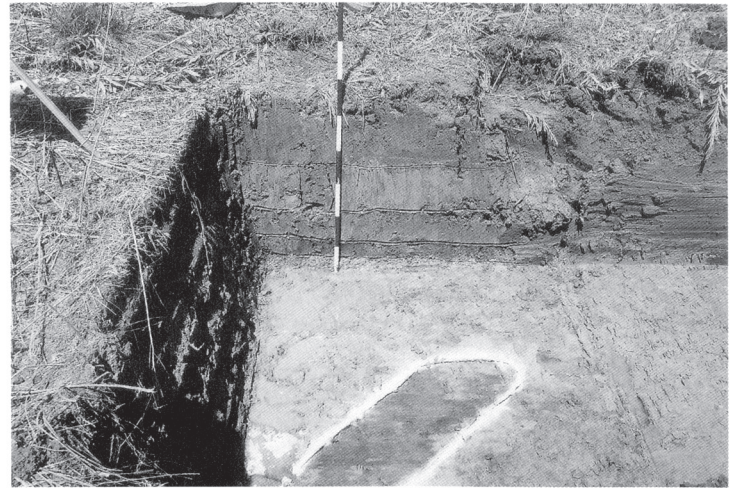
調査地近景 北から



調査風景



1トレンチ土層断面 東から



2トレンチ土層断面 東から



2トレンチ遺構確認状況 東から



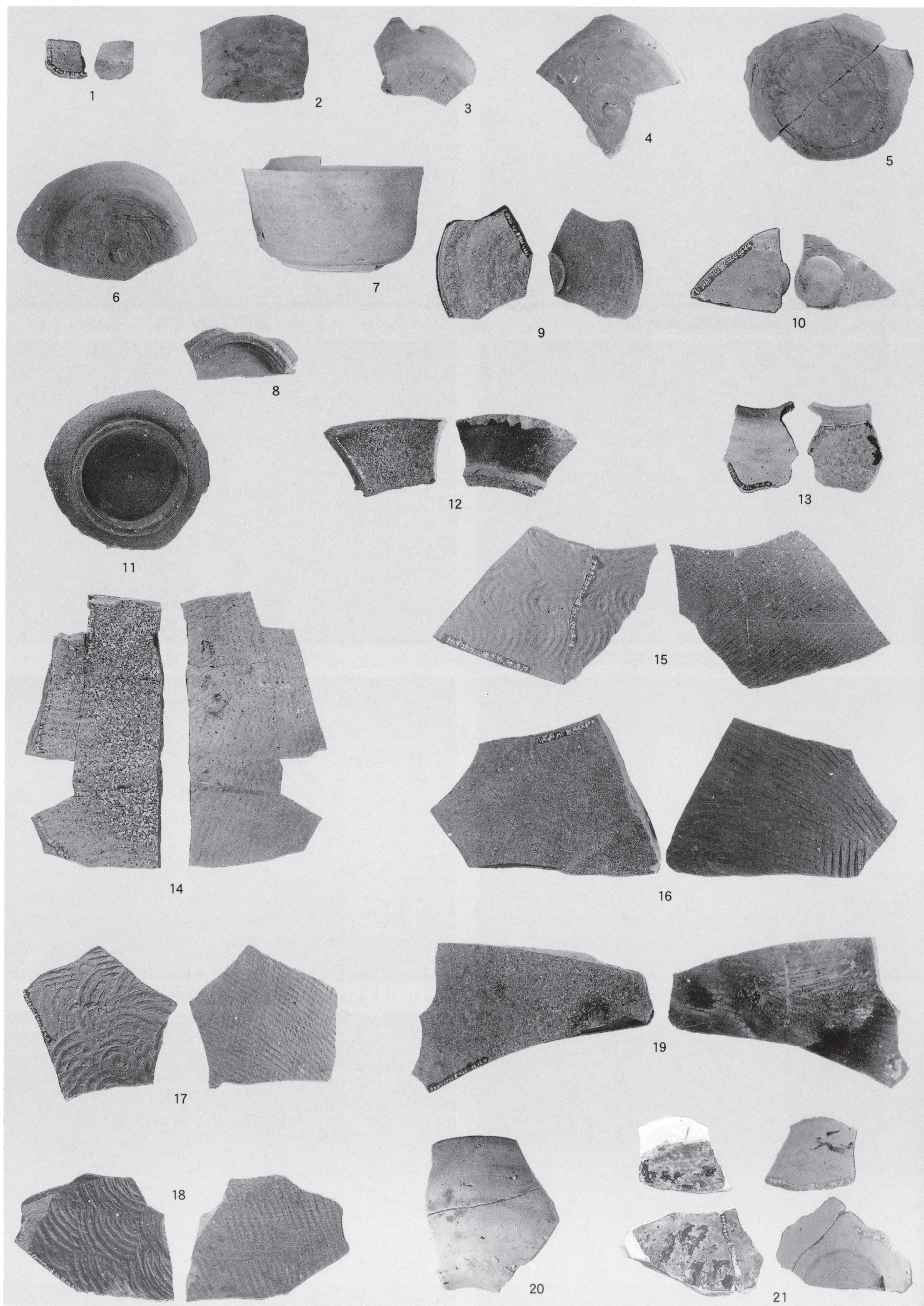
3トレンチ遺構確認状況と土層断面 北から

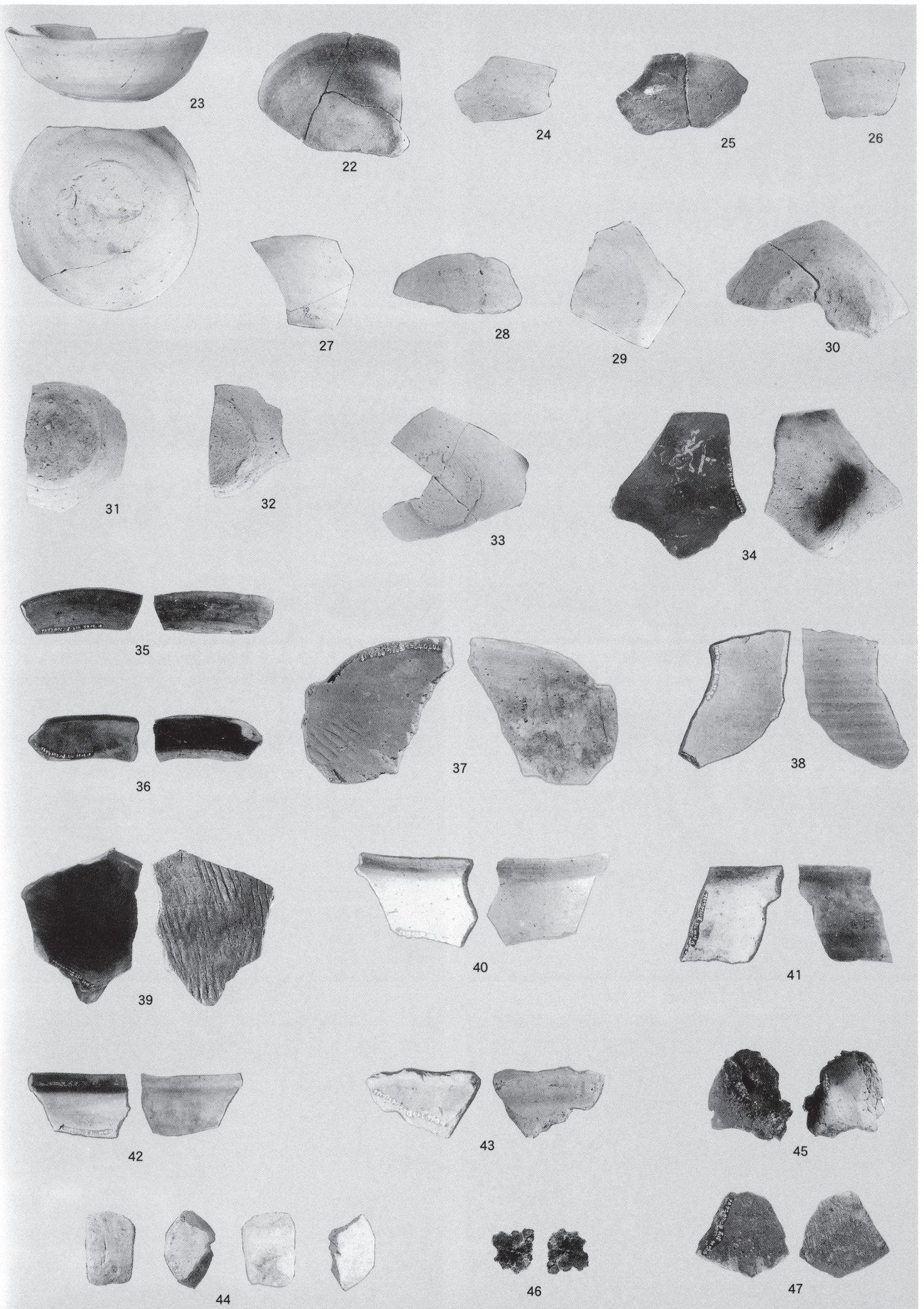


4トレンチ深掘状況 東から



5トレンチ遺構確認状況と土層断面 南から





出土遺物



調査地近景 南東から



調査風景



調査風景



1トレンチ土層断面 南東から



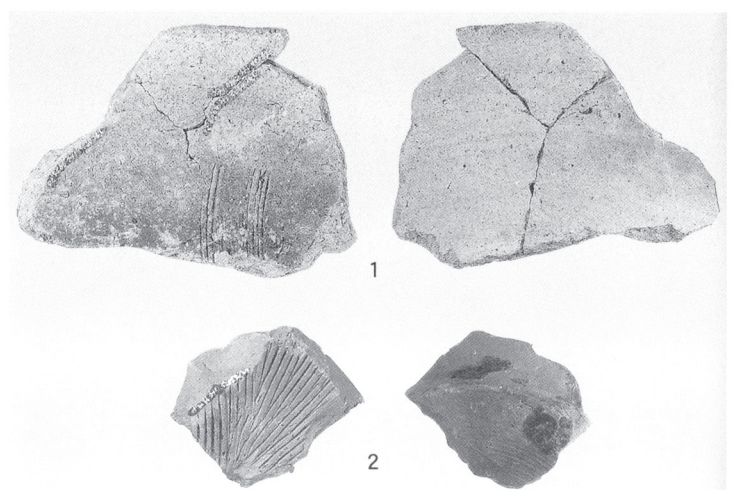
2トレンチ土層断面 南東から



3トレンチ土層断面 南から



3トレンチ完掘状況 北西から



出土遺物



21・22トレンチ周辺近景 南西から



27・34トレンチ周辺近景 東から



調査風景



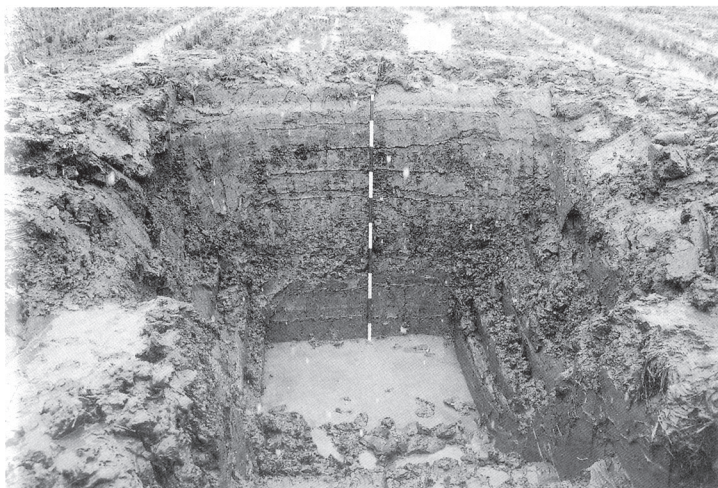
調査風景



2トレンチ土層断面 南から



6トレンチ土層断面 北から



7トレンチ土層断面 南から



9トレンチ土層断面 北から



11トレンチ土層断面 北から



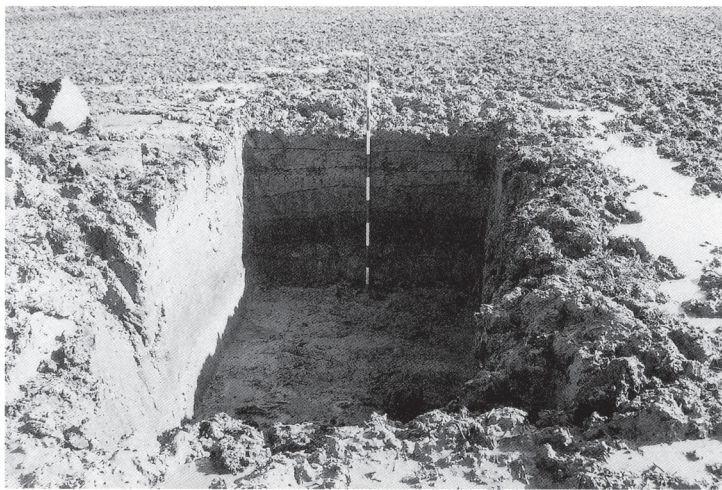
16トレンチ土層断面 南から



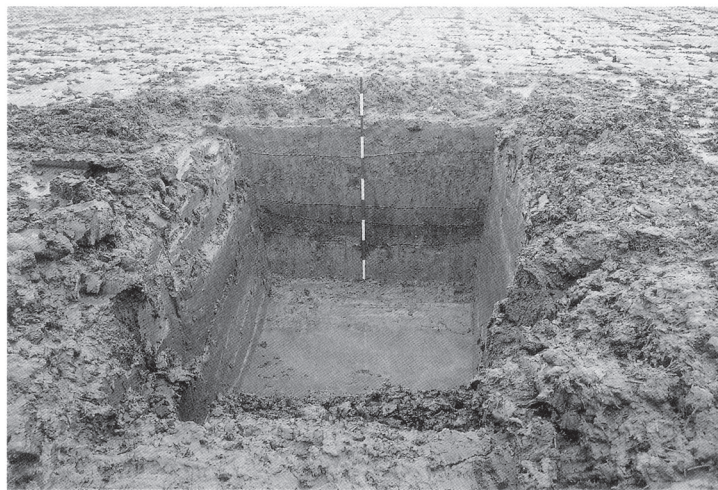
20トレンチ土層断面 南から



23トレンチ土層断面 南から



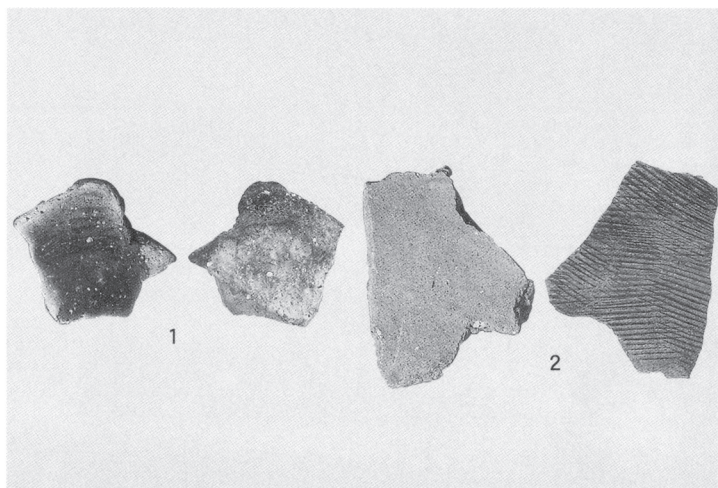
26トレンチ土層断面 西から



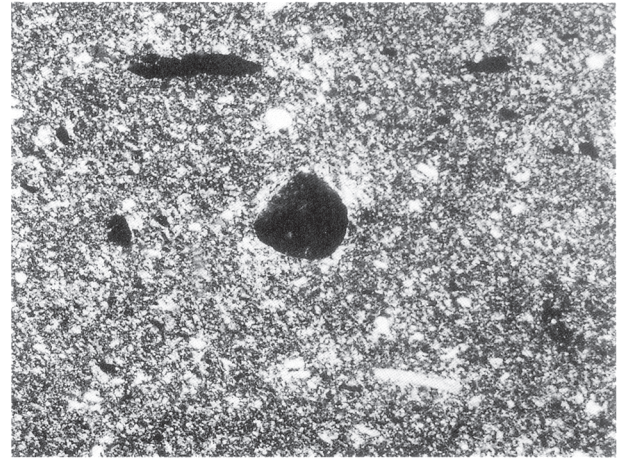
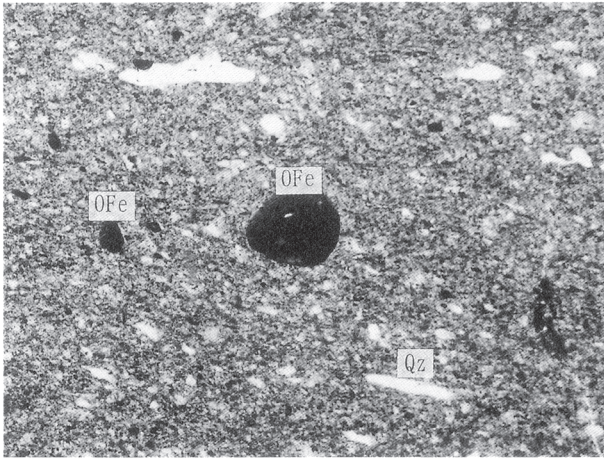
30トレンチ土層断面 西から



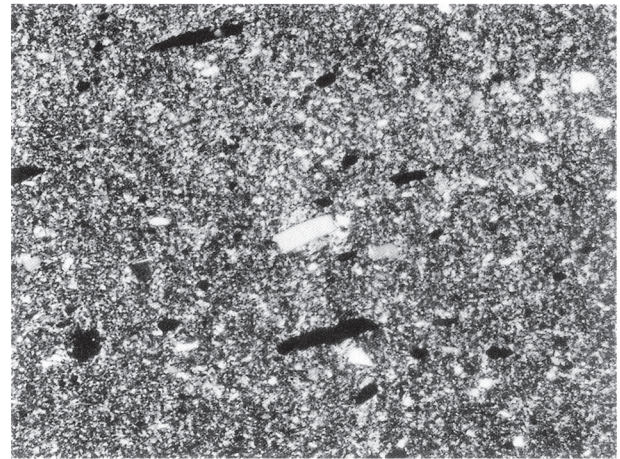
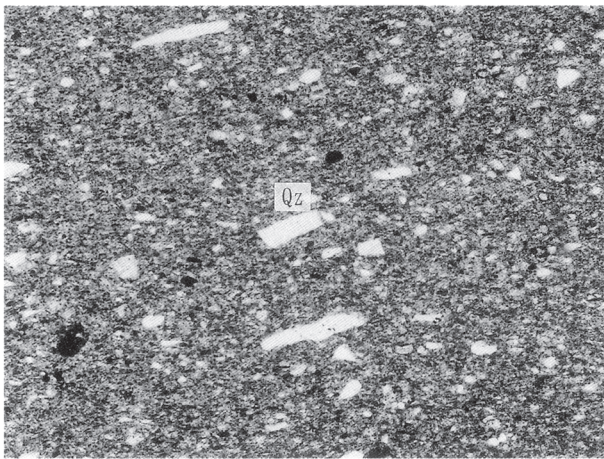
32トレンチ土層断面 東から



出土遺物



1.試料1 (ナカザワカクニン道5トレ990819 ; 40 (テープ貼付) 底部) 第32図21B 胎土薄片



2.試料2 (ナカザワカクニン道5トレ990819 ; 42 (テープ貼付) 胴部) 第32図21A 胎土薄片

Qz : 石英 . OFe : 酸化鉄
右側は下方ポーラー、左側は直交ポーラー

0.5mm

報告書抄録

ふりがな	かもしないいせきかくにんちょうさほうこくしょ
書名	平成11年度加茂市内遺跡確認調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	加茂市文化財調査報告書(11)
編著者名	伊藤秀和
編集機関	加茂市教育委員会 社会教育課
所在地	〒959-1313 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号 ☎(0256)52-0080
発行年月日	西暦 2000年5月19日

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たて屋敷遺跡	かもし おおあざしもおおたに 加茂市大字下大谷 あざいわの 字岩野492 他	15209	157	37度 36分 46秒	139度 7分 25秒	19990405～ 19990409	100	県営中山間地 域農村活性化 総合整備事業
こみどういせき 古見道遺跡	かもし おおあざしもおおたに 加茂市大字下大谷 あざこみどう 字古見道187 他	15209	156	37度 36分 44秒	139度 6分 58秒	19990409～ 19990412	45	県営中山間地 域農村活性化 総合整備事業
なかざわいせき 中沢遺跡	かもし おおあざげしよあざ 加茂市大字下条字 しばのおつ 芝野乙263 他	15209	119	37度 39分 15秒	139度 2分 14秒	19990517～ 19990519 19990818～ 19990819 19991027	130 89	民間開発 道路建設
いわのほらいせき 岩野原A遺跡	かもし おおあざくろみずあざ 加茂市大字黒水字 いわのおつ 岩野乙355-3 他	15209	9	37度 37分 57秒	139度 6分 14秒	19990531～ 19990601	32	民間開発
うまよせいせきしゅうへんち 馬寄遺跡周辺地	かもし おおあざ かもあざ 加茂市大字加茂字 うまよせ 馬寄2606-1 他	15209	123	37度 39分 48秒	139度 2分 24秒	19991213	20	民間開発
やまぶしづかいせき 山伏塚遺跡	かもし おおあざまえすだ 加茂市大字前須田 あざわりまえ 字割前201 他	15209	38	37度 41分 18秒	139度 0分 54秒	19990420	25	道路建設
ぶたいいせき 舞臺遺跡	かもし おおあざじょうじょう 加茂市大字上条 715-5 他	15209	140	37度 39分 27秒	139度 4分 3秒	19990820	29	道路建設
よこどいせき 横土居遺跡	かもし おおあざてんじんばやし 加茂市大字天神林 あざよこどい 字横土居1401 他	15209	115	37度 39分 42秒	139度 0分 45秒	20000106	39	吉津川地区県 営ほ場整備
いなりうらいせき 稲荷浦遺跡	かもし おおあざてんじんばやし 加茂市大字天神林 あざいなりうら 字稲荷浦1310 他	15209	114	37度 39分 45秒	139度 0分 36秒	19991217～ 19991218	27	吉津川地区県 営ほ場整備
にしよしづがわいせき 西吉津川遺跡	かもし おおあざてんじんばやし 加茂市大字天神林 あざにしよしづかわ 字西吉津川1045他	15209	118	37度 39分 27秒	139度 0分 59秒	20000120～ 20000124	36	吉津川地区県 営ほ場整備
てんじんばやしちない 天神林地内	かもし おおあざてんじんばやし 加茂市大字天神林 あざなべがた 字鍋湯 他	15209				19991216～ 20000120	196	吉津川地区県 営ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たて屋敷遺跡	包蔵地	中世		弥生土器、珠洲焼	
古見道遺跡	包蔵地	縄文時代			
中沢遺跡	集落跡	弥生～近世	溝、土坑、 ピット	弥生土器、土師器、須恵器 紡錘車、砥石、鉄滓	墨書土器
岩野原A遺跡	包蔵地	縄文時代	土坑?	縄文土器	
馬寄遺跡周辺地	包蔵地	古墳時代		古式土師器	
山伏塚遺跡	塚	中世?			
舞臺遺跡	集落跡	中世		珠洲焼、近世陶器	
横土居遺跡	包蔵地	古代			
稲荷浦遺跡	包蔵地	古代			
西吉津川遺跡	包蔵地	古代			
天神林地内				土師器、珠洲焼	

発行日 平成12年5月19日
加茂市文化財調査報告(11)

平成11年度 加茂市内遺跡確認調査報告書

たて屋敷遺跡・古見道遺跡・中沢遺跡・岩野原A遺跡
馬寄遺跡周辺地・山伏塚遺跡・舞臺遺跡・横土居遺跡
稲荷浦遺跡・西吉津川遺跡・天神林地内

発行者 加茂市教育委員会
新潟県加茂市幸町2丁目3番5号
☎ (0256) 52-0080

印刷所 有限会社 いとう印刷
新潟県加茂市駅前4番4号
☎ (0256) 52-0696